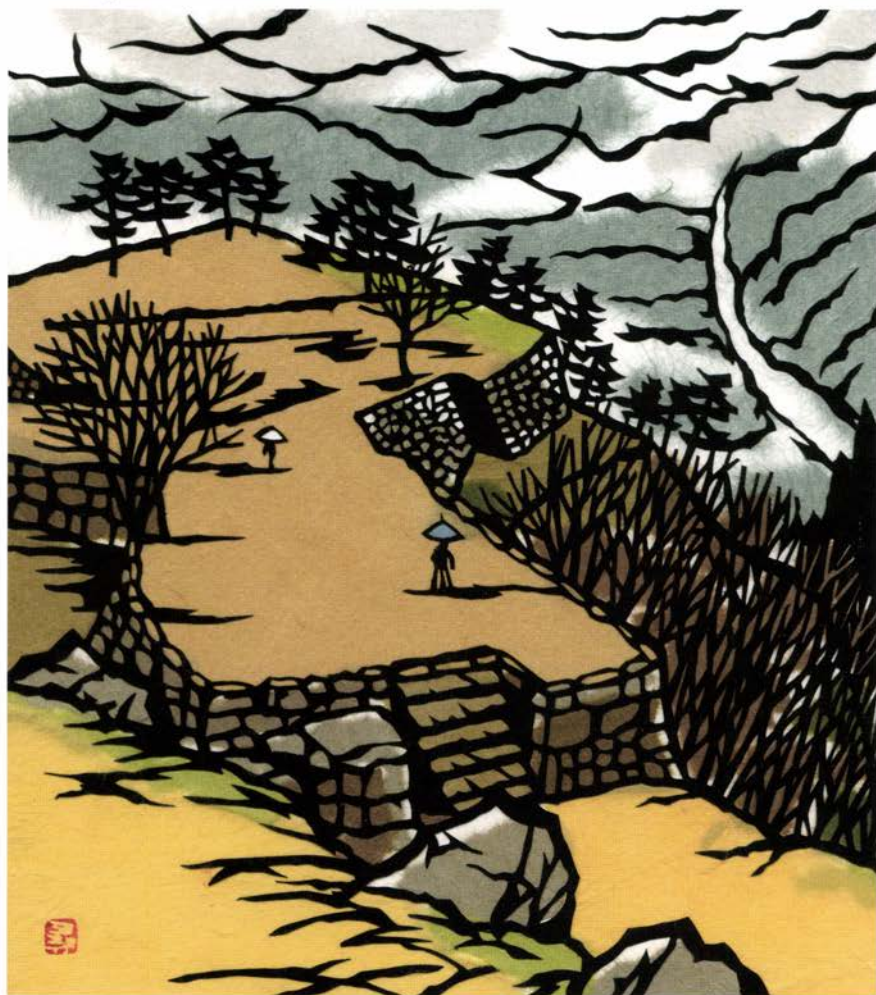


川柳塔

平成三十年三月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷一〇九〇号



日川協加盟

No.1090

三月号

第42回 全日本川柳2018年熊本大会

日時 平成30年6月10日(日) 午前9時開場
会場 熊本市市民会館 シアーズホーム夢ホール
〒860-0805 熊本市中央区桜町1-3

交通機関 JR「熊本駅」下車、バスで「熊本交通センター」下車徒歩2分
JR「熊本駅」下車、市電(約15分)で「花畑町」下車徒歩5分

主催 一般社団法人 全日本川柳協会・全日本川柳熊本大会実行委員会
後援 熊本県・熊本県教育委員会・熊本市・熊本市教育委員会
熊本県文化協会・熊本日日新聞社・NHK熊本放送局
熊本朝日放送・RKK・KKT・TKU・FM79.1・FMK

宿題 第一部 4月15日締切(当日消印有効)
事前投句 一般(高校生も含む) 部門

「豊」か 荻原美和子 選 「座」 麻井 文博 選
「とんとん」 駒木 香苑 選 「火」 松村 華菜 選

事前投句 ジュニア(小・中学生) 部門
「豊」か 高鶴 礼子 選 「座」 平井 義雄 選

「パワ」 大野 征子 選
専用用紙のない方は2×16cmの句箋一枚に一句を記入、各題二句無記名。
封筒の裏面に住所、氏名明記。

投句料 1,000円(定額小為替・現金書留)を同封して左記宛に郵送
または郵便振替口座へ送金のこと(当日消印有効)。
小中高生は投句料無料。

投句先 〒530-0041 大阪市北区天神橋2丁目北1-11-905
一般社団法人 全日本川柳協会 宛

〒06(6352)2210 FAX 06(6352)2433
郵便振替口座 00970-9-3575

講演 「熊本城が見た熊本城400年 講師・熊本県文化協会会長 吉丸 良治 様
宿題 第二部(当日投句・11時20分締切)
「パワ」上村 脩 選 「譲」る 堀本 清美 選

第二次選者 「草」高木 勇三 選 各題二句、当日配布の句箋に記入。
竹本 龍太郎 本田 智彦 岡崎 守

参加費他 四、〇〇〇円 (参加費二、〇〇〇円・昼食、記念品二、〇〇〇円)
表 影 (1)文部科学大臣賞 (2)参議院議長賞 (3)川柳大賞

(4)大会賞 (5)ジュニア部門は賞状とメダル
全日本川柳熊本大会実行委員長 平田 朝子

〈表彰式典・前夜祭のご案内〉

◎表彰式典 平成30年6月9日(土) 17時30分から
川柳文学賞・功労者・大会連続参加者
大会連続参加者の表彰は自己申告のため日川協事務局まで申請してください。

◎前夜祭 表彰式典後、同一会場
会場 ホテル日航熊本 5F 阿蘇
〒860-8536 熊本市中央区上通町2-1

参加費 八、〇〇〇円(会食・アトラクション)
大会・前夜祭のお問い合わせ先
〒862-0907 熊本市東区水源1-5-15 平田 朝子 方

全日本川柳熊本大会実行委員会事務局 宛
TEL FAX 096(369)7777

郵便振替口座番号 01730-00145058
大会・前夜祭の参加費の送金先 4月15日締切

〈宿泊のご案内〉

宿泊 (一泊朝食付き・お一人様/税金・サービス料込)
ホテル日航熊本・アークホテル熊本城前・ジールホテル水道町

観光 A 「熊本城・水前寺成趣園コース」
6月9日(土)午後1時30分〜午後4時20分 4,500円
募集人員 最少催行人員20名様

B 「天草五橋クルージング・世界遺産三角西港コース(昼食付)」
6月11日(月)午前9時〜午後3時30分 11,500円
募集人員 最少催行人員20名様

※集合場所はA、Bとも「桜の馬場 城彩苑」
宿泊・観光の申し込み、問い合わせ先
九州産交ツーリズム株式会社 法人団体営業課 (担当)花田

TEL 096(325)8240 FAX 096(323)1777
※宿泊及び観光のお申し込みは専用の申込用紙にご記入の上、
FAXにてお申し込みください。

中国！ちゅーもくラジオ

小島 蘭 幸

昨年末、NHK広島放送センターのラジオスタジオで、生まれて初めてラジオの収録をしました。聞き手がひるまえ川柳で時々一緒にいる福田アナウンサーでしたので、約1時間30分緊張することなく収録することが出来ました。事前に質問内容を読んでいたもので、原稿をバッチリ書いていたのですが、質問に間髪を容れず答えなければならませんでした。そんなので原稿を見る余裕はありませんでした。

質問の内容は次の通りです。

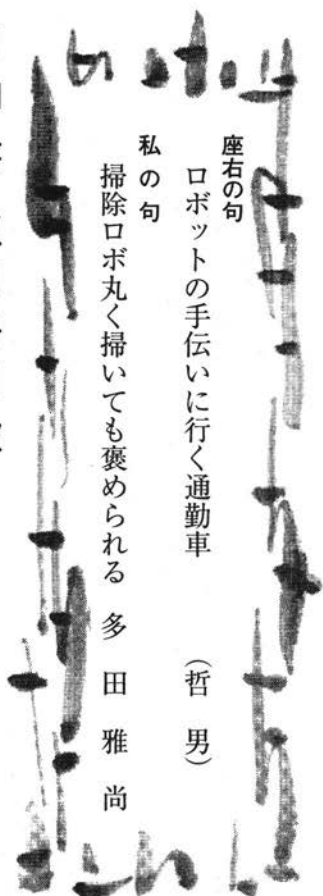
- ① 一般社団法人全日本川柳協会とは？
- ② 理事長のお仕事とは？
- ③ そもそも小島さんの川柳の出会いとは？
- ④ 当時どのように川柳に取り組んでいたのでしょうか
- ⑤ 社会人としての仕事と川柳の両立は？
- ⑥ 川柳大会で印象に残っているエピソードは？
- ⑦ 初心者はどのように取り組めばよいのか？

- ⑧ 川柳の変化についてのお考えを教えてください、NHKラジオの「ぼやき川柳」、毎年話題になる「サラーマン川柳」などについてどのように考えていますか？
- ⑨ 俳句と川柳の違いは？
- ⑩ 現在の活動を教えてください、102歳の方が川柳に取り組んでいらっしゃる様子？
- ⑪ 選者の難しさ、大会の魅力は？
- ⑫ 二〇一八年、一般社団法人全日本川柳協会理事長として、取り組みたいことを教えてください。

だいたいこのような質問でした。1月5日「中国！ちゅーもくラジオ」この人に聞くのコーナーで放送されました。放送時間は25分でしたが、嬉しかったのは今一番言いたかったことを中国地方の皆さんに発信出来たことです。理事長として初めての全日本川柳熊本大会を成功させること。若い人はもちろん、高齢者の皆さんも川柳をはじめていただきたいこと。川柳は一人で楽しむこともいいのですが、会に所属して、句会、大会を楽しんでいただきたいこと等々。放送終了後、ある方から録音テープを句会で聞いていますと、嬉しいお便りをいただきました。

川柳塔 三月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「但馬・竹田城跡」



座右の句

ロボットの手伝いに行く通勤車

(哲男)

私の句

掃除ロボ丸く掃いても褒められる 多田雅尚

■巻頭言 中国！ちゅうもくラジオ

小島蘭幸……(1)

責任は誰に……

竹治ちかし……(2)

川柳塔(同人吟)……

小島蘭幸選……(4)

自選集……

水野黒兎……(47)

■ショートエッセイ(伯夷・叔斉と薫風先生)……

木津川 計……(48)

温故知新……

川上大輪選……(50)

川柳塔の川柳讃歌 ⑧……

吉村侑久代……(69)

橘高薫風句抄……

新家完司選……(72)

水煙抄……

山口光久・斉尾くにこ共選……(76)

句集の森……

英語 de Senryu ⑥……

俳風柳多留一二篇研究 57……

愛染帖……

檸檬抄「もっと」……

責任は誰に

竹治 ちかし

日本には、昔から他人を思いやるという「美しい心」がありました。それがこの頃は逆に、思いやられる方が強くなったのか、何でもかんでも聞いてなかった知らなかったというように、責任を他人に押し付けるような、世になっているような気がしてなりません。

そんなある時、新聞でパチンコ屋の宣伝チラシを見て驚きました。そこには、「パチンコ・パチスロは適度に楽しむ遊びです。のめり込みに注意しましょう」とこ丁寧な但し書きがあったからです。

そう言えば煙草にしても箱の外側に「喫煙はあなたにとって肺がんの原因の一つとなります。死亡する危険性が約二倍から四倍高くなります。」とかその上、罹りやすい病名なども詳しく書いてあります。これは、世界的な申し合わせなので仕方のないことだそうです。「そこまでやるか」という気がして、新聞を見ていると、宝

せんりゅう飛行船 ⑧7

新家完司 …… (79)

一路集〔手抜き〕

木田比呂朗選 …… (80)

〔新品〕

川名洋子選 …… (81)

初歩教室「ピンク」

居谷真理子 …… (82)

川柳塔鑑賞

前たもつ …… (84)

水煙抄鑑賞

太田扶美代 …… (86)

川柳塔WEB句会「静か」

居谷真理子共選 …… (87)

インスピレーション・ナビ 印象吟

大西泰世 …… (88)

追悼 藤井正雄さんを悼む

西出楓楽 …… (90)

追悼 両川洋々さんを偲んで

夏目一粹 …… (91)

二月本社句会

弘津秋の子 …… (92)

句会燦燦

各地柳壇（佳句地十選／水野黒兎・古今堂蕉子）

二月各地句会案内

柳界展望 …… (97)

柳界展望

■編集後記（ひとこと／川崎ひかり）

朱夏・憲彦 …… (114)

朱夏・憲彦 …… (114)

座右の句

最初に言うか最後に吐くかありがとう

（おさむ）

私の句

苦も楽も点景であり雲流る

藤成操 江

藤成操 江

くじの当選発表欄には、「詐欺に注意・当選番号が事前に分かることはありません」との但し書きが付いていました。そのほかにも、最近、島根県では、交通取り締まりを、ご丁寧にと場所を新聞で公表しています。それも驚きですが、その横には「取り締まりは掲載した路線以外でも実施したり」、変更中止したりすることがあります」との事。冬になってテレビを付ければ、「雪道ではポケットに手を入れないで、歩幅を狭くして歩きましょう」と。あれもこれも開いた口がふさがりません。

聞いた話なのですが、アメリカとカナダの間にあるナイアガラの滝には、周辺に転落防止の柵などが無いとか。アメリカではそれは当たり前ことで、何かあってもそれは、自己責任の範囲だからそうです。日本においては、危険と思われる所には何か処置をして置かなければ、すぐに管理者の責任が問われます。どうなっているのでしょうか。こんなおかしな世の中にしたのは、それこそ誰の責任なのでしょうか。



小島蘭幸選

唐津市 坂本蜂朗

真つ直ぐな子が似たような嫁という

童顔を消し甲子園目差す孫

青い目の婿との握手つい力む

ときめいた過去と肩組み飲んで

靴下の臭いも影も薄くなる

地獄への列に腰掛け置いてある

鳥取市 岸本宏章

月へ行く「HAKUTO」にかける春の夢

丸い背を正せと影に叱られる

教育勅語教えたかった安倍夫人

長生きをするにはもつと金が必要

ライバルも同じサブリを飲んで

スピッツがドーベルマンにまた吠えた

橿原市 居谷真理子

立ち話乳房片方取りました

やや苦手花の名前を知る男

鬼になるその寸前を救われる

渾身の言葉力まぬように書く

友達のないビー玉は王である

大いなる樹だ歳月が立っている

東かがわ市 川崎ひかり

孫が来る毛布ロングに買い代える

設置した監視カメラに監視され

アルパカの毛布のような亡夫を恋う

人さまに見せぬ涙を知る枕

甘辛を形にすれば母になる

また今日もひと日誰とも話さない

沖縄県 森山文切

長い廊下もう私しか歩かない

追伸のどこにも句読点がない

向日葵の絵も枯れそうに見えてくる

心音が遠くに行きたがっている

じいさんの椅子は座るたびに軋む

正夢になると予言をする枕

弘前市 高瀬霜石

弁解はしない説明ならばする

定年になったら妻の反抗期

特売の品であふれる冷凍庫

庶民だが弱者と呼ばれたくはない

病院の窓から見える梅 桜

そろそろかそろそろだろうなあ 計報

岸和田市 岩佐ダン吉

限界だなんて軽くはないですか

真っ先にいつも私は手を上げる

汗かかぬ道を選んだ悔いがある

時どきは影に叱咤をされている

問われたら幸せですと言うてやる

聞き上手心の広さなんだろう

大阪市 平井美智子

逢えぬ夜の雨が想いを深くする

返信に小さな丸がある葉書

顔色は良いと鏡に言い聞かせ

重ね塗りしたらまだまだ良い女

力布つけて乗り切る曲り角

ラの音で歩こう今日が新しい

大阪市 谷口義

年賀状がお見舞い状になっている

おばあさんの素質は充分にあった

12時と6時はご飯を食べてます

直筆で書かねばならぬ日記帳

手ぶらで行くあの世レンタル出来ますか

何時に帰って来ますと言ったことがない

和歌山市 上田紀子

冒険へ挑戦明日も旅続く

年金が決める暮らしのアラカルト

合掌を解けば欲が軋げ落ち

いろはにほ越えれば春がやってくる

郷愁を北風小僧攫って

常識を非常識だと言う世間

神戸市 細川花門

新年も笑って暮らそうじゃないか妻よ

人間の欲が福笹重くする

枯れ草の種はどっこい生きている

かぎ針であなたの影を編んでます

置き炬燵猫に遠慮の脚のばす

ゆっくりと参ろう春はもう間近

大阪市 栃尾奏子

赤はカリスマ全ての色を従えて

白は頑固でそう簡単に折れません

受け入れて許して灰色の柔和

紫が愛とは奪うものと言ひ

かみさまも涙も愛も透明だ

命あるもの金色に輝いて

男鹿市 伊藤 のぶよし

スタートは任せてくれと春が咲く
湯豆腐にこころの冷えを覗かれる
一も二もなく加齢とは哀しいね
豪快な回顧録にも染みのあと
かさ蓋の下に息づく不屈の芽
近くまでは努力努力を持ち歩く

三原市 鴨田 昭紀

社会変化の波に乘れない影法師
真実をばかすキャンパスの絵筆
重責を担って軋みだす背骨

母さんを待つ鍵っ子のシルエツト
ダイサーピスで母が無心に戯れる
非正規の汗が浮き輪に届かない

和歌山市 堀 富美子

ファミリィで祝杯あげる初春の膳
年賀来る孫等の添え字の温かさ
口癖のアカンに誰も振り向かぬ
母の歳とつくに生きてなお未熟
忍の字の緩む私を持て余す
大吉にもうひと旗の夢を抱く

八幡市 今井 万紗子

老いても尚夢の続きはたんとある
子等の夢笑顔はみ出るクレヨン画
淋しくないか春風そつと抱きにくる

堪忍袋とうの昔に破れてる
共白髪熱爛二合差し向かい
もしもの時素直になれる友がいる

大阪市 榎本 舞夢

専業主婦カルチャー通いいい刺激
新しい友増え老後たのしめる
年金の枠で楽しむこと覚え
今までと違う世界で生きている
おしゃべりも未知の世界の勉強に
一人歩き出来る私を喜んで

大阪市 笠嶋 恵美

書類整理どんどん捨てて新境地
抽出しはいろんなものが住む魔界
手縫いするやさしい気持沸く不思議
手作りの作務衣が似合うお正月
元旦に子等が来た来た運も来た
元氣出る友から届くカレンダー

鳥取市 岸本 孝子

北国を思えば寒さ序の口だ
八十路など序の口先はまだ長い
転ぶから雪の降る日は出歩かぬ
更地には老人ホームばかり建つ
誉められたレシピファイルにして残す
ダイエツトの記事を集めていたファイル

松山市 栗田忠士

過信した元氣に足をすくわれる

五七五眠る海馬を叱咤する

おずおずと居場所を探すスモーカー

除夜の鐘テレビが流す音で明け

鬼は外鬼に悲しい四面楚歌

松山市 古手川 光

ちちんぷいぷい言うてもあかん病院へ

僕と妻入院ごっこしています

こつこつと貯め病院に持ってかれ

紳さま私悪い事しましたか

がた来てる僕へ足腰まで謀叛

松山市 宮尾 みのり

逝く刻はかくあれかしと万華鏡

ふと我に戻ると消えた万華鏡

これは夢夢の中でもそう思う

ご近所はこちらの事情など知らず

八十の骨身に負荷が掛かり過ぎ

松山市 柳田 かおる

目標を書いてわたしを動かせる

オンリーワン比べる事をやめました

寒風に耐えた野菜の深い艶

お肌にはとても苦手な紫外線

芸術を産む布のハシくれ

大洲市 中居善信

生きるのに大樹の下を選んでる

語りかけるように歌なら歌わんか

楽に勝つつもり時々はたきこみ

来るぞ来るぞと脅されている地震

五十年住んで空気にならぬ妻

西予市 黒田茂代

追っかけているうち小さくなった夢

我を張らぬよう滅入らないよう生きる

今日もまた我欲と相撲取っている

だまし絵に素直に騙されるわたし

丹頂と品格競うコウノトリ

西予市 西田美恵子

言葉足して足して祝いの席に着く

知恵袋借りに行こうか古里へ

無防備なそんなあなたの顔が好き

風呂敷一枚広げ私の城にする

大丈夫笑って生きる手があった

高知市 小澤幸泉

耐えられる独り見にゆく冬の海

クリスマス孤独の部屋は静かなり

「文化の日」明治が近くなり始め

父母の許へ帰ろう流れ星

ぎごちなく太箸握る孫二歳

土佐清水市 辻 内 次 根

まだ生きる心算一年否二年

そのまに八十歳の正誤表

暖房の吹き出し口にある孤独

眠い時眠る気儘な一軒家

山峡の里の日暮れは十三時

北九州市 小 松 紀 子

年はじめ夢も希望もたとあり

けんかする相手たまにはほしい時

感動で流す涙がまだあった

喜寿の春することまだまだこれからだ

満ち足りた質素なくらしまるく生き

唐津市 山 口 高 明

尖塔の十字架朝の陽を弾く

古伊万里の絵柄が透けるフグの刺し

国民の為は二の次三の次

春雨に濡れて粹がる年で無し

人攫う国が道義を持ち出され

熊本県 岩 切 康 子

歯科で会い眼科でも逢う趣味仲間

餅搗を止めて餅買う日を定め

寝正月三日経ったら神が呼ぶ

自愛過ぎ自滅の体作っていた

高血糖カロリー減らす土を打つ

熊本市 杉 野 羅 天

地震忘れるなど元旦に地震

台風に負けぬ爆弾低気圧

心豊かに無になつて行く座禅

貴乃花を責める悪意の面々

ハンドルが失くなるのかなAII化

札幌市 小 沢 淳

野良犬は自由ボチには餌がある

字余りの余生認知で介護の身

表向き検査入院身はあらし

黒塗りの白装束も他人事

レプリカと知らず家宝を自慢する

札幌市 三 浦 強 一

人生のステージ妻と落日まで

文化生活ああ取説がややこしい

出廻らしとなったが色は少し出る

テレビだけ喋って一日が終わる

進化論やがて人間何になる

青森県 松 山 芳 生

ごった煮の湯気が地吹雪遠去ける

一瞬のふぶきに人はみな無口

あなたには幸せそうなシクラメン

Jアラートむかしはなしが狼狽える

弾まない毬をせっせと鬼が蹴る

雑草の限界村の逞しさ

黒石市 佐藤古拙

青申で神妙になる揉み手する

おやじギャグまだまだいける村芝居

うたた寝の枕にびたり広辞苑

大胆にはばたいてみる余命表

黒石市 相馬一花

傘寿から毎日一句は吐いてるつもり

絶倫の証し欠かさぬ生卵

難病を三つかかえて生きている

メタボ猫道路横断失敗す

りんご二個毎日食って生きてやる

弘前市 浅田隆樹

お寺にもライトアップの聖夜くる

元職がずらり並んだ長寿国

初恋はバスガイドです純情派

振り返る一年前はもう朧

我家から十大ニュース特に無し

弘前市 稲見則彦

満月が吹雪の中に凍り付く

地吹雪に葦の言い分聞いてみる

地吹雪ツアー葦は笑って見てるだけ

冬のバラわたしはわたし君は君

雪女よっぽどボクを好きらしい

初詣で寝たきりになりませぬよう

弘前市 今愁女

青春は短し老いは永くなる

新元号なれば昭和も遠ざかる

スラックスの裾上げをする背が縮み

日本海ミサイルも木舟も沈む

弘前市 須郷井蛙

御陛下と髪型だけはそっくりで

原稿が出来ず心が休まれず

大正がまだ生きている底力

核のゴミ煮ても焼いても行き場なし

どの国も安全じゃない核施設

弘前市 高橋洋子

温ま湯に慣れて久しい平和ボケ

通院で血管だけは褒められる

世話好きと私を変えた褒めちぎり

思い切り新米頬張る玉子かけ

沈丁花咲いて春への曲がり角

弘前市 福士慕情

西海岸落ちる夕陽に酔っている

雪のんの雪の重さに耐える屋根

地吹雪を逆手にとった村おこし

みちのくの雪は下から上に舞う

屋根雪を減らし始めた春の風

塩竈市 木田 比呂朗

東京都 まえで とよこ

軋む老軀を颯るウイルス

発熱にああタミフルが神に見え

朝刊のオープン戦に起こされる

球春の紙面にドラフトの始動

歩数計頭重の訳は知らんぶり

さいたま市 星野 育子

木枯しが露にしている大銀杏

旅先で出会った句碑と記念写真

党の再成で国民蚊帳の外

人生の過不足がまだ未精算

糸絡んだままで過ぎた半世紀

上尾市 中村 伸子

聞こえなくてもありがとうと言つてみる

卵焼き夫の十八番になつている

も一つの「君の名は」観る老い二人

震災の年に生れて今巢立つ

スランプと言い出すほどのものでなし

東京都 川本 真理子

見るたびに売地の広さ空の青

様子だけ見て手は貸さぬことにする

加齢にて見えないはずのものを見る

腰に楽なポーズで見直すこの世

ゆつくりと生きたい煮含めるように

自転車にのつて海の上わたる夢

自転車にものれずこもりがちとなり

自転車のうしろにのせたあの児らは

ロボットの美女のほほ笑みこわいです

宇宙ではぶつかるらしいゴミとゴミ

八王子市 川名 洋子

初日の出笑い袋を所望する

百合を挿し華やかにするお正月

餅を焼く夫二つに妻一つ

子等帰りこたつで二人渋茶飲む

皆帰り部屋の広さと寂しさと

横浜市 菊地 政勝

増えすぎた趣味へ時間が削られる

想い出を追うと老化を自覚する

餌付けした猫が家族の顔をする

口止めの釘はしっかり打つておく

私の自慢にならぬよう喋る

富山市 島 ひかる

我が子より若い住職待つ二人

住職と山のはなしがまた弾む

毒少し混ぜて笑顔で褒め上手

友が逝く落ち込んでなど居られない

亡き人の分も生きよと活を入れ

可児市 板山 まみ子

頑丈な体もガンは差別なし
買い忘れやつと気がつく除夜の鐘
流感に帰省子なしの三ヶ日
ひと口のお屠蘇で祝う下戸の春
のんびりとできぬ性分靴磨く

愛知県 早川 遡行

文春に新潮もあるいい内科
もうそんな元気はないと切る電話
人生もおまけの域に差し掛り
横綱の張り手搦ち上げ肩すかし
暖かくなったらそうだ伊豆へ行こ

犬山市 金子 美千代

百均の爆買い師走らしくする
歌って踊って誰が誰やら分らない
鍋奉行にまかせ一息つく座椅子
七草や体内時計巻き戻す
初売りの半額欲しい物がない

犬山市 関本 かつ子

玉砂利を踏む音にさえ清められ
リセットをして踏み出した初詣
ゴミ出し日だけご近所と顔が合い
気配りの薄れに嫁の助け舟
おはようと窓から雪のプレゼント

鈴鹿市 小河 柳女

スカーフを巻いて寒そうな雪だ
庭の木よ百年立ってつらくはないか
勤続表彰状押し入れて眠る
大黒柱しっかりと心結び
しつけ糸はずして春の旅に出る

京都市 清水 英旺

初詣で新年の気を深呼吸
狛犬にも最敬礼する初詣で
年齢を隠しきれない丸い背な
あご髭を生やし傘寿のお洒落する
モノトーンの庭にツワブキこがね色

京都市 榎本 宏子

でこぼこ道わくわくしてる土ふまず
自分流地図を作つて新境地
羨ましいさらつと良い句作らはる
親の老い知つたのはブチ旅行先
あちこちで病氣の話聞く師走

京都市 三宅 満子

一年の計で自分を縛らない
普段よりパンが恋しいお正月
お年玉で稼ぎ頭の孫二人
もう二十歳まだ二十歳とを使い分け
百歳まで生きるビジョンを考える

長岡京市 山田 葉子

おせち囲み家族の絆たしかめる
朝一番鏡と笑顔かわします
寒さ続き温いレシピが底をつく
たっぷりの脂肪で冬も温かい
この橋を渡りますかと魔女の声

大阪府 米澤 俣子

定位置に祝い膳置きおめでとう
今が一番しあわせと思いたい
スタツカートで作動する脳回路
ワンテンポ遅れほっこりする笑顔
無理しない怪我ないことをモットーに

大阪市 岩崎 玲子

大掃除より小掃除がやっぱ大事
ライバルがいて一年をがんばれた
酒二合ここから私おもしろい
遠回りしたが晩学おもしろい
古稀迎えこのラインから翔ぶ一步

大阪市 内田 志津子

たっぷりと情感こめて反戦歌
自画像に嘘もちよつぱり混せて鬱
立ち位置の違いが仲を遠くして
肩書を解かれた父の古机
そこそこの間合いをとって睦まじく

大阪市 宇都 満知子

大掃除気分いいのは自分だけ
婆ちゃん家にあつたあつたと鏡餅
真剣勝負孫が読み手のカルタ取り
カルシウム今意識して意識して
爺ちゃんが教えています風と独楽

大阪府 江島谷 勝弘

少しぐらいお化粧してよお母さん
僕の人生だ我慢せず断る
いつの日か素顔に戻るデスマスク
アマゾンなら古本一円で買える
自家製のレモン八つでもできました

大阪市 榎本 日の出

渋抜けた柿も私も甘くなり
ロボットが人の出来ないことをする
虫博士言われた子供理科が好き
ブランドの器飾って見てるだけ
太陽の平等誰も勝てません

大阪市 大治 重信

着ぶかれて今日は休みと独り言
風や樺裸で凜と立ち
かくれんぼみんな帰って冬となる
おでん喰う父に似合わぬクリスマス
何もなく今年をおえるぬるい風呂

大阪市 奥村 五月

あれこれと細かい注意される歳

先代の汗が泣いてる休耕田

スマホなど知らぬじいちゃん知恵袋

古稀の姉卒寿の母に紙オムツ

ミサイルがこわい怖いと魚の群れ

大阪市 川端 一步

八十路過ぎそろそろ借りを返さんか

改憲の朝のニュースに箸を置く

見ぬふりと知らないふりでヤジロベ

洗濯機中であつてもいい夫婦

褒めことば受けてボンコツ車が走る

大阪市 熊代 菜月

青春のまつ盛りです孫の恋

ぶぶ漬けがおもてなしかも三ヶ日

芸一つ持たぬ私の坐りだこ

亡母の顔浮べて思う五七五

子ら集う米寿の春やまだ元氣

大阪市 古今堂 蕉子

知らぬ振り出来ぬ見てたし聞いてたし

理性という皆わたしを押し戻す

子の背中押しては足を引っぱって

激辛好き情は深いとご自分で

ブランドの牛だと聞いて味変わる

大阪市 小谷 集一

声出して天声人語読む日課

手の届く位置にいつでも妻がいる

ガラケーをスマホに変えて若返る

古傷を磨くと燦し銀になる

脳トレは句帳片手に五七五

大阪市 近藤 正

南北をつなぐ五輪に平和賞

十円が賀状の返事邪魔をする

欲張らずミニジャンボくじ元とった

点滴の台車引つ張り飯を食う

しのびよる軍靴の音に耳澄ます

大阪市 坂 裕之

あれこれと言われはしたが楽になる

人のこと気にし過ぎると動けない

理屈より先ずは動いて加減見る

目覚ましが鳴らなかつたと笑つとく

ぼつかりと空いた穴から明日を見る

大阪市 田浦 實

愛嬌ある笑顔は老いに欠かせない

買物も良い運動と喜んで

朝散歩先ずは挨拶鎮守様

AIに扱き使われる夢を見る

エレベーター監視カメラに会釈する

大阪市 高杉 力

テレビ欄だけを残して休刊日
そう言えば父に似てきたシルエット
集合写真いつも後ろの隅にいる
よく我慢したと褒め合う銀婚式
目のあたり似てると孫を褒めておく

大阪市 田 中 ゆみ子

建前と本音葛藤する日々だ
楽な方へ方へと何の引力か
吐くことが肝要息も弱点も
プランコを押す父が居た母が居た
先生が教えた通り自爆テロ

大阪市 津 村 志華子

友からの一句を添えた花だより
初啼きを聴く梅林の朝ぼらけ
たんぽぽもすみれも侍る野の仏
卒寿とて春は翔びたしニューモード
雑念をみんな無にする夕茜

大阪市 津 守 なぎさ

ウグイスの初鳴き期待するスリ餌
初夢は一泊旅行露天風呂
病床に七草粥とおしること
若者の意気結集の福男
病室の寂は作句に余念ない

大阪市 寺 井 弘 子

言いたくて言えぬ本音を句にあかす
晩学の身に攻めよせるカタカナ語
流し雛夢託されて弥陀の手に
過去は過去こだわりを解くロゼワイン
ありがとう笑顔絶やさぬ朝の市

大阪市 寺 本 実

願い札絵文字顔文字やめてんか
ほのぼのになれぬ新聞止めました
丸くなる覚悟でいるが爪は研ぐ
ハムワインビザが日本のお正月
好景気欲しがるくせに税を増す

大阪市 原 田 すみ子

完食のお節で笑顔のスタート
仏壇と神社手を合わす元旦
忙しく幸せ静かに幸せ
七草粥見た目も味も胃にも良い
BGM家族の音を聞きながら

大阪市 平 賀 国 和

何に当たるか歩いてみよう戊の年
天神様へ上達願う五七五
心地良い小鳥の声で目を覚ます
世界中不安漂う去年今年
ノーベル賞に長崎の鐘鳴り響く

大阪市 藤田武人

人生は余白だらけのロスタイム
目の前で限定品が売り切れた
目覚めればいつもと違う窓明かり
御下がりももつたないも死語になる
押す速さ競わないでよ核ボタン

大阪市 藤原千恵子

スッキリと新年十日理髪店
国宝展古代へ想いふと馳せる
七草粥普通の日でも粥がいい
五七五を勘で書いてる闇のなか
銭湯に浸かり新年宴閉じる

大阪市 升成好

こつこつと正攻法に自負を持つ
以下余白斜線は有無を言わせない
負け組にまだまっ白な明日がある
生き方を比較はすまい自然体
腕白が静かな時はいたずらだ

大阪市 山本加お里

喜寿傘寿米寿姉妹のでかい声
初詣鳥居くぐれぬ淋しさよ
耳底に母の苦勞のヨイトマケ
弥陀の手にぶらりと抱かれゆく浄土
つぎつぎにトップニュースも忘れられ

大阪市 若本安代

愚痴言わぬ決めて笑顔の三箇日
旅ひとりやつと見つけてきた自分
掘り炬燵やつぱり母が先に立つ
会える日はちよつと進めている時計
残された日々まだやれる やつてみる

堺市 柿花和夫

忘れ物取りに戻つてまだこの世
沖繩は他国のことか宵えびす
心技体の矜持はいずこ大相撲
命より元氣が大事サブリ飲む
見破られ喜んでゐる片思い

堺市 加島由一

生きてれば妻七十二年女
花ずきで亭主しつけが趣味だった
下戸の祖父しのび献杯孫見せる
孫よ孫オレを時には思い出せ
さくらみち美女とめじろのいい絵柄

堺市 源田八千代

猫年もあればと思う犬の年
あと五年 生きる覚悟の傘寿です
久し振りのデイ正月話で盛り上がる
寒空に梅花水仙凜と咲く
成人式就職祝次次と

堺市 齋藤 さくら

腹かかえ笑える今が最高だ
一言が嬉しくなつて元氣出る
元氣だと口で言つてるだけでない
頑張ろう新年会は意氣盛ん
同郷と聞いて優しくしてくれた

堺市 坂上 淳司

欠札の予告賀状が増える古い
宛先を書かず帰つて来た賀状
発信者不明の賀状見て思案
一ヶ所は手書きが欲しい年賀状
肉筆の賀状は永久保存とす

堺市 澤井 敏治

土から生まれ土に還るという定め
五感みな春を味わう祝い膳
屠蘇祝いあとは酒抜くしじみ汁
美しく古い美しく茶を淹れる
二進法の夫婦欠かさぬありがとう

堺市 遠山 唯教

搗き立ての餅に温もる大晦日
心友が逝つて喪失感つのる
意地捨てて切ない酒をひとり飲む
躊躇なく転びもつれる老いの坂
カンバスの妻の絵具が叫びだす

堺市 内藤 憲彦

一年の余熱をさますように雪
触るなと書いてあるから触られる
白寿まで生き年金の元を取る
生き慣れて初めの一歩忘れてる
核戦争へ白旗上げている地球

堺市 矢倉 五月

本心は見せぬ未練は尚見せぬ
砂風呂でじんわり亡母に抱かれてる
平成とハグし別れを惜しみたい
はらはらと涙こぼして過去にしよ
道半ばスベリ止め付けソロソロと

池田市 栗田 久子

お年始のことば一年が決まる
飼い主へ忠誠犬が消す野性
小正月氏神様のとんど焼き
無理のない域で今年のスケジュール
誇らしく曾孫を見せに友が来る

和泉市 横山 捷也

足で割る氷地球のきしむ音
グローバルなどと老人会の席
スニーカー履いて子犬と日向ぼこ
パンの耳ハットにやるわけじゃない
歳だなあシャツが裏返したった

茨木市 島田 誠一

ポランティア笑顔で流す汗がある
十指みな伝道師なり手話の妙
いい人に会えた余韻が醒めぬ酒
抜かれたら抜き返せない古希の坂
ろう梅の香に急かされて春の立つ

貝塚市 石田 ひろ子

初詣で叢祠の歴史今更に
四世代揃い近くの鎮守さま
ゆつくりと自分に合うた縄を絢う
無駄だった事も土壌を肥やす糧
元日もいつもの顔でウォーキング

河内長野市 大島 ともこ

キリキリ舞い子育て華の時だった
叱責と褒め励ましを混ぜる技
告白を決めた時から不整脈
舞い戻った故郷の風が温かい
深くゆつくり長生き目指し腹式で

河内長野市 梶原 弘光

隅っこを重点的に掃く晦日
野菜高騰もての家庭菜園
初日の出開けっ広げをせがむ窓
穏やかな朝一服のお茶ふたり
石ころひとつ蹴ってみんなと違う道

初春に大鍋囲み三世代 河内長野市 木見谷 孝代

初句会前途多難の幕が開く
私を壊して挑む新境地
寒の冷えことごとと大根炊く
ふと見ると細くなったか夫の背

河内長野市 黒岩 靖博

直らない耳に葉の処方箋
囁いているはずが周りにまる聞こえ
川柳で健康寿命励む日々
共白髪痛みも共に分かち合う
がつちりと動かぬ証拠にぎる妻

河内長野市 谷 久美子

晴れ渡る空と幹事に感謝状(フラザ吟行)
囁いた老いの秘密は丸聞こえ
消し忘れた過去が時時夢に出る
かしこくは無いが笑って暮らしてる
鏡拭く優しい顔に戻るまで

河内長野市 辻村 ヒロ

出来ること誉めあい気持楽になる
女です流行のルージュ買ってます
頑張るを言えなくなつた膝小僧
しびれる手リハビリ励み野菜切る
愛犬に聞いてもらつた愚痴の数

河内長野市 藤 塚 克 三

シャープだと惚けてる人に言われても
もつと使えと脳細胞が欠伸する

ハッカ飴咬んでシャープな句をひねる

知ったか振り底の浅さに気づかない

欲深い気持ちが強くまだ生きる

河内長野市 村 上 直 樹

賽銭じやらり世界平和と明日の酒

恙なくバトン受けませ雅子さま

雪に堪え霜もはねのけ路の臺

認知症でなくてよかった忘れ癖

祈りつつなにはともあれ恵方巻

河内長野市 森 田 旅 人

お正月紡ぎ続けて一歩二歩

出番終えジイジバアバの二人膳

煩惱を静める雪の初詣

孫受験お守りを買う初体験

開運を願う人らの熱気浴ぶ

河内長野市 山 岡 富美子

置き忘ればかりが増える冬の旅

世代間格差は言わぬ鍋の湯気

籤運は無いと賀状を眺めつつ

おめでとうと言えない友が一人いて

小雪舞う束の間音のない街に

河内長野市 山 室 光 弘

若さという今なら解る宝物

八十路だが若い血潮が背を正す

寄席帰り小さな怒り忘れてる

老いの歯に意外強敵パンの耳

九条は国を救うかほろぼすか

岸和田市 宮 野 みつ江

マスクして御神酒お雑煮仏様

シメ飾りの稲穂にスズメ賑やかに

特売のシクラメン達満開に

仙一さん死亡のニュース胸拉ぐ

仙さんがいた夫の抜けた胸の穴

岸和田市 雪 本 珠 子

言動で友の人柄垣間見る

今の世は責任感が鬱を呼ぶ

川柳はわたしを癒すエッセンス

ブルマンも何故か今夜はほろ苦い

帰る場所やはり貴方の腕の中

四條畷市 吉 岡 修

曾孫抱く無口な顔もおお崩れ

お守りをいっばいつけた新カバン

飼い主に届けと猫を叱りつけ

変わりませんしかとハートに記録した

鍵つきのノート少女への一歩

吹田市 太田 昭

未知数に期待をかける去年今年
埋蔵金さがし当てたか夫無口
ドナーにもなれぬ臓器に酒を注ぐ
蒲団の中で冬ごもりする三が日
去年今年語り明かした夫婦独楽

吹田市 木下 敏子

好きな彩塗って楽しい日を送る
変わりなく千両の実が揺れている
早朝の歩幅緩めて四千歩
歩く友歌う友ありマイク持つ
ひと様の傷はそつとしておこう

吹田市 須磨 活恵

鏡拭く心の邪鬼を払うよに
交差点悲喜交交がすれちがう
身と心アンバランスが深くなる
聞き流すことも大事な生きる知恵
ふり返る足あと心の宝です

吹田市 野下之男

日本もミサイルすこし買うのかな
皇居まで駅馬車で行く有難さ
他人の物すました顔で持つて行く
子ども等をおどかしてみなおとしもの
こちら見て用はないかと大辞泉

高石市 浅野 房子

過去すべて思い出となる歲月よ
もう亡くなられたでしようねあの方も
大相撲どうなるのか心配だ
肝っ玉小さいがすぐに口を出す
寝ころんで新聞よんでいる至福

高槻市 指宿 千枝子

市場へのちよつとが妻の三時間
ばあちゃんのおとほけ髪をピンクにし
別荘の掃除は亡夫のお墓です
おばちゃんのパワーよく食べよくしゃべる
奈良町で詩人氣取りで柿食べる

高槻市 片山 かずお

寺の鐘撞くのは自動鐘撞き機
鐘撞き機ちゃんと定時に鐘を撞く
うるさいと言われ小さく鳴らす鐘
騒音と言われて悄気る寺の鐘
教会で挙式二人で鳴らす鐘

高槻市 島田 千鶴子

元朝の祈りに長い列続く
割烹着の白さに主婦の自負がある
白足袋の先まで凜として女
無駄足もいよいよいと歩数計
好きだから目尻の皺も魅力的

高槻市 初代 正彦

高槻市 原 洋志

まっ新の手帳見ながら明日のこと
妻よりも僕の秘密を知る手帳

ドタバタと幸の過ぎったお正月

貧乏神に好かれたときもある昭和

闊将の散り際さすが潔し

高槻市 杉本 義昭

一〇〇歳へ五度目の二〇歳目指してる

再会の叫び届かず四十年

完走の自分ほめたい金メダル

背伸びしてこむら返りに笑う朝

除夜の鐘聞くと反省してしまふ

高槻市 富田 美義

物忘れ支えてくれる人と居る

素っぴんを忘れて走る回覧板

誕生日オレの居ること忘れられ

飽食に忘れられたか柿たわわ

バスツアー鏡の中にシワ忘れ

高槻市 富田 保子

人の老い予約なしでもやってくる

震災のかわらの町に春よこい

新聞が頼り確かな風を読む

静養が欲ばりツアーたび疲れ

新春が歩け歌えと老いにまで

もう一度鳴らしてみたい鐘がある

三寒の無口四温の弾む声

オレオレにご苦労様と言って切り

途中下車少し尻尾を切り落とす

輝いた過去は時計に食べられた

高槻市 松岡 篤

株価見てタラレバ発し苦笑い

へそくりが出てきてワハハ奢る羽目

試供品から有料へ引き込まれ

年だなあ生保勧誘来なくなり

ノンアルは大人のおもちゃだと思ふ

高槻市 安田 忠子

軒並みに車が並ぶお正月

まだリズムに乗れないでいる十日過ぎ

皆よりワンテンポずれ意味分かる

直向きで恥ずかしがりでお人好し

まだしっかりしてるつもりがミスばかり

豊中市 藤井 則彦

懐の深い人ほど飛び込める

たしかなことばかり言うから疎まれる

容疑者の顔にマスクはよく似合う

年輪がふと滲み出る笑い皺

闊将の喝も陰には愛があり

豊中市 松尾 美智代

入ったらもう出られない掘炬燵
積ん読を整理している掘炬燵
久し振りに雪を見た初詣で
妻の我儘耐えた夫に感謝状
雨宿りしたおかげ大きな虹を見る

豊中市 水野 黒 兎

シンブルを極め古刹の庭豊か
すぐ初期化きのう覚えたカタカナ語
飲まぬ人いて割勘がややこしい
息切れに歳を自覚の歩道橋
芳醇なワインの香り師の句集

富田林市 片岡 智恵子

登校の子等と仲間に迷い犬
嘘はむつかしいすぐには出て来ない
国境のない空鳥の自由主義
愛が欲しくて硬い土を掘り起し
一人の部屋で恐いドラマは消すことに

富田林市 中井 ア キ

想い出を追えば亡夫が跳んで来る
掌を合わす刻を増やしている余生
幼な友互い励ますEメール
生きてきた証の皺は深くある
幸せな人生だったと言ひ聞かす

富田林市 中村 恵

恋や恋 身を焼きました生きました
憧れは憧れとして現在地
後悔は何気に開けた玉手箱
風だけがブランコ揺する冬最中
塩梅はいいのに答まだ出ない

富田林市 山野 寿 之

困らせて愛の深さを試し切り
人間の手抜き豪雨の土砂崩れ
合格はお守り二個の去年今年
世界地図駆けるは夢の老い二人
野良犬の自由が欲しいペット犬

寝屋川市 籠島 恵子

それはそれでいいかつての私だから
歳をとるだけのお正月になった
花の芽も出ますようにと初詣で
笑い袋につめこんでいる四コマ目
言い訳も面倒臭くなってくる

寝屋川市 伊達 郁 夫

ゲラゲラと笑いたいから隅の席
僕だけに光って呉れる星がある
酒とろりやはり女の傍がよい
ノーサイド握手の指にある痺れ
男文字少し乱れていいですか

寝屋川市 富山 ルイ子

羽曳野市 宇都宮 ちづる

家族揃って産土神へ初詣
米寿リッツカールトンで祝われる
雪が舞う厳寒はまだまだ続く
転ぶなよ転ぶな何時も注意され
五年日記大丈夫だとまだ思う

寝屋川市 平松 かすみ

若くなるシーエムにもう騙されぬ
何十年経っても若い内裏様
古代食好きで命が守られる
干柿も食べ頃になり夫偲ぶ
トランプのツブヤキ世界見逃さず

寝屋川市 森 茜

新幹線富士に向かって日本一
松納 白鷺よぎるターミナル
じんわりと語り部じんわり染みてくる
くもり後晴れ渾身の寒椿
楽観的に歩むときめた いぬのとし

羽曳野市 安芸田 泰子

ライバルへ贈る賛辞がほろ苦い
自己主張自分の殻を抜けられぬ
一人居はいつも初風呂仕舞風呂
言い過ぎた言葉へお世辞足しておく
これ以上飲めば本音が出してしまう

何十年元気ですかの年賀状
ランチ会誘う賀状に花印
早々の賀状の札にメール来る
馴染まないままで私と居るスマホ
足の爪ホイホイ切れぬ身が硬い

羽曳野市 徳山 みつこ

蠟梅の香と朗報を待つ至福
雑念を削いでスリムなわたくしに
おみくじは凶狗犬の眼は優し
叶うなら犬の嗅覚わけて欲し
平和の知恵を繋いでいこう万国旗

羽曳野市 中川 ひろ介

老樗春の芽吹きを予感する
ドラマ見て涙腺ゆるむ体たらく
筑前煮鍋ごと提げて新年会
雪止んでお地藏様のニット帽
千枚漬たんで食べる律義者

羽曳野市 仲谷 真

お水取り春の訪れ待ちこがれ
春場所モンゴル力士消えていく
国民をいじめる予算通りそう
予算案審議せずとも通りゆく
軍事費は別格だと増えてゆく

羽曳野市 藤原 大子

東大阪市 佐々木 満作

お日さまと元気に遊ぶ子に拍手
この指が押せないでいる消去キー
何回かつぶやき記憶保つて
失言はシュレッダーにも拒まれる
余生とや出会いと自由楽しまん

羽曳野市 三好 専平

九十の怒り日本を席卷し
A Iもそのうち認知症になる
ジャンジャン街まだ懐かしい駒と串
核の傘いつまでつづくこの平和
新聞はいつもめくるだけである

羽曳野市 吉村 久仁雄

遅咲きの花咲かすまで死んだふり
斜め読みすると本質すぐに見え
三猿に徹して顔の険が取れ
斜に構え土下座も辞さぬ顔一つ
平穏な昨日と同じ今日がいい

東大阪市 北村 賢子

歳重ねつゝの両親への想い
穏やかに普通の日日を生きる幸
明日知れぬ今だチャンスは逃さない
核ボタン二度と押さないでと祈る
生かされる日日へ感謝を忘れない

この国を担う二十歳の晴れ姿
息災を祈りつ鏡餅ひらく
吹きすさぶ嵐に背筋ピンとする
盲導犬主従の掟破らない
浮き沈み波瀾に生きた背が厚い

枚方市 海老池 洋

雪の日は白い心でいる余生
北風に負けず微笑む寒椿
去年は去年今年も誓う初日記
入院の窓から拝む初日の出
悲しみを洗いに寄っている飲み屋

枚方市 小林 わこ

本年の御みくじまあまあです吉
手の平にのる幸せぐらいほしい
バランスを崩しやっぱり風邪をひく
スッピンで行かぬリップは薄ピンク
明日は検査しっかり食べてよく眠る

枚方市 丹後屋 肇

玉砂利の音に祈りが撥ねている
イクメンに生甲斐の出る共稼ぎ
ファームから這って出てくる燻し銀
A Iは神社仏閣信じまい
不測事態起きる予感のシエルトー

枚方市 寺川 弘 一

深追いすれば袋小路と知りながら
満月は人のところを丸くする
レントゲン丸く映るかわたしの心
登り詰め梯子の上で見る下界
旧友に逢い古いジョークを思い出す

枚方市 二宮 山 久

年明けてボケておれない趣味多忙
同級会笑いのネタで人気者
四十年続けた美声吟の道
病む右手ふるい立たせてペンを持ち
孫の顔見上げて話す初詣

枚方市 二宮 紫 鳳

今年こそ弾みをつけるベアシューズ
帰省した子らの笑顔に安堵する
ありがとう孫のメールに疲れ飛ぶ
おみくじに今年の一步かけてみる
年末の疲れを癒す福袋

枚方市 藤村 亜 成

ガラスの森抹茶でしばし癒やされる
小唄長唄端唄浪曲遠く 遠くなる
毎日がチャンスに充ちた好奇心
万歩計たっぷり酸素吸っている
雑草の蝕む土に墓眠る

枚方市 山口 弘委智

まだ未来あるやも知れぬ日記買う
縄のれんおでんと酒に自慢添え
人誰も何かを待って背伸びする
絵に書いた餅あてにする粗忽者
スマホ族着メロ競う終電車

藤井寺市 伊藤 アヤ子

除夜の鐘遠くに聞いて想う郷
伊勢えびがおせち料理を引き立てる
お守りを買って今年もすこやかに
過ぎ去った八十年に感謝する
お屠蘇酌みみんなの頬がほんのりと

藤井寺市 太田 扶美代

街中の二十歳に声援を送る
抱きしめていたのはただの風でした
春の気配に逢ってきました散歩道
二人でやれば案外楽し探し物
亡母の形に近付いてきたおせち

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

振り返ることは知らない回遊魚
饒舌のうらは寂しさかも知れぬ
艶めいて笑う恥ずかしいと思う
老いてなお春は女の匂うとき
無地のしの八方美人で切り抜ける

藤井寺市 鈴木 いさお

耳をすませば風の音春の音
恋人のように娘と街歩く
犬派か猫派か私は二刀流
羽繕いして再検の結果聞く
褒めてほめてホメて五歳を手なづける

藤井寺市 田付 絹枝

ポスターに頭を下げる無邪気な子
先急ぐ我に北風容赦せず
ママスマホパバははしゃぐ子追う縮図
予算オーバー財布の紐も伸び縮み
子ら飛躍吾は老化を止める夢

藤井寺市 津田 シルク

金剛山に冠雪齢を忘れさせ
どの顔も見知った人に見えて温^{ふろ}泉
長寿国鈍行で逝く旅も混み
惚けてません純なだけですあしからず
大事件らしいブルーカーテンの向こ

藤井寺市 吉田 喜代子

ドア開ける向いの犬がおめでとう
ごみ当番クラスに勝った初仕事
初仕事〇付けしてるカレンダー
野菜高我が家の苗も寝てばかり
衣食住感謝で暮らす戦中派

藤井寺市 若松 雅枝

凍星を仰いで巡る夜警の灯
百歳の祖母が御節の指図する
デイサービス行っていますと便り来る
生き過ぎて生命保険入れない
説明書片仮名並びわからない

松原市 森松 まつお

体重もお金も欲しいままならぬ
出不精のボクにストレス溜める妻
カス汁をアテに熱燗飲んでいる
娘には教えておこう旨いアテ
上からの目線の医者は遠慮する

箕面市 大浦 初音

足音でご主人分かるボチである
通販は今がチャンスとせめてくる
成功は地味な努力の積み重ね
ささやきは小さな声でよく届く
さけられぬ老いを受け入れあるがまま

箕面市 酒井 紀華

夕陽射す夫婦茶碗が欠けました
納得のいくまで泣いて起き上がる
このところロダンになる日続きます
そして冬愛の欠片も拾えずに
真夜中に妖怪の声起き上がる

箕面市 出口 セツ子

独りではホテルディナーも美味くない
老人に席譲られてゐる惑い
弱いから嫌なことから片づける
失敗も笑い飛ばして生きている
明日の米以上は望まない余生

箕面市 広島 巴子

皆揃い雑煮の餅もふつくらと
最高の笑みで夫が孫と囲碁
野菜不足七草粥をかみしめる
家計簿にえびっさん書き福よ来い
高らかに古稀乾杯と同期会

八尾市 高杉 千歩

老人のやがてやがてよ自己主張
いつまで生きてんねん あの世から
晩学の夢が広がるスマートフォン
戦争を生きひたすに反戦歌
歩けない千歩離さない万歩計

八尾市 寺川 はじむ

目標立てる先ず足腰に問うてから
儲けより夢に懸けると二刀流
若気の至りずばらの付けが節ぶしに
平凡に慣れて平和を忘れてる
松の内過ぎて公園高齢化

八尾市 宮崎 シマ子

何にでも首つつこんで友が増え
罪ばかり増えて浄土に遠く居る
傘たたみしばらく思い出し笑い
男友達の章はカットをした自伝
ビニールの強さもろさを持つ私

八尾市 村上 ミツ子

好きなだけ泣いたらいいと言われても
だんだんと近付く平成の終り
いのちのタイマーしばらく止めておこう
骨なんだ若さを司る臓器
マイナスをプラスにかえるありがとう

八尾市 山根 妙子

ばちばちと篝火爆ぜて年を越す
寒梅に芽生えの兆し季のめぐり
中味より犬の絵が好き三歳児
三が日お賽銭にもドルや元
童歌大人になつて知る風情

神戸市 上田 和宏

陽のぬくみ待つてそろりと初詣
ずらり露店なんと今年は好景氣
並ぶのはおみくじの列だけに
出来たてのタイ焼き美味い帰り道
しかしまあ晴れ着見掛けぬお正月

神戸市 奥澤 洋次郎

七十年間違い通してきた難字
ささやかな暮しの中に高層ビル
陶冶には遠い句を詠み歳重ね
背中でしか言えぬ男の影法師
恙無い顔いつまでも同期会

神戸市 富永 恭子

しとやかに見える和皿の林檎バイ
うきうきと重箱を出す大みそか
まつたりとお茶とみかんとDVD
ほっといて構わないでを真に受ける
この先もリズムよろしくトントンと

神戸市 能勢 利子

忘れると気が楽になるよく寝れる
携帯を持たぬ友とドキドキ待ち合わせ
長所より欠点ばかり目につく日
宝くじ当たったら多分不眠症
背を越され記念に撮ったツーショット

神戸市 山口 美穂

信号はわたしの歩み待ってない
一等賞誰かに当たった鈴が鳴る
自分史は残さず消えてゆくつもり
医者はパソコンわたしは医者顔見つめ
ルミナリエそつと心の傷舐める

神戸市 山崎 武彦

肩の荷を降ろして自分らしくなる
田を鋤けば愚直な亡父が顔を出す
わたしの名忘れた母を抱き起こす
身の丈の暮しと思う石路の花
熱燭と目刺しおひとり様のお正月

明石市 梶谷 和郎

もしもからきつとに叶えたい小指
母達者トーンの高い電話口
ピンボケの遙かを手繰り寄せる母
見た目よりみなが知りたいのは中味
好きだから共鳴しあう距離にいる

芦屋市 黒田 能子

頼られて嫌と言えないから困る
ぶつぶつと言うて気分を変えました
ざつくばらんに話せば誤解とけました
今か今かとあなたの誘い待っている
しぶしぶの納得父は娘に甘い

尼崎市 市坪 武臣

退屈で勧誘電話聴いてやり
だましたりだまされたりで子は育つ
言い訳を先ず考えてチャイム押す
酒タバコびったりやめて医者通い
また会える保証などない同期会

埋藏金よりは確かな宝くじ

尼崎市 加川靖鬼

積み残しされてゆっくり飲むボトル

気ぶくれて腹の中まで読ませない

犬よりも鼻が利きます事件記者

血の中の命も流し込む輸血

尼崎市 永田紀恵

ヘソクリがばれて半分妻の手へ

二人前ばかりになって来たレシビ

新講座三途の川の渡り方

孫真似てりんごをガブリ歯がポロリ

酔うほどは飲ませてくれぬ試飲酒

尼崎市 藤井宏造

空元氣見せてきましたクラス会

ビー玉で遊んだ友はいまも友

家族には笑顔を見せぬ反抗期

タラレバが飛び交っている縄のれん

復興の灯消してはならぬレクイエム

尼崎市 藤田雪菜

元旦の日の丸に合い身が締まる

損得より楽しみを買う福袋

一月号特に嬉しくページ繰る

健康が何よりですと初詣

仏様千年経つも皺がない

無精髭の息子と正月の酒

正月のテールランプが遠ざかる

シニア向けも十分使い切れてない

過去帳を開けるとご先祖の神話

キリギリスが裏戸叩いている夜寒

加西市 金川宣子

年玉を競い合ってる新学期

お煮しめに箸をつけるはじじとばば

上り坂踏ん張るほどに膝笑う

ピンコロリ天寿全う笑み誘う

酒浸り七草がゆで胃を休め

川西市 大坪一徳

明日死ぬかもしれないからサローリン

新聞を読んで一人で怒ってる

パソコンにやっと慣れたらスマホかい

孫とするトランプジイは勝ちに行く

育メンの息子を嫁が賞めちぎる

川西市 岡一心

迷い子札天地別れ目生命札

世は情け人はたがいに思いやり

何気ないその一言が罪なんて

子は二人孫は四人で杵は埋め

ワンランクアップ新年当り年

川西市 山口 不動

連れ添って五十四年の菩薩さま
かけめぐる妻の手術の待ち時間
法事する一族の孫ニヨキニヨキと
賀状書く抗癌剤の友に書く
夢に出た句をまとめてる目覚めかな

篠山市 北澤 稠民

やさしさに心の鍵が外れそう
来年も元気なつもり決めておく
遅咲きの花に己を重ねみる
同じ屋根牛と同居の頃偲ぶ
天高く投げてみようか老いの夢

篠山市 酒井 健二

寒風に昔の女呼んでみる
老骨を試す雪かき天狂う
学んでも世のいく末は分からない
春晴れ着夏はビキニでデビューする
あの星を来世と決めるのは勝手

三田市 足立 つな子

おだやかに酉から戌に晦日そば
ゆったりと歩を進めたい上寿まで
ニコニコと笑顔でいようきつと福
体調のバロメーターは声の艶
ふくよかに揃って祝う戌の春

三田市 上垣 キヨミ

ぼたん鍋今年も飛躍誓い合う
福男えびす神社を駆け抜ける
成人の孫にきらりと光るもの
お見舞の約束フイにした予感
友の死に揺れるまだまだの自信

三田市 上田 ひとみ

バリケードされても私あきらめぬ
こう見えてとつても内気ひと見知り
後悔という字をそつと書いてみる
お月さま私を強くしてほしい
なにもかもシンプルだから美しい

三田市 尾崎 一子

孝行に瀬戸内の旅波静か
子も五十節目の祈願極楽寺
夫が逝き小さくなった鏡餅
前向いてひたすら歩く七十五
子や孫に幸多かれと初硯

三田市 北野 哲男

歴史ある大和言葉のやわらかさ
川柳が百歳力に期待する
飛花落花輪廻の証し実を結ぶ
六畳に柳行李で今日がある
老い二人チャイム代りの犬と住む

三田市 久保田 千代

海染めて今スタートの初日の出

あたためる夢あり今年のカレンダー

約束をひとつ加えて猪口を受く

マンネリにならぬアイディア絞り出す

運命線替える言葉を重く聴く

三田市 多田 雅尚

土俵より盛り上がってる内輪揉め

賀状より喪中欠礼多くなり

和室には炬燵にミカン有る至福

大掃除しても変わらぬお正月

賞金のカットで終わる防止策

三田市 谷口 修平

媚びはせぬ盲導犬の持つ矜持

老人会今日のテーマは墓仕舞い

大臣が辞めても誰も困らない

愛でる人無いフクシマで散る紅葉

目の遣り場無いからじっと見ています

三田市 野口 真桜子

緊急入院個室の孤独長い夜

気がかりは夫と猫と入院費

身の程を知った老猿紙オムツ

人知れず体の孤独飼いならす

夢まで食べ尽したのかダルマの眼

三田市 福田 好文

時を皆スマホが食べてひまがない

古希なんてとづくに死後になつて

ビールの栓抜いて気付いた休肝日

終活に会っておきたい人一人

ばれなければ遣りたいことが二つある

三田市 堀 正和

満月が出ると独り居の友へ

孫の絵をピカソ目線で眺めてる

欲深く文武両道孫へ説く

達者らし今日も雨戸を開ける音

余生には酒と川柳欠かせない

三田市 村田 博

ジョーカーを先に使った僕の負け

勝ち負けは付かぬいつでも時間切れ

荒神さんに野菜の値下がりを祈る

野菜高今日もモヤシに助けられ

初夢が無残に散った初句会

高砂市 松尾 柳右子

イチゴ苗子等の歓声楽しみに

テーブルを囲んだ鍋は姦しい

夕焼けに目を細めてる今日も無事

独居にも嫁は気遣う金の価値

朝晩の合わせる両手亡夫住む

宝塚市 田中章子

わたくしの今をぶつける一行詩
他人の家のぞき見るよな一行詩
なるほど明日への指針いただく詩
常識が透けて見えますゴミ袋
アロハからアロハへわたしからあなたへ

宝塚市 丸山孔一

四季の国二季の国にと成りにけり
言いました聞いてませんと今日も幕
旬の香とリンゴ・ミカンの箱が着く
終活にまずアルバムを始末する
責任は俺 君自由にやり給え

西宮市 秋元てる

あの人もお化粧日本の初春は佳し
女性ファンの嗜着鮮やか大相撲
老いたとて好奇心には蓋要らぬ
今に今に待ってる孫はのんびり屋
メモしても新語逃げ足いと速し

西宮市 緒方美津子

ダイヤモンド富士幸先よろしいようで
白い雲母と豆煮るいい時間
凶のみくじへこまんときやと孫娘
猿芝居猿は人程悪くない
中山寺詣で祖母の初仕事

西宮市 亀岡哲子
ともかくも生きようどこか進化する
ユーモアの芽で再生をする家族

私を育てる独り膳楽し
再生のおせちで悦に入る独り
仏壇のお下り餅へ祖母まねる

西宮市 西口いわゑ

日記帳一月一日元気です
レモン一滴和む空気にしてくれる
ほどほどの程で治めぬのが酒量
力強い医師のひと言光さす
北風よ競争しよう負けないよ

西宮市 福島弘子

三歳へピカピカコインお年玉
百人一首読み手の婆は手を抜かず
初釜へ白足袋降ろし背筋伸ぶ
頑張ればもっと出来ると孫には言う
郷土料理もつと教わるべきだった

西脇市 七反田順子

猫とキセル絵になっていた祖父である
ふつくと餅を焼いてたいろり端
ガーネット愛車に決めたわたし色
姿見は今日の元気をキャッチする
雪が降る放浪人の山頭火

姫路市 古川 奮 水

お好み焼下手も上手も味同じ
午后三時ココアで一吋休もうか
門松の竹で作ろう竹トンボ
鉛筆はナイフで削る事にする
正月の気配が消えて蟹へ旅

南あわじ市 萩 原 狸 月

子の帰省親の元気を確かめに
平凡に明けて帰省の子らと酌む
正月もハレを感じる事が減り
孫子らの帰省笑いを残し去り
ウォーキング膝に感謝の一万歩

奈良県 安 福 和 夫

愛犬のインスタ映えとか騒ぎすぎ
わが家では愛犬の死後犬飼わず
癒やされただけに悲しみその倍に
斎場で犬の戒名尋ねられ
愛犬の命日今はカーナンバー

奈良県 谷 川 憲

日溜りに妻丹精の蘭が咲く
元氣かとの添え書き増えて来た賀状
リタイアし趣味の世界の友が増え
侘び寂びを感じぬままに足痺れ
ベットにも先端医療次々と

奈良県 中 原 比呂志

流れゆく若者ことばの広辞苑
スポットを過去に当てると新発見
吹雪突き一直線に受験場
パトカーに乗って受験は落ちるだろう
新年度姑息な答弁勉強中

奈良県 長谷川 崇 明

常連の座もある序列縄のれん
一括りされる友とも車間距離
ストレスの元はあなたと妻は言い
締切のたびに胃薬日に三度
見てみたい地獄に行きたい極楽

奈良県 渡 辺 富 子

妹の愚痴をじっくり聞くこたつ
宿題の身辺整理まだできぬ
ラストダンス気合で舞ってこけました
身の内の矢りが消えていく散歩
忘却のあなたに愛がうずくまる

奈良市 阿 部 紀 子

初日の出春日山からゆっくりと
チロと娘と仲良く過ごした十七年
娘からチロの首輪を外してと
凍る朝バス停に並ぶサラリーマン
戦争が起らないよう祈ります

奈良市 宇賀史郎

後世を憂いトラブル作る人
お下がりの大島軽し父の風
毎日が互い違いに探し物
顔よりも裾艶っぽいフラダンス

AIが選する日には僕の句は

奈良市 大久保眞澄

素人のカラオケもどき老いた歌手

紅白もBGMに成り下がる

あけおめと丸文字で書くおばあさん

ロボットの切り札は孫の手だった

愚痴の数と食べっぷりとは比例する

奈良市 高橋敬子

盃手に賀状見ていた亡き夫

数枚の賀状知らない人もいる

飼ってた犬の思い出話戌の春

パソコンの疑問待ってる子の帰省

卒寿の母世話出来る幸ありがとう

奈良市 辻内 げんえい

ひと回り上の戌見て夢もらう

デパートの椅子はオジさん待合所

キレキレのむかしの動き夢の夢

木枯しは僕より上手掃いていく

漢字の賀状孫が成長見せている

奈良市 米田恭昌

通り雨に景色が映えるルミナリエ
福笑いまるでピカソの絵のような
車免返納急くこともない未練
今更に急くことはない後期高齢

アニメならのらくろだった戦中派

生駒市 飛永ふりこ

シクラメン侘しき隠す艶やかさ

じつくりとこつこつ磨く予定です

まっすぐに受けられ私おたおたと

スロースローばかりクイック試さねば

おじゃみからひいふうみいと春を呼ぶ

香芝市 大内朝子

愛犬を殊更偲ぶ犬の年

後悔をする道ばかり選ぶ運

一本の電話へ孤独脱皮する

振り向けばよく頑張ってきたわたし

お手本はムーミンパのようなひと

香芝市 山下純子

マヨネーズたつぷりかけてゴマ化され

白無垢で嫁いだけれどわたし色

この妻が笑いの門を開けてくれ

子だくさん微力ながらも国助け

夫留守コタツでコンビニ弁当

桜井市 安土理恵

一陽来福今朝初雪が舞いました
しあわせは胸に小さくある明り
月の傾く方へ傾いていく想い
できるだけゆっくり私と歩くなら
八十迄生きた余生は天まかせ

和歌山市 磯部義雄

国境の無い地球儀はないものか
待っていたやつと孫からお年玉
玉手箱子から届いた着払い
譲り合う席で車内が温かい
一本の杖と頼りは妻の手と

和歌山市 喜田准一

甘い声最後は買えと言う話
不手際の言い訳だけは隙がない
正月はほんに静かな老い二人
賀状から想い起こした過去の恋
一〇億円当たった人も居る日本

和歌山市 楠見章子

一輪ざしにいつも一輪ある暮らし
ちよつと嬉しい手紙届いた雨あがり
昼ご飯今日も睡眠薬になる
聞き流すと決めてお腹が空いてきた
老いばかり写す鏡は捨てましょう

和歌山市 坂部紀久子

舞扇持てば伸びます八十路腰
こんな筈でなかった事が多くなる
うっかりか痴呆か最近わからない
辻褄が合えば成立とは言えぬ
のりしろで見えぬがしかと受け止める

和歌山市 武本 碧

若き日の寄せては返すさくら貝
汗搔かず勸に頼ってばかりいる
おざなりの言葉が一人歩きする
泣きに來た海の広さと同化する
原点に立つと答が満ちてくる

和歌山市 土屋 起世子

正月の宴半日で飽きてきた
選別に泣いた蜜柑を農夫食べ
世渡りの下手が上手に鍋奉行
向き不向き私利口に生きられぬ
つまらない事にこだわる鼻眼鏡

和歌山市 福井菜摘

どんと構えどんな渦にもたじろがぬ
ワンランク下げてハミング出る暮し
自我ひとつ畳むと読める風の彩
フアイト出る私のカラー選っている
プライドを脱ぐと輝き出す個性

和歌山市 古久保 和子

ふる里に帰った友の花だより
アルバムで少し時計の針戻す
風評を食べ散らかしているカラス
フライパン何でもお引き受けします
自販機の缶コーヒーで暖をとる

和歌山市 松原 寿子

思い出がうれし涙と共にある
風向きを読んだ歩幅が脈を打つ
推敲の夜更け珈琲手に包む
懐かしく心潤す便り抱く
雑念を払う時雨の傘たたむ

岩出市 藤原 ほのか

一を知り十分かろうと努力する
一番でなくてもひかるものがある
ほろほろになると心意が見えてくる
私の案内人は母である
案内をされてもしばし立ち止まる

海南市 小谷 小雪

お正月去年の風は忘れよう
ばつさりと髪を切りたくなる春だ
日程のなかに青空入れておく
うわさ話三角形は基本型
耐えた分だけ香り良い花になる

海南市 堂上 泰女

反面教師子の凜凜しさに惚れ直す
蟹気楼リハビリからの犬の年
温泉で年忘れして初仕事
隔世遺伝か正月も働く子
入院した事も忘れていた夫

紀の川市 宇野 幹子

ふる里へ帰る靴音響かせて
六Bへ時には神も降りてくる
地球儀にうんと緑を足しておく
コンビニの灯に廃船がたむろする
背骨から老いてゆくのを知る鏡

紀の川市 北山 絹子

中程に居る人生に怪我はない
陽が昇る今日一日の詩がある
疑いが晴れて心に虹が立つ
雪の夜は内緒話をしてみよう
豪邸で今日も鯛を焼いている

紀の川市 楠原 富香

母の部屋いちばん先に夜が明ける
老いて尚負けじ魂持ち合す
悲しみの涙も止まる形見分け
老眼鏡かければ見える世界地図
恍惚の母の世界を守り抜く

紀の川市 山東 日出男

鳥取市 奥田由美

広告を纏い循環バスが行く
渾身の一手にボナンザも怯む
七冠も初志に徹して奢りなし
旅人の心も和む一里塚

いつもより歩幅広がるニューシユーズ

田辺市 岡本 昇

へそくりとナビを頼りのフルムーン
目標を小さく持つてクリヤする
前向いて自分の足で立ち上がる
手鍋提げお嫁入りしていま女将
幸せは明け暮れ対話老い二人

橋本市 石田 隆彦

母親のロスした時間今日もゼロ
座ぶとんの上で咲かせる笑い種
失敗も無茶もいいじゃないの 若さ
同居する貧乏神も陽気です
一本の楊枝が語る物語

鳥取市 池澤 大鯨

正座をくずし全身痺れ血のめぐり
上司の叱言やつと終わってひきさが
借金を持ち込しやつと年金日
暮れていた思案ほどけて筆動き
思いこみ誤解が消えて再評価

住み込んだノラがサンタのプレゼント

学園で病名かわるお医者さま

待ち時間の居眠りこばむ堅いイス

ライバルが同志にかわる失恋日

母の忌にシャクナゲが咲く師走朝

鳥取市 加藤 茶人

ひとつ又ひとつ念には念の老い

取っ付きが悪いその上人見知り

無から有 有から無への法話聞く

答えならどこかにあるよそう急くな

中庸を善とする我が処世術

鳥取市 倉益 一瑤

かくれんぼ柩に逃げるとは卑怯(洋々さんを憐む)

その強気美学か毒かまだ不明

生き様も匂も大見得を切っていた

名調子の呼名は千の風となり

最後まで弱音吐かない鬼だった

鳥取市 田中 天翔

千両に正月ですと主張させ

僕の年愛犬タキがよく甘え

柴犬のタキは鎧孫がわり

正直に話せないから黙ってる

先生に逢える気がして句会待つ

鳥取市 棚田 大

命の字心を入れて長く書き
少子化にサンタクロース嘆き出す
世の中に喝入れることごとんと増え
戌年を迎える猫が不満そう
指導力財力低下子ら不安

鳥取市 谷口 回春子

頑固一徹我が家の宝孫が似る
天命と知ってもらった恋女房
呆けるのも天命ですと自己弁護
嫌な客早く帰れとポチ吠える
鬼嫁も寝姿見れば慈母観音だ

鳥取市 永原 昌鼓

医者巡りできる間はまだ元氣
老い独り自分で祝う誕生日
鳥取の星がまた逝く川柳界
八十余年生きた証の灰汁が浮く
正月も手抜き料理で口拭う

鳥取市 中村 金祥

元旦の吉を重ねる孫生まれ
老夫婦コタツの中で足喧嘩
五十年賀状もらった人想う
凶星つく記者が野党の顔に見え
頑張った親子涙の卒業歌

鳥取市 夏目 一粹

赤面をするお年寄りああ可愛い
おんなでも酒場放浪する強さ
打算などすぐ首にして生きている
不自由と不幸は天と地の格差
接点を拒みつづける片想い

鳥取市 平尾 菜美

家計簿の残業代が浮いてこぬ
あなたとの秘密墓まで持って逝く
長らえて座る椅子さえ見当らぬ
夕餉の膳箸淋しげに過疎進み
長らえて寒い介護の日が続く

鳥取市 福西 茶子

夏やせは無いが毎年秋肥り
にこにことせねばせねばとまた尖る
許そうと誓って寝ても朝の鬱
飽きたとは言わぬ仏へメロンパン
賽銭はチャリンと音がする程度

鳥取市 前田 楓花

お互いに年をとったね旦那さん
忘れない息が止まった痛告知
直進ばかりでは家に帰れない
曇り空洗車終って雨になる
都合いい言い訳は直ぐ思いつく

鳥取市 山下 凱 柳

どうしよう妻の名前がでてこない
老いらくの恋に媚薬が効きすぎた
私利私欲捨て切れなくてまだ生きる
本当ですか謙虚連発安倍総理
核戦争まさかないよね北の国

鳥取市 吉田 孔美子

錆びぬ内親のファイルを読破せよ
豊かに実るこそ実績のファイル
晩酌に小休止ここまで似るか
畑行き婆々は素早い身の熟し
公務終え化石になった年金者

鳥取市 吉田 弘子

ひとり言聞いて下さる仏さま
ひっそりと咲いて誰とも競わない
軽い音わたしの脳に響かない
男女平等やはり男か太陽は
柏手を打つ願いごと未だ出来ぬ

倉吉市 猪川 由美子

安倍一強野党はもつと強くなれ
国民榮譽暗い世照らすニュースだね
忘れることも気がラクになる方法だ
正義掲げても組織力に飲み込まれ
白鵬のワンマン振りが目立つわな

倉吉市 牧野 芳光

歯車のひとつになれぬ意地がある
瞑想をしに山小屋に行ってくる
少しづつ雀つてにんげんになった
天下盗る目線はボラリスを指す
しつかりせいと白紙に尻を叩かれる

倉吉市 山中 康子

標的の姉に負けてる百五歳
ライバルは康子己れに負けるなよ
ライバルの友へ電話でオメデトウ
子の指図したが今日も波しずか
東京五輪テロも地震も起こさせぬ

米子市 後藤 宏之

物産展試食いただき昼すます
綾取りで男をあやすこと学ぶ
ハミングで沈んだ気持楽にする
いい塩梅それがなかなかわからない
ルールにもちよつと逃げ道用意する

米子市 後藤 美恵子

石段を抱つこの犬と初詣で
娘婿血筋の通う子と思う
結婚の記念日祝う墓参り
憧れの三食昼寝すぐ飽きる
気前が良いそうか年金支給日だ

米子市 竹村 紀の治

天国へ届いたらしい二日酔い
カサカサのハートに染みる郷の酒
おはようのキャッチボールだ通学路
減塩に慣れた背骨のひとり言
おめでとう年賀を交わす診療所

米子市 中原 章子

年頭にあたりわたしを変えてゆく
準備してチャンスくるまで待てばよい
涙と汗しっかり吸った根が太い
信頼があつて注意を笑い合う
もう充分生きたと思う気がしない

米子市 成田 雨奇

酒飲んじゃダメというのは迷信だ
リセットがまだ出来てないお正月
犬の句がようやく出来て賀状書く
行列を一步はみ出す人が好き
手を出せば噛みつく犬と舐める犬

鳥取県 石谷 美恵子

若者よサアーまっしぐら腕組もう
サブリメントまだ幸いに口にせぬ
がむしやりに走ったこけた若かった
因習の壁まだまだ厚く残る里
もう少し若さが欲しい川柳道

鳥取県 斉尾 くにこ

人となり付度をして手書き文字
誤作動をしそう遠い日の栄光
面白い話にとまらないなみだ
二三本娘の髪にあった白
しんしんと雪予定なしあてどなし

鳥取県 竹信 照彦

戌年に犬飼ったことない男
権力に尻尾振る犬にはなれぬ
番犬になるのは止そうアメリカの
ペット用猫に哲学犬に無し
犬と猿どこまで続く泥濘ぞ

鳥取県 西谷 悦子

師走の帰省まず亡き親へ挨拶す
久し振り里の料理に舌鼓
年越えを元氣に出来て身も締まる
正月は外に出た子も帰る幸
いつもの人から賀状来る有難い

鳥取県 松川 行男

人不足阪大だとして同じ事
阪大にお世話になると衣替え
孫達へ阪大目覚せ祝うから
恥じらいを捨てて投句を繰り返す
会合に弱い男に歌がある

鳥取県 山下節子

走つたら間に合つたのに走れない
バカの壁どんなかなと本を買う
人は皆刑にならない罪を持つ
草筆りくらい出来ると老人会
まっしぐら男の美学頼もしい

島根県 伊藤寿美

不意に來た妻のカーブが躲されず
又と無いチャンス掴んだ筈だった
老斑の手で連れ合いの物洗つてる
坪菜園も冬大根が甘くなる
頑張つた過去がゆっくり喋り出す

松江市 石橋芳山

情眠する魚で現在地不明
ジャガイモを撫ぜれば頭からは花
マニユアルに押されてゾンビ化が進む
悪いのはアメリカ力尽くだもの
棒麵のようにツルンとしてる今日

松江市 川本 畔

病名をひとつ減らして年の暮
遠吠えのあなたの声を忘れない
幻聴がわたしを揺すり寝させない
お隣は淋しかろうと裏木戸へ
焼芋を二つ包んでノックする

松江市 藤井寿代

熱冷まシート3枚貼つて逢いに行く
バケツの水は人情に飢えている
新世界聴いて玉葱剥いている
いつからか写真嫌いになった私
額縁の中の冬景色は静か

松江市 松本 知恵子

町紅師一周忌が来る雪が降る
師の優し顔思い出しペンを持つ
新年のベールも取れて不満出る
ランナーも人も正月箱根山
駅伝に出た事遙かよっこらしょ

松江市 松本文子

「兎追いしかの山」は無くなりました 日本
受けた矢を抜いて下さる友が居る
人間百種百癖百体ああ安堵
念願成就だろう夜明けの星光る
孫達巣立つ時々私ホバリンド

出雲市 伊藤 玲峰
(玲子改め)

若水に心身浄め初詣
二重腰になつても道は外さない
まっ白な明日へ望み膨らます
穏やかな視線お傍に居たくなる
ほんわかと傷心なでる出雲弁

出雲市 岸 桂 子

結局は独りアンパン一つ買う
純粹な心を習うクレオン画
虫食いのキャベツに深いわけがある
一人来た海は心の画布になる
喪の服に袖を通すと喪の心

出雲市 小白金 房 子

上棟へ背負う孫等の俵餅
戌年へ腹帯しかと新春を巻く
校庭で遊ぶ豊かな四季の風
柴犬も雑種も囲むほりこたつ
成人の晴着を祝う花言葉

雲南市 松 本 昌

第三者頑張れと言う無責任
通販が過疎地に拍車かけている
ガス電気やがて地球は亡びるぞ
標識のない道を行く小商人
本堂の寒さ修行の一つなり

岡山市 高 岡 茂 子

雲の下夢ふくります沈丁花
ポチとなら軽く歩けた散歩道
ばあちゃんとトントコ相撲した炬燵
娘のグチ聞いて生きがい見つけてる
バレンタイン自分へのチョコ買ってみる

岡山市 田 中 恵

どっさりの母のおせちはよく売れる
レシビなどいらぬ素朴な母の味
ふらつくな漬物石に叱られる
ほどほどに油を売ってから消える
成り行きは尺取虫に任せよう

岡山市 山 縣 のぶ子

一人天下なんだ元氣を出せと言う
庭中にはこびる草と相撲取る
愛用の包丁さばく子等が来る
庭の花生けてよろこぶ夫なし
渚からお母さんと呼ぶ夕日

岡山市 工 藤 千代子

雨が降るわたしも少し太りぎみ
日脚のび煮豆かす汁田楽と
あつあつの雑炊祈っている余命
中途半端断ち切るように雨になる
何もかも聞いて他言はしない窓

岡山市 丹 下 凱 夫

備前富士まず元朝のスクワット
正月やトビとカラスの喧嘩など
「逃げ腰の犬」「酔っぱらい」よく吠える
底力雑煮七ツも食べたから
ほんやりとしているうちに八十となり

岡山市 永見心咲

広島市 岸本清

騒音の中で拾ったのは鼓動

絶望を希望に変える地を這って

突っ張っているが角砂糖は溶ける

喪に服すなんと簡素な風の音

マカロニの穴を塞いでいる自閉

岡山市 藤成操江

ワクチンをうって安心した誤算

少しずつ喜怒哀楽が薄くなる

加齢ですかと医者より先に言うてみる

手の内を明した後の気の緩み

期することなくて遊んでいる予定

岡山市 前田恵美子

元気です人の事まで気にかかる

墓地買って墓石を建ててその先は

夜の雪忍者のように音を消す

夕暮れが少し遅れて椿咲く

柚子味噌に早く変えてと柚子香る

笠岡市 藤井智史

欄外を越えて君への愛を書く

焼きそばパン百個で過去をチャラにする

わたくしのダークサイドが暴れ出す

地元愛俺は消防団なんや

出初め式花を添えますラッパ隊

受験前孫が一言遊びたい

初笑い今年の福を呼び寄せる

妻茶会僕は炬燵で雪見酒

しめ縄の稲穂にはしゃぐ寒雀

頼られてだんだん湧いてくる自信

竹原市 石原淑子

寒風の裸木背のびをする薔

雪化粧心の中を浄化する

小間切れの私の刻を膨らます

忙しない暮し水仙香りたち

時代難背筋正して逢いにゆく

竹原市 岩本笑子

今日こそは病忘れて食べている

蒲団干す病なんかに負けないぞ

若さっていいなバレーボールの世界

一進一退葉が一つ増えました

日本のここが痒いという地震

岩国市 上村夢香

ベテランの鋭い視線背に刺さる

徒歩三分我が家の宮に初詣

鎧着てオスブレイから身を守る

巨人キラー東京五輪俯瞰する

ひとりごとパズルに悩む四歳児

宇部市 平田実男

はっとしているが顔には出さぬ喪主

抜き足で私へ老いが忍び寄る

歳のせいにするから老いが急ビッチ

ライバルへ出会うと背筋伸びてくる

下松市 有海静枝

天皇の在位伸びたらなと思う

むずむずと短気短慮の春や春

一日を干して畳んで暮れてゆく

悲喜劇は幕となります灯を消そう

笑えない笑いのツボで笑う他者

家族って似ている勝手気ままぶり

はすかに座る私の指定席

推敲を重ねて本音見えてくる

万人に愛されたいとオブラート

瞬間を脳フィルムに焼き付ける

戌年にスタートをするプラ散歩

(前月分) 富田林市 片岡智恵子

ちっぽけな自分に気づく瀧落ちる

横綱の品格とやら去る涙

カード払いばかり計算疎くなり

いい人と言われ本音を噛みこらす

私の皺は昭和の歴史語るもの

(前月分) 黒石市 相馬一花

温泉に泊るつもりの皮財布

事務官は建前だけで処理をする

洗っても仲々落ちぬ恋の色

ゲストには何より凄く美女が来る

進むことより知らぬベン運び

(前月分) 大阪市 井丸昌紀

父母と僕般若心経でつながる

おじぎをし過ぎて誰も怒らない

友達はたくさん親友はいない

川柳を始めるに遅きことなし

怒り静まり悔いが始まる

川柳文学コロキウム創立15周年記念 全国誌上川柳大会 ご案内

自由吟2句(新作に限る)を1組として専用紙、またはB5原稿用紙に記入、投句料を添えて投句してください。

郵便番号・住所・氏名・電話番号明記のこと。

☆選者(8名による共選です)

新	家	完	司	高	瀬	霜	石
徳	永	政	二	柳	々	々	々
森	中	恵	美	子	真	島	久
な	か	は	ら	れ	い	こ	赤
							松
							ますみ

☆投句料 1000円(切手不可)(発表誌呈)

☆投句締切 2018年3月10日

☆各選者特選に呈賞

☆発表 川柳文学コロキウム81号
(2018年7月発行予定)

☆投句先 〒560-0004
大阪府豊中市少路2丁目1-6-505

赤松 方
川柳文学コロキウム誌上大会事務局 宛
TEL/FAX 06-6857-3327

自選集

小島蘭幸

風邪声に誰も気付いてくれません
風邪もいいなと思う妻のやさしさ
音信不通ずっと眠っておりまして
仙人のかたちで眠る風邪続く
外出禁止五日が解けた髭を剃る

政岡日枝子

耕された丘に風景画が泣く
深く耕す老いてく足で歩む道
森抜ける先に光が見えている
無心にはなれずカクテルなどの夜
晴れやかに老友達と戯れる

三宅保州

緋毛氈に涙流した跡がある
考えに考え抜いて出遅れる
ほんとうにガラスの靴が売っていた
第三者の意見も聞くに価する
第三者だから仲良くなりました

宮西弥生

阿弥陀堂やさしき人の飾り餅
いつまでも雑魚ではないぞ鏡もち
がたがたとお節介すぎて居場所ない
人間のかたち忘れてガムを吐く
奥の矢があるから感情乱さない

村上玄也

元気度の個人差開き出る老後
頭から足の先まで老いてくる
朝昼晩食後のたびに眠気来る
風邪ひいてホントの寝正月となる
美声だが音程いつも狂ってる

森山盛桜

矛盾点などは突かないのが童話
言動の誤差は承知で生きている
ふらふらとどっちが先か僕と独楽
高望みせず末吉を驚掴み
諍いの果ては更地が残るのみ

八木千代

今がイチバン
あの道の方がと踵返りたり
近道はこちらと膝を浮かせたり
けれど地道に雪の峠も越えてきた
平らになれば枯野の景もいとおしい
今が一番 日々の起伏に沿いながら

山 本 希久子

祝日の国旗昭和も遠くなり
まだたつぷりあると思つている余命
ジャズもよしクラシックよし雨の夜
ひ孫誕生余生の一頁
身の内の敵良心を眠らせる

板 尾 岳 人

エリエールに噂包んで流すべし
みな衆アホになつたら楽でつせ
ハルカスは自殺するには高すぎる
刎頸の友か雀が濡れている
夏祭りすんだら金魚よく笑う

川 上 大 輪

ゴミ箱で生まれて消えてゆくドラマ
自分史に少し加える昆布だし
原点はすでに更地になつている
氣にするな太陽だつて一人ぼち
頑張るといつでも何処か悪くなる

木 本 朱 夏

母の忌が巡りふくらむ寒桜
身の底の底で凍えている音符
生きるって今日も誰かを踏みながら
錆びついた扉叩いたのはだーれ
びくびくと春の音聴く猫の耳

小 西 雄 々

いいことが有るとサボテン花が咲く
幸せが欲しいと魔法の箱開ける
燦燦と老いたつもりも腰痛む
少年の時から歯並びほめられた
不細工に生きたが病氣しなかつた

斉 藤 劼

木守りのりんごに新春の掌を合わす
裸の底から春の音がする
いじめなどする子はいない雪合戦
風の絵を習う輝く瞳たち
地吹雪がこの世の汚れ掃いてゆき

新 家 完 司

本棚で防御しているテリトリ
短剣にしては不格好なスマホ
てのひらに届いたあの世からの雪
さて誰を呼んでいるのだらうか雪
暗闇に向かうルールを伸ばしている

竹 治 ちかし

定位置の同じ仕種で暮れる日日
人生の傷跡抱いたまま眠る
もうとまだ鎬削つて今日終える
故郷を知らぬ私が恋うる里
先客も元氣元氣の喜寿米寿

津 守 柳 伸

都 倉 求 芽

土 橋 螢

西 出 楓 楽

健康に留意不義理をした賀状

昭和一桁集う新年同窓会

事故事件平和祈願の戒さん

美しいケーキレディの揃い踏み

原発ゼロ夢の夢にはさせないで

正月の酒に遺影と少し酔い

天気予報最低気温が並んでる

冷えびえとお年賀状の来ぬポスト

初雪に情緒感じぬスマホの目

フルカラー外人着物初詣

鷺峰に伝統がある鯛が鼻

川柳の仲間が集う美術館

ここからは迷路地獄の一丁目

恋びとという幽霊と寝てしまふ

マンゴウと梨とリンゴと夏みかん

生きてやる核の終りを見るまでは

D51のリズムで巡るわが血潮

自分に嘘つく日が増える老いの坂

つましく生きたとて要るものは要る

笑わねばどんな闇が深くなる

仁 部 四 郎

前 たもつ

立ち話フェイクニュースと知っている
臆測を呼ぶ大物の立ち話
お花見の予算でもめた立ち話
処方箋総理へ出した立ち話
草の根の民主主義です立ち話

川柳は細く長くと初対面（藤井正雄氏を悼む）
小さな幸大事に今日も恙なし
洗濯好き妻に心を洗われる
狭い門選んで今も悔いはなし
目に見えぬ宝大事にしています

兵庫県政150年記念 2018年ふあうすと川柳大会 平成29年 年間賞発表

日 時 平成30年4月8日（日）
午前10時開場
場 所 兵庫県民会館 9Fホール
神戸市中央区下山手通4-16-3
TEL 078-321-2131
（JR元町・阪神元町駅より北へ徒歩7分）

宿 題（欠席投句拝辞）
「楽 器」 吉松 澄子 選
「遠 い」 松本 篤世 選
「屋 根」 天根 夢草 選
「いのち」 田中 新一 選
「 赤 」 小島 蘭幸 選
「 花 」 矢沢 和女 選
「雑 詠」 赤井 花城 謝選

出句締切 12時（各題2句）
会 費 2000円（記念品・発表誌呈）
（昼食は各自でお済ませください。地下に食堂あり）
懇親会 5000円 17時～ 当日受付
主 催 ふあうすと川柳社

藤枝―島田―金谷―日坂―掛川―と続く東海道五十三次の宿場で二十五番目の日坂の宿は今の掛川市にありましたが、最も小さな宿場のひとつでした。

ここは山間の宿場で、田畑もとくに無い貧寒としたところだったようで、民はわらび餅を売っていました。蕨がよく生えるように冬に山を焼いたとのことです。古川柳にこんな句があります

伯夷叔斉日坂へ来る所

伯夷叔斉とは中国の故事にある有名な兄弟伯夷と叔斉のことですが、ブリタニカの説明から引用しますと中国の殷周交代期（前1100年頃）に現れた賢人兄弟で、父が弟の叔斉を世継ぎにしたが叔斉は兄の伯夷に譲ろうとし終に二人とも位を捨て去った。後に周の文王を慕ってその地に行った。武王の時代、その不仁な行いに対して諫言したが、武王は聞き入れず、周王朝成立に伴い不義の粟は食わずと言つて山深くに隠棲、蕨程度の山菜を食うのみで、やがて餓死したといわれる一種の賢人伝説です。

この故事を踏まえて江戸の川柳では
瘦せこけた死骸があるところらびと
片意地な事だと蕨とりが言い

伯夷叔斉しなのとは大違い

兄弟で書き熨斗を喰う意地っ張りなどともつばら蕨だけ食べて餓死したことを強調しています。なお江戸川柳では信濃の人は大食いであるとの約束ごとです。

そしてやつと今回のエッセイの主題に入ります。

やがて君と伯夷叔斉たるもよし

薫風

寺尾俊平氏との仲の良さを薫風先生は伯夷・叔斉になぞらえたのです。

温故知新

『高杉鬼遊川柳句集』から

ハンカチに蝶が翔んでるハナエ・モリ

天の声 地の声 天安門の右

長すぎて蛇はとぐろ巻いている

メルヘンの夫婦で米の値を知らず

命日に河童が祀る清水昆

拝啓と書いてつづかぬラブレター

秋の夜長 光源氏を待ちわびる

母に会うそれだけでない秋まつり

おぼはんがバレエを習うレオタード

しあわせに目を閉じている風呂の首

先生も巡査もむかし恐かった

神様が聴こえるほどに鈴をふり

何でやねん駐車はわたしだけでない

税務署の目にどの店もよくはやり

病人は見舞いの嘘を知っている

親切な医者で薬をたんとくれ

わらべ歌きこえる京の五色豆

これはこれは美人の横が空いている

川柳塔の

川柳讃歌

(19)

上方芸能評論家 木津川 計

卒寿万才これから先はミステリー

津村 志華子

「九〇歳 何がめでたい百万部」(詠み人知らず)。佐藤愛子さんはめでたくて笑いがとまるまい。が、「卒寿万才」と言えず。目前の八十九歳で逝った人は無念だったろう。親鸞もこの歳だった。それに葛飾北斎、金田一京助、堀口大学に石橋湛山、「私は四千年生きるよ」で皆をケムに巻いた吉田茂も、あと数か月で「バンザイ……」と叫べたのに惜しいことだった。幸いにも志華子さんは、ミステリアスな九十歳をワクワクして生きる。

あの手この手でやってくる老後

谷口 義

卒寿を過ぎたならなぜミステリーなのか。老後が「あの手この手」で攻めてくるからだ。ならば迎え撃つわれらはどうするか「奥の手」で向かったのが医師会の会長だった武見太郎だった。終末の入院に拘わらず廊下を勝手に

歩き回る。看護婦の「許可があったのですか」に「おれが許可したんだ」。漢方薬を掌一杯に飲み、「医者 of のいうことは寝言だと思え」と一蹴した。義さんはやってきた老後に「誰の許可でおれの前に立つのか」と言うはずだ。

鬱の字がすらすら書けて鬱晴れる

鈴木 木 いさお

この難しい字をすらすら書ける呪いを編み出した人がいる。「リンカーンはアメリカンコーヒー三杯飲む」と唱えながらその通りに書くこと自ずから「鬱」になる。同様に「薔薇」もこう覚える。「サドの人々回転寿司はサビ一番」「一攫千金」は「手をかざして二つの目で見ると宝を積んだ一隻の船が見える。この宝を奪えば一攫千金」。この呪いに納得するには、いさおさん、繰り返し巻き返し呪い通りになぞること。すると自ずから書けます。

寅さんのように生きたい時もある

島 ひかる

フーテンの寅は風の吹くまま気の向くままの旅人だったから、あんなふうに生きたいとがんにがらめの不自由人は願った。が、寅さんは気の毒な男だった。なにしろ叶えられる恋がなかった。今川乱魚さんの恋は「二勝五敗」だったが、寅さんは四八連敗なのである。乱魚さんに照らせば一三勝に達したろうに約

束された失恋の運命と共に可哀相な寅さんは生涯を終えるのである。ひかるさんは幸せです。勝ち続けの恋に飽き果てたのですから。

片意地を張ったばかりに笑えない

田中 恵

谷崎潤一郎も片意地を張り続けた。終焉の病床で「このまま寝かせたら僕は死んじまう」と喚き、「どうしても東京へゆかねば」と愛用のバッグに財布まで持ってこさせ、懐中深く納めた。危篤に陥るや酸素吸入のマスクをはねのけてのけぞり、絶命。生命の飽くなき執着のまま達観を知らず七九歳で逝った。僕の終末は医者 of の意のまま看護師の思い通りな患者として、従容として少しも騒がず、手を振って去る(つもりですが)、さて恵さんは。

有名人享年がまず気にかかる

野下 之 男

なにしろこのところ有名人が次々絶えるのです。藤本義一79、愛川欽也80、蛭川幸雄80、菅原文太81、大橋巨泉82、小沢昭一83、永六輔83、藤村俊二84、野坂昭如85……。穏やかではおれないというの僕は只今82、この人たちの丁度真ん中、死亡適齢期に入っているのです。すると、いつ死んでも、ですから早々と長年のご愛読にお礼申し上げ……。皆様は之男さんともどもどうかいつまでもお元気で。

橘高薰風句抄

〔橘高薰風川柳句集〕平成十三年発刊

夏雲の 死ねば越ゆべき峰ならん

母と来てお伽噺の花の色

雲海に槍 胸中に人尖る

噴水の形変らず恋終る

明治村 醉生夢死の昼の月

明治村 烈婦というはすでになし

犬と住む都会の底の夜の底

信濃の旅 五句

霧のダム 紺の背広の竜神か

黄色い屋根の旅館に寝たり 秋の信濃の

幻の女の息の霧の音

霧の奥 熱が出そうな林檎の実

火口湖から わが眼鏡から 霧生まる

初冬の恋 鶴の面着て立ち向かう

十年経て女の言葉あわれなり

汝が祈りふかからしむと雪を給う

お元日 わが家の波夷羅大将も

元旦の冬濤を率て逢いにくる

青年の歌なまぬるきお元日

立ちたくて立ちたくて蛇木に登り

一枚めぐり一枚めぐり 波と恋

安西峰代さん結婚

およめさん金平糖を食べ 愛に満ち満ちてありぬ

石くれも三つ積んだら思惟の塔

攻める扉逃げる扉を持つあいっ

友来たる 古きレコード回すべし

山男 山を下りてはみすぼらし

牡蠣殻におのずからなる波の縞

冬の雷 石仏七千俯瞰の中



川 上 大 輪 選

河内長野市 穂 口 正 子

言い過ぎた忘れてほしいことばかり
気がつけば反芻してる嫌なこと

言うた言わん思い当たるが白を切り
誘うのは苦手でいつも待っている
幸運を貯めて小出しにできたなら
玄関を掃いて幸せ通り道

豊橋市 藤 田 千 休

書き初めて僕のこころを初期化する
君の住む街がわたしの恵方角
福寿草みんなそろって笑ろてんか
友情という名の盛り土崩れだす
飽き性の趣味も仕事も途中下車
未完成交響曲という余生

池田市 太 田 省 三

クラス会だれも私に気付かない
この辺にたしかタバコ屋叔父の通夜
建売は門灯までも勢揃い

歯を削る女医の笑顔が憎らしい

雪中の夜の行軍無事帰宅

大学へ虹の架かった幼稚園

大阪市 樋 口 眞

歳末の呆けたような昼の月

パソコンが不調息子の帰省待つ

大晦日いつも通りの日記書く

少量の大吟醸はいい薬

初詣で神社と寺を一万歩

鴨の数かぞえに今日も池巡る

福井市 伊 藤 良 一

年ごとに夢を小皿に移し替え

喪が明けてカルチャアのドアノックする

力抜くことも力が要ると知る

黙と言う答えもあると懐手

介護する鬼になったり福になり

また一つ縁が遠のく通夜帰り

瀬戸内市 宮宅 比佐恵

趣味一つ持ってたのしく齡重ね
元氣かと聞かれ元氣な顔をする
逝くまでは命の限り花咲かす
絵手紙に生きる力の彩もらう
他愛ない一言老いは満たされる
ドクターの笑顔に病軽くなる

大洲市 花岡 順子

温かいところへ銀行傘を貸す
踏み出せば一步幸せ近くなる
隙間風防いでくれる子が居ない
喋るのが葉ストレス溜めこまぬ
ブレーキを踏んで安全圏に居る
今を生きる昨日も明日も考えぬ

貝塚市 吉道 あかね

平穩な音で始まる台所
おはようさんに寒いねと言う人という
集中力なくてすかたんばかりする
水仙が背筋伸ばせと言っている
古稀からは口癖になるありがとう
痩せるのは無理で着痩せの服探す

池田市 上山 堅坊

大相撲さんと掛けたい塩胡椒
兵士にされ笑い失う子どもたち
詫び心見えぬ社長の深い礼

兵器みんな平和の鐘にする願ひ
情熱をしかと吐き出す五七五
八十路坂今には今の恋がある

門真市 坂本 星雨

太陽が今日のいのちへ降り注ぐ
爪折れて群れを追われた定年後
入れ歯でも牙はいつでも研いでいる
水源を求め彷徨う大都会
保護色を纏い生きぬく幾山河
夕暮れに氣付けばひとり影を踏む

横浜市 巖田 かず枝

愚痴らずに鼻唄歌う母だった
愛犬が十六歳の要介護
朝ドラで故郷の良さ知らされる
入院で酒がないから眠れない
作りがいあつたよおせち完食に
大人でも解りやすいよまんがなら

山口市 中前 幸子

積雪へ南天の実のより赤し
媚を売らない足跡が蛇行する
疚しいことは何もない冬木立
言い訳をして女の尻尾また伸びる
積み残された嘘を背負って女坂
本当は何も知らない喉仏

松山市 郷田 みや

白河市 鈴木 たけし

平静を装いしがみつく枯葉
ひとつだけ昨日と違うことをする

新しい音符を入れてポチ袋

はしゃぎ過ぎ雪がチラチラ降ってきた

穏やかな朝カーテンは三拍子

佐賀県 真島 久美子

神様はとても上手に無視をする

淋しさの果てを知ってる指しゃぶり

とりあえず笑う家族で乗り越える

癌告知さらさらさらさらさらさら

根性があつて笑つてばかりいる

沖縄県 島村 つばき

幸福を笑いの量で計る友

言いかけた言葉を忘れ咳払い

それなりに誉めて汗する披露宴

好きですとミミズ文字では出せぬまま

また増えた体重計に理由聞く

那覇市 前川 真

借景を頂きますと磨く窓

胸の鞘抜きたくないと置いた距離

物置に未練の唄が姦しい

蛭族狼煙をあげて吐く孤独

帯封を外して本音覗き見る

燃え上がれ二度目の薪は点きにくい

だんだんと実効支配するカラス

トリミングされた噂の一气跳び

閉校の校舎へ掛かる竹箒

こんなにも子どもいたのか旧校舎

横浜市 川島 良子

新年の一步挑戦への一步

リニューアルしますわたくし古希の春

スーパームーン平和であれと輝けり

飄々と生きてるキミのデカイ背な

大袈裟に騒ぐちっぽけな男

名古屋市 富田 末男

経験の違いで答光り出す

太い幹年輪に価値ついてくる

ユーモアで噂話をネタにする

ときめきを持つとドラマになりそうだ

叱られてフライパンまで叱られる

江南市 脇田 雅美

鍋料理食材入れてロスタイム

有頂天一気吞みして気絶する

しゃべり過ぎうなずく相手疲れ気味

一言の優しさや和む優先席

久し振る主婦のジェラシー盛り上がる

豊橋市 小松くみ子

ゴミ出しもすすんでできるよい夫
カッサンド持たせたくなる受験の日
寒暖の差アツパープローストレート
もったいないホツレを直す歳となる
ジーンズも破れる頃になじみ出す

豊橋市 高柳閑雲

街路樹が枝を払われ踊れない
インスタ映えないいつもの交差点
アメリカがくれるいつもの飴とムチ
時刻表通り手帳が歩き出す
正論を吐いてとごろを巻く酒場

大阪府 小栢こずえ

本音など言わずあの世へ持つていく
言う前に自分どうだか聞いてみる
体力に負けております好奇心
駄目な日は駄目な日なりに生きて冬
畑仕事している老いの骨密度

大阪府 高木道子

留守の庭山茶花咲いて散るけじめ
講釈は上手で不味い箸づかい
まさかの坂過剰包装して惚ける
稜線で熱り立ってる雪の雲
身の内のマグマ諫めるのお金

大阪府 畑中節子

老眼鏡外して脳も一休み
散歩道拾う小さな詩の種
一人居に癒しの便り孫の文
老いて今する事すべてリハビリね
今の世を褒める一句が浮かばない

大阪府 小野雅美

心から笑えた日には二重丸
好きな花飾って少し掃除する
特になしばかり続いている日記
きつすぎる形見の服はSばかり
Sサイズ誰も頂戴とは言わぬ

大阪府 柴本ばつは

無駄話時々しましょ胃の薬
父と娘とぎこちないのも絆ゆえ
ライセンスいっぱい持つて嫁かぬ気だ
三世代合わない話当たり前
いじけない性格これが自慢です

大阪府 長高俊雄

赤い糸色褪せながら結び合う
想い出は皆モノクロの淋し頃
妻の留守三度のメシの煩わし
正論に右も左も音はなし
土いじり言うも慎ましプランター

大阪市 森 廣子

泉大津市 助川和美

泡飛ばす蟹の言い分聴いてやる
牛乳のお札牛には言うてない
役に立ちたい蕎麦の花咲く過疎の村
本音の中で粉雪が舞いあがる
流れ着く人影もない難破船

大阪市 横山里子

河内長野市 中島一彌

草餅の餡の中より春の風
抽き出しに春隠してる桜貝
意地悪な指が教える造花だと
膝抱いて思案してても出ぬ答
日向ぼこ何度聞いても飽きぬ過去

堺市 梅木澄空

河内長野市 原熊知津子

スイーツで笑顔に変る妻の乱
くじ当り要らぬ肩書き与えられ
すっぱんが美女に生まれる電車内
見切りつけ再出発に沸く希望
近況も前置き長い律義者

堺市 松永庄三

高槻市 三谷白黒

湯上りの孫のホッペは熟トマト
よくわかる鮎を吐き出す鶴の気持ち
ママ友の来る日亭主はパチンコへ
満員車グリコ姿勢で乗ってます
心地よく目覚め床屋の鏡見る

意志弱い自分を憎むダイエツト
晩酌に趣味の陶芸マイオチヨコ
葱刻む昨日と同じ朝が来る
このままじゃ日本危険に晒される
終活に理想の葬儀プラン立て
暮れの絵師銭湯の富士画き上げる
大欠伸すればドスンと垂り雪
泥の雪日陰に残し寒椿
記念日をまず書きうつす初暦
三世代揃う正月祝酒
改札機通って記憶やつてくる
少年の地図へ書き足すけもの道
大地から小さな春がノックする
曲線になり女性へと脱皮する
微笑みを返す瞳に映る陰
ましなうち遺影の写真とつとこう
年賀状妻に来るのが多くなり
何事も他人にまかせてボケてゆく
散髪の爺さん寝てて困ってる
パソコンが固まる夢を今日も見た

寝屋川市 岡本 勲

大福がすべての悩み消してくれ
あの人があると話をもつれそう
小石にも岩に負けない意地がある
ボロボロにされても曲げぬ老いの意地
幸運の星に生まれて老い達者

箕面市 寺井柳童

威勢よく犬が引つ張る初詣で
見る世界すっかり変えた術後の目
知らぬ間にすっかり大人子の帰省
室外に響く産声男の子
カラオケの美声に自分惚れ直す

箕面市 中山春代

拉致の子を隔てる海も冬の色
狛犬へ十円あげるお年玉
戴いた塗り絵に嵌る喜寿の春
手に取った軽さで決める土産物
声変わり今少年が脱皮する

八尾市 田邊浩三

大都会そんなにいいか猪と猿
初恋の人は逢わねば歳とらぬ
除夜の鐘聴かなくなつて何年か
夕暮れになると熱燭呼びに来る
看護婦の孫の諫言節酒して

八尾市 前田紀雄

長生きをすると消費税も上がる
疲労骨折分解修理ロスタイム
ジャンボ籤下一桁もスルーする
一二三の笑顔とってもチャーミング
ふんわりと私を包む認知症

神戸市 玄番 美恵子

全開の窓ですどうぞ福の神
支援の手寒い心に温かい
平成の残る時間に加速つく
犬の名も家族に入れてある賀状
時々のはらはらさすも母元氣

神戸市 輿水 弘

鼻息の荒い馬です花粉症
夢の海泳いでいますまだ傘寿
ふんわりと言えば優しさこだまする
ふんわりには時にはチクリ針を入れ
そう急くな終着駅の灯は見えぬ

神戸市 山根弘華

不義理して友と無言の仲たがい
一言がすぎて会話の和がみだれ
人並の義理をはたして先ずは酒
晦日そば亡き夫しのぶ一人膳
言いわけを探し求めた散歩道

伊丹市 延寿庵 野 鶴

手抜きなど全くない花愛でる
赤ちゃんの笑顔に魔法かけられる
失敗もあるさゆっくり立ち上がる
今日の絵にピンクたっぷり塗ってみる
百色で足りぬ自分史彩を足し

三田市 九 村 義 徳

日の丸にしっかりせよと喝入れる
しがらみを絶てば拡がる青い空
停年後自由気ままに生きてます
風になり自由気ままに舞ってみる
俎板の妻のリズムで目を覚ます

宝塚市 太 田 としお

祈りだけで平和が来ると思えない
父母に感謝感謝の墓参り
老いて逝くみんな平等だと思ふ
私も心の中を大掃除
良縁も悪縁も皆縁の中

西宮市 福 田 正 彦

肉筆で受けた賀状に暖かさ
心打つ言葉に出合う披露宴
もしもにはきつとに変えて成しとげる
北の海光なくした船藻屑
野に町にLEDが絵を描く

和歌山市 倉 橋 悦 子

元氣だよたった一言それでいい
梅林の香りを消したバーベキュー
薬にも毒にもならぬ長電話
観て食べて春爛漫のフルコース
風向きが変わるトイレに逃避行

和歌山市 定 松 宏 枝

お迎えは急がなくてもやって来る
食べて寝てテレビくぎづけ三が日
はあちゃんの顔によく似た福笑い
引退をまだまだしない母の役
帰省する子を持つ母の一夜詣

和歌山市 西 川 千 鶴

星回り良過ぎ却って不安です
煽やかな文字が微笑む友の文
無理強いを菩薩になつて受け入れる
夜行バス先に寝付いた方が勝ち
凍て付いた夜を切り裂く緊急車

和歌山市 福 島 一 雄

出来合いの御節結構いけてます
大吉を今年も引いて出足よし
マフラを巻いてあげたい地藏尊
大寒波散歩の意欲へし折った
坪庭に梅の木一本春を呼ぶ

岩出市 村中悦男

高齢も経験という杖がある
バンダ楽しくさわぐ観客見て遊ぶ
野菜高心豊かにさし上げる
肌着一枚脱ぎたくもなる春気配
愛ということばの意味を知る後期

鳥取県 飯野菖子

まだ元氣この手の中に土掴む
耕せば信じた土は芽を伸ばす
手の中でマイクもじもじ出ぬ言葉
大根も美肌を見せて自慢する
コーヒーが心の友だ楽しもう

鳥取県 門村幸子

現実のこれがわたしか写真見る
脳の数伸ばすコーヒー濃く入れる
ガヤガヤと助け合つては雑魚の知恵
生かされて非力ながらもボランテИА
明日知れぬ知れぬと今日の予定表

鳥取県 橋谷静江

初対面孫のお相手氣に入つた
元日が祖父誕生日盛り上がる
家族愛笑顔で暮す誓い立て
年賀状数減つてきて寂しいな
方言で話せる友は仲良しよ

鳥取県 橋本 整

夢の中黄泉の妻とハイタッチ
歳重ね心の隅に溜まる愚痴
九〇歳寝酒にもらう顔の艶
要支援1が転ばぬ知恵をつけ
苦も楽も残して妻は終の旅

倉吉市 大羽雄大

少年の熱い掛け声募金箱
回覧の右に倣つて寄付をする
愚痴話足組み解いて聴いてみる
パズル解き今日はいいぞと調子のる
けろつとして腹の中では煮えたぎる

倉吉市 岡崎 美知江

母の帯卵に変えた戦後食
未来へと飛び立つ卵ぬくめてる
ふれた指何か奇跡がおこるかも
押し売りに独り女の意氣を吐く
華やいだ水着まとしてりハビリを

倉吉市 田中 紀美恵

くよくよをけろりと笑う妻といふ
手袋が心と両手包み込む
ポストさん故郷の風運んでね
年金を貰い過ぎだと言つてみたい
福の神どうして来ぬかとぐちこぼす

倉吉市 宮田風露

米子市 野川宣子

二重丸もらった暮の大掃除
大掃除貧乏神も追い出した
福の神障子張替え待っている
炬燵には魔物がいるよすぐ立てぬ
強敵に勝った日嬉し有頂天

米子市 生田和之

島根県 原德利

大根の葉っぱが美味い年の暮
秋深し零余子に旨い塩胡椒
ちよびちよびと出して老婆の自己主張
空のあることを知らない深海魚
東西で核が背伸びをして困る

米子市 池田美穂

松江市 中筋弘充

犬逝って私の愚痴は誰が聞く
夫婦茶碗後の不都合考える
今度犬飼えば私が看取られる
庭の草かくれんぼする雪が無い
煩惱を全部落として消えちゃった

米子市 伊塚美枝子

松江市 山根邦代

太陽のありがたさ知る雪晴れ間
二日酔い二度と飲まぬと言ったけど
二次会の十八番人より先唄う
スッピンもマスクの時期は恐くない
おだやかな年の始めは寝正月

とんどの火炙ったするめそり返る
我が家の犬は金の匂いに無頓着
寒さには滅法弱い戌どしだ
日がな一日居眠り番犬になれぬ
犬と孫自慢合戦年賀状
幸せの大粒の種植えました
満天の星のふたつは父と母
溜め息を日記に書くとシミになる
別腹のやんちゃ宥めるイチゴパフェ
あわ雪の自由きままな片想い

天皇陛下に倣い威張らぬようにする
百歳が増えて市長は忙しい
四十二度を越えた風呂では寝られない
釣り堀の中にもきつとある派閥
生き返る望み捨てない休耕地

締切りがせきたてるから出来上がる
手作りのおせちに箸が迷わされ
賀状から元氣をもらう墨の濃さ
雪降れば友を案じて電話する
独りでも美味しくちゃんと食べる幸

雲南市 菅 田 かつ子

おばあさんファイトファイトとまた出かけ
大笑い何処へ消えたか腹の虫

親友と会うと時間が直ぐに経つ

二三日声を聞かぬと気にかかり

おばあちゃんこんな時にも負け上手

雲南市 永 見 安 子

まあいいかそんな気持でいたい今日

老いたのか暑さ寒さもみな応え

廃屋の山茶花ひっそり赤すぎる

つかまつてくしゃみ一つに身構える

あてもなく転がる落葉見る命

玉野市 片 岡 富 子

故郷に根付かず腰が浮いている

息拔きのカフェは同類人ばかり

あの人に会いたくなくて冬籠り

飲んべえで鍋囲んでは毒を吐く

数独で挫折の次はパズルかな

広島市 松 尾 信 彦

点滴の落ちるリズムに生かされる

新人生全方向に道があり

失言を冗談にする吟醸酒

雑学が男の退化鈍らせる

何しても採算とれぬ老齢期

竹原市 若 年 幸 子

自動ドア鍵をかけたの誰ですか
赤いセーター落ち込む私立て直す

電子辞書ラジオ体操流れ出る

寒椿亡夫のエールか凜とあり

初恋は冷凍保存することに

府中市 岸 田 武

染みのある国旗を出して初詣

三が日今年も締めは胃腸薬

OB会いまだ序列があるのなり

残高のない通帳をゴム輪止め

湯につかる猿そっくりの図だらうな

三原市 笹 重 耕 三

初夢を出てこぬ老いの高軒

おめでとうと云われてもなあ七十二

千羽鶴解いてやれぬのが辛い

ふる里はいいね吊り橋ゆうらゆら

また揺れる活断層の大欠伸

山口市 青 木 隆 子

クリスマスご恩返し枕元

正月の花を飾って身もキリリ

シルバーカー卒寿の旅も無事に終え

謙遜を交ぜつつ話す口達者

じっと見て物言いたげなぬいぐるみ

今治市 渡邊 伊津志

硝子窓磨くと笑顔ついて来る
卒寿坂笑顔を足して越えて行く
渋滞の車横目に弾む靴
修羅あまた刻んだ皺にある気品

高知市 茨木 昭夫

街灯がサンバを踊る三次会
突然死憧れていて拒否をする
日本海波と暗雲二分割
終焉を飾る六方踏む稽古

高知市 三谷 松太郎

人生はまた観たいよな祭り哉
ユウウツも平仮名程の処方箋
しがらみを屁とも思わぬ老いの域
口髭が好きにしなよと尻たたく

福岡県 本田 さくら

孫帰るホツとひと息お茶にする
花生けるちよつと造花でごまかして
ミニバイクに蜘蛛が私につき合う気
賀状くるいろんな顔の犬がくる

唐津市 岩崎 實

ふれ合って確かな力生み出そう
立て替えにお返しの商品ついてくる
掃除好き夢にもすっかり箒の目
玄関の戸締り時に忘れてる

山鹿市 中山 好打

おしせまり家の内外おおわらわ
一年も心やすく穏やかに
健康でありたいと思う年重ね
感動もらい幸せもらい生きる道

山鹿市 前田 幸子

年賀状受取るだけの年になり
白寿まで輝く時間が残っている
成人式戦争半ばのわたしたち
初孫に怖いおじいちゃん笑顔です

山鹿市 柳田 白沙

弱点もリスクも含め私です
本気にて君の本気と向かい合う
飾り付け淋しさ色はぬきました
お犬様出逢った頃に戻りたい

沖縄県 禰 モモト

超下派手新成人は一度だけ
お年玉貰う一歳投げキッス
世の中は疑えば皆危険です
犬散歩一会にはずむ立ち話

沖縄県 宮 すみれ

雑草に交じったユリが春知らせ
春の土たまに素足で踏みしめる
寒い夜娘の電話あたたかい
古本に光と酸素入れてます

札幌市 斉藤 宏子

終末の深い微笑をプレゼント
つまずいてシャボテンの針丸くなる
背が見せる黄昏の道まっすぐに

五里霧中けもの道をつき進む

札幌市 富永 恵子

ほかほかをお供えします御先祖に

ふる里の夕焼け空と酒を飲む

一直線嶺まぶし冷えわたる

朝の経治めて今日の予定表

弘前市 高森 一吞

除夜の鐘煩惱消えて初日の出

箱根坂逆転一気四連覇

口づけの甘い波動の反抗期

台風に必死に耐えるリング達

千葉県 廣瀬 良磨

蜘蛛の糸降りて来るまで我慢する

ワープする為のジャンプは迷わない

満月に呼ばれて船に乗っている

味がない男であると自覚する

東京都 高岡 弥生

お正月立ってばかりで腰痛め

一年間よく働いた自分褒め

遠くから成人式を覗き見し

バーゲンに足を運んで憂さ晴らし

横浜市 長島 亜希子

怪我は禁物暮れの掃除は程々に

今日我慢すれば明日から日が延びる (冬至)

サンタさん待つ孫ずつとこのままで

あと何度食べるお節か心込め

静岡市 渡辺 芳子

年老いて始めて知った事多し

満八十八元気で過ぎた至福の日

今が一番と思える幸せ八十八

女としてこんな幸せありがとう

豊橋市 西郷 紀美代

収集も役に立ってるベルマーク

菜園で取れる時には皆安い

工夫する楽しみもある無い暮し

これからのやる気を語る卒寿の絵

大阪府 神野 千恵子

ドクターは異常と言わず歳と言う

振り向いたとたん記憶も後ろ向き

生命線敷と合体して長寿

宝くじほどの期待もない施策

大阪府 中内 孚彦

喪中がきに愛憎も薄れゆく

百二歳楽になったというマスク

ふるさとは草生す墓を抜けたとこ

女性マネージャーそんなにも汗が好き

大阪市 磯 島 福貴子

目鼻口私のパーツ福笑い
親の思いもらった名前福の字が
菩薩と鬼老親介護顔を出す
甘ったれが今や私の防波堤

大阪市 田 中 廣 子

待ち合せ時間ありすぎ回り道
トランプで孫をまかして大笑い
太鼓橋わたっておがむかわいい手
痛いところらべあつては大笑い

大阪市 中 島 栄 子

一周忌今あなたの気配感じます
愛用ノート今年のを供えます
鼻ペチャ曾孫愛嬌良くて和をつくる
娘還暦つくづく年を考える

大阪市 前 川 善 之

日本食腹八分での四季の味
初日の出見たさに登る高い山
猛吹雪日本の先が見えてこぬ
人生は思い通りに成らぬもの

大阪市 松 田 聰

沖繩はミサイルよりもヘリこわい
戦争で儲けたい人いるらしい
ええ年になりそう初日輝いて
折々の良き風習は残したい

大阪市 吉 田 知 之

ステッキと言えば杖よりハイカラだ
無理にでも止めさされても辞任です
人の事気にしすぎると動けない
怖かった母の躰は今も生き

堺 市 近 藤 治 子

秘密など持たない私荷は軽い
秘密よと自慢話を聞かされる
とっさには手足すくんで亀になる
あつさりと決まってしまう多数決

堺 市 羽 田 野 洋 介

さあ今日は何をしようか朝のお茶
図星なんて一つだけとは限らない
大切な人それぞれの物差しで
へとへとになるまで動くこともない

堺 市 大 和 峯 二

口先で県外実は辺野古です
日本製白い目で見る人増やす
原因をあいまいにして米軍機
軍事費を福祉縮めてまた伸ばす

河内長野市 渡 邊 修

我が孫もゲームコンビニ依存症
フリーダムトランプ落とす暴露本
養毛剤効き目疑うダンピング
新弟子に食べよ太れよチャンコ攻め

吹田市 岩 口 のぞみ
センター試験親にできるは神頼み

平和五輪政治の影がつきまとう

初場所で示せ新たな相撲道

今年こそ三日もたてば明日からは

豊中市 荒 木 郁 子

塾通い家計はいつも火の車

包丁の切れ味旨み引き立てる

ほろ酔いにお国なまりがついポロリ

踏み出そう今ならやれる未だ元氣

豊中市 荒 卷 夢

しきたりを全て破って寝正月

権力は仮面品性引き剥がし

人はみな戦の火種隠し持つ

CGは桜向日葵御意と咲く

豊中市 貝 塚 正 子

カラ元氣バレないように胸を張る

別荘も売って段差のない暮し

生れ年西暦で書き驚かれ

一人占めいつかしたいな天地人

豊中市 木 藤 こみつ

100円貸して早く返してとは言えず

総菜の値引じわじわ待っている

恐そうなガードマン立っいいホテル

目の検査当てずっぽうもよく当たる

豊中市 源 田 啓 生

本箱に溢れ積んでる本の山

淋しさは町から本屋姿消す

いつ頃か私の海馬怠け癖

荒れた手にいつか付きます運の気が

羽曳野市 磯 本 洋 一

口は貝それでも目から涙りだす

我が家では日々の喧嘩はごみ箱へ

口悪は医師も薬も治せない

梅を待つ春の優雅さ今そこに

枚方市 佐 藤 武 紀

辛かったと笑顔で話す人いいね

金婚式やつと二人は安定期

楽しいから老いの冷や水疲れない

脚に感謝石段続く初詣

枚方市 谷 英 也

コーヒーで咲かせてみたい恋の花

あれこれと反省しきり我が歴史

こらえきれず足踏みしてるトイレ前

新成人意識を変えて国変えて

神戸市 近 藤 勝 正

昼寝しているが如くに逝きたいな

野辺送り友と歩んだ五十年

この旨さ生きてる証し酒二合

もの悲し句ばかり浮かぶ年となる

神戸市 田 本 古 鈴

あと少しこれが意外と長すぎる
中天の月よ私はまだやれる
はかなさを知った時から強くなる
平昌の雪がグレーになってゆく

尼崎市 清 水 久美子

年金を使い果した松の内
恵方向きにして福を呼ぶ招き猫
在宅の確認だけの初電話
私の抱負などよりトラのV

伊丹市 平 井 富 夫

碁と将棋次の一手はAIで
八十路過ぎ今さら何を神頼み
目を皿に掲載欄の句を探す
ごめんです極楽行きへの先回り

加西市 山 端 なつみ

留守ばかり荷物渡せた十軒目
宅配の荷物捌けず夜になる
暖房の電気代見て凍り付く
両陛下互いの心杖として

篠山市 長谷川 善 輔

正月の準備スマホでみな揃い
除夜の鐘祝の酒のゴンダとす
初詣で神様からの風邪もらう
祝い餅のどを通してはとす

篠山市 藤 井 美智子

新年の佳句へ挑戦好奇心
白みそのやさしい味がお餅抱く
地産品つまんで旅を賞味する
行って良し帰ってうれし旅日記

三田市 幸 田 厚 子

ごめんねときれないな嘘も人助け
忘年会ちよつとだけよと古いネタ
いい教材うんこドリルでやる気出す
鑑定団見てたら家も似た物が

三田市 宗 福 清 司

マッサージ何が効いたか教えてヨ
私の想い通じなくなるじわじわと
日常のリズムが狂う終活で
ヘクトパスカルよりミリバールが好き

三田市 馬 場 貴美江

拍手より笑いがほしい敬老会
家族づれ老いの重圧食べ放題
旅みやげ行った気分になせられる
近未来平均寿命百歳へ

三田市 東 内 美智子

リハビリに特別下着選ぶ朝
簡単に書ける平凡難しい
欠点をはっきり言われ考え中
引越して憧れの君ふと思う

三田市 松本 ゆかり

極月の財布の中身が走り出る
もろもろの欲とんと失せ年の暮
誰からもあてにされない大晦日
大晦日ひとりぼっちの月冴える

宝塚市 岸田 万彩

機嫌良い年寄り無理に演じてる
あの人と同じ空気を深呼吸吸
厚化粧うまくいったという自信
動線が短くなった老いの足

姫路市 中野 忠

初日の出どこから見ても陽は同じ
まだ欲があるのか影がゆれている
脇役もいいな他人を光らせる
ぶらんこがただ下がっている孤独

三木市 山口 久子

年明けて家族のみなに有難う
都合良く忘れて暮す老の知恵
許さんと口では言うが目で笑う
好きな事言えてうれしいわが家です

奈良市 尾畑 なを江

はつれてた結んだつもり赤い糸
朝いちに白湯と梅干しサアやるぞ
蜜蜂に礼を言つては蜜使う
口先の言葉だけでは響かない

和歌山県 森下 よりこ

大雑把だけど一年のしめくくり
鍋にしたら野菜もたんと食べられる
戻りたいとは思わぬ昔懐かしむ
お正月二日休んで畑恋し

和歌山市 北原 昭枝

薄氷の足元ひかる冬日差し
しみじみと鏡に皺を見詰められ
お互いのために忘れる古い傷
矢印を追って曲れば花の径

和歌山市 佐藤 まき

歓喜の歌世界の果てに届くよう
近隣の外国よりも遠い里
冬前海まるで特攻朽ちた船
如何な魚捕ると云うのか漂着者

和歌山市 鍋嶋 澄子

明日あるを信じ前むき沁みる風
雪やなぎ冬をしのいで咲きほこる
独り食べ電話もなくて長い夜
涙あふれるガンバレこころ届けてる

鳥取県 児玉 規雄

犬猫の大問題も高齢化
犬すべて忠犬だとは限らない
年末も年始も猫はマイペース
送付先うっかり僕の住所かく

鳥取県 下 田 茂登子

鳥取市 山野 すみれ

百歳が百五歳まで期待する
雪の夜の寂しさ一人寝るのです
戸締りをして不安な雪の夜
一人居がいつまで続く悲しさよ

鳥取市 上 山 一 平

新元号気になり酒も熱くなる
紅白に手打ちのそばが味つける
老いの身に雪五センチが邪魔をする
大らかにひとさし指も賀状読む

鳥取市 大 前 安 子

今が旬命弾ませボランティア
ほっとしてくれる気遣いと寂し
ずけずけが痛くはあるがありがとう
一拍二拍ずれて最後が合う不思議

鳥取市 田 賀 八千代

夢の位置ずっと変えずに貴方待つ
あの日からずっと止まっている時計
目線変え今の幸せ気づかされ
火の海が待つのも覚悟まっしぐら

鳥取市 副 井 裕

泣き言を重ねる度に友が去り
じじいギャグ孫は静かに部屋を出る
AIに人生指南して貰う
風邪治す免罪符あり卵酒

何事も無いかのように融ける雪
淋しさを賄う嘘を口に盛る
斜めから声掛けをするリポーター
地に足が着いているかと蟻が問う

倉吉市 田 中 けいこ

恨まないけろり忘れて笑います
落葉焚き集めた枯葉燃やせない
快晴の冬空に鳴る「北」の音
紅白の歌手曲名に年齢を知る

倉吉市 堀 かずこ

年明けに毎日歩く誓いたて
悩むまいならば笑って今日の日を
まだ若い思ってたがよくころぶ
胸いっぱい朝の空気はおいしいな

境港市 中 井 虎 尾

立行司セクハラ軍配どうあげる
おいガンよ俺が死んだら君も死ぬ
医者ハシゴその為免許いるわたし
我が川柳歌で言ったら音痴かも

米子市 川 本 美津子

カレンダー通院の日を書けと言う
内緒ごと心に鍵をかけている
声かけてもらえぬ事が生き甲斐だ
秋野菜100円ですと無人市

米子市 田村周子

さて一句ひねっていたら雪景色
心臓の鼓動気になるこの病
正月の準備も何も娘まかせ
年末のあわただしさも人事に

米子市 戸田真理子

欲の皮一枚脱いで丸く生き
食欲とメタボ戦う酒の席
あと5分布団の毘が外せない
引きつった愛想笑いが壁作り

米子市 見山温子

大でさえ姿勢正してお手をする
外出の背に早く帰れと夫の声
病一つ癒えても皺は増えている
検診日何か見つける若い医師

松江市 相見柳歩

順調はいらないもつと遠回り
みえみえのようだ付度してもムダ
想い出の昭和の町の音
まだ生きる知らないことが多過ぎる

出雲市 黒目ひでお

生きていく不思議な日々を繰返し
一心に世直し願う年を越す
中東に和平は来るかエルサレム
速すぎる闘將逝って淋しいな

広島県 日谷 寛

平成の残り僅かに託す恋
平成の残りへ感謝して生きる
前向きな恋平成を演じ切る
平成のうれしい愛につつまれる

広島市 田桑恵子

来る年の平穏祈る除夜の鐘
元旦のリビング狭し子ら集う
おせちより肉に手が出る子も孫も
初風呂に年末疲れ癒やされる

尾道市 小畑宣之

半鐘が鳴れば飛び出す父と僕
茜空帰っておいで鐘が呼ぶ
道草の多い人生豊かなり
大相撲強ければ良いだけじゃない

竹原市 土井輝恵

許されて許して歳を越えて行く
窮極に縮めた文のライン来る
最初からくもりガラスでなかったが
歳末の雑事に惚けが加速する

三次市 伊藤寿子

認知症の施設へ送る日の孤独
身内ではないが家主と切れぬ仲
主の居ぬ二階の音に身がまえる
嫁姑同じ鍋でもちがう味

宇部市 高山 清子

友の安否賀状でさぐる高齢化
孫曾孫引きあげあとに空財布
紙一枚といえどわが身をしばりつけ
メモと辞書夢があるからはなせない

(前月分) 福井市 伊藤 良一

明日特に予定はないが晴がいい
足腰に先ずは意見を聞く予定
弱点を褒めて育ててくれた母
定年後妻の元気の後を追う

(前月分) 竹原市 若年 幸子

なんとまあ献立もある電子辞書
お歳暮という絆の届く十二月
電子マネー昭和産まれに馴染めない
ジャンケン大会いきいき若さ取り戻す

(前月分) 三次市 伊藤 寿子

振りかかる火の粉度胸を決めて受け
誕生日きては驚く歳となる
人生の節目を拾い上げ感謝
ノラ猫の頭をなでた日の鼓動

(前月分) 三田市 宗福 清司

喜寿過ぎて今なら言える愛してる
解釈ミス許してやって一度だけ
喜寿までのあの情熱は何処行つた
喜寿過ぎも自由三味良いでしょう



『銀髪』

本間 満津子

気楽さをとれば淋しさついて来る
銀髪になったら着たい色が有り
我が胸のアルバムにある小さな駅
夫婦茶碗 女は小さい方が良い
もうどんな色にも染まぬ黒を着る
紫を着たくて白髪光らせる
明日もまた普通の朝が来るように
まつ黒なキャンパスに描く音の色
耳だけのくらし自由な絵を描いて
白杖を持たず歩いた夢の中
明日また会えると軽くさようなら
風鈴を捜す小さな風の旅
遠い人どうしてますかお月さん
秋を書くしみじみ遠い子へ便り
雪月花 宴の人は変れども

(平成6年6月6日 川柳塔社発行)

英語 de Senryu ⑦⑤

麻生路郎句集 『旅 人』

英 訳 吉村 侑久代 Kim Horne

古い値をいふて年寄値切るなり

the old man

beats down the price

telling the former price

借金が あるとは見へぬ 石畳

great stone pavement

at his house

he seems not to be in debt

beat down 価格を値切る *price* 値段 *former* 前の、昔の *great* 素晴らしい
stone pavement 石畳 *seem* 思われる *be in debt* (人に) 借金している

～リバーウィローのため息～世界の川柳・俳句⑮ ポーランドと日本で日本文学を学ぶ

エルジビエタ・コロナ (*Elżbieta Korona*)

コロナさんはワルシャワ大学日本語学科の梅田アグニエシカ先生の下で日本文学と俳句学びました。卒論のテーマは「日本の俳句の翻訳方法」でした。大学卒業後、日本に留学し、東京大学大学院人文社会系研究科で修士論文「俳句と *Haiku* の詩学」を書きあげました。コロナさんは私との交信の中で「日本語の音の美しさを俳句によって再認識したことがきっかけとなり、実作と翻訳を含めて俳句を世界文学として鑑賞している」と述べています。ポーランドでの俳句研究者は創作者でもあります。*cherry trees and willows* 『桜と柳』からコロナさんの作品を引いてみましょう。日本語は『葛』の関木瓜さんのチェックが入っています。

peony petals/ cascading down one by one/ along with the dark

(散牡丹ひとひらづつの暮れてゆく)

a white feather floats/ upon the agitated waters/ swans

(白鳥の喧嘩の羽をまき散らし)

on slithers of ice/ rocking to and fro, some ducks/ two here and three there

(薄氷に恐ごわ歩く鴨二三)

誹風柳多留一二篇研究 57

式百まひあるで礼者におどろかす

安五礼 1

山田 賛。但し、「百人一首」と限定は出来ないでしよう。

石川 賛。やはり「百人一首」では、蟬丸の歌とのかかわりで……。

清 「松の内」とあるから、歌がるたに違いないが、蟬丸の歌はもともとは「後撰和歌集」巻第十五にあるもの。山田説は、これを言いたかったのでしょうか。

伊吹和男・山田昭夫
石川道子・小栗清吾
細井龍夫
清 博美

479 小壺両わしにとられる大不首尾

伊吹 博奕句であるから、浅草竜泉寺町でなく南足立郡花又村の酉の町。鶯神社の祭礼なので、賭博に負けたのを鶯に取られて大失敗だと表現している。

清 賛。とられまひ事か向ふハわしの神 安四智 7

480 ねるのにも二タとをりある大三十日

伊吹 同じ寝るのでも、掛金をきれいに支払って早々と寝るのと、掛金が支払えないため仮病を使って寝るのとの、二通りある大晦日である。

寝たかつて懸取を待ッ能イ工面 一 17
病人にまやもの、有る大三十日 二〇 21

山田 賛。タテとヨコの二通り。横に寝るは「②返済、支払、納入などをしないでいる。特に借りたものを返さないでいる」(「日国」)。小栗 賛。山田説なるほど。

481 松の内しるもしらぬものぞくなり

伊吹 百人一首の、これやこの行くも帰るもわかれては知るも知らぬもあふ坂の関 蟬丸の文句取り。百人一首を知っている者も知らない者も、ちよつと覗いてみる正月の歌ガルト遊びである。

482 万才ハ舞ひ納めると不人ン相

伊吹 舞い納めた三河万歳の太夫と才蔵は、もう演芸を終えたのだから素の自分に戻る。見ている者としては、それまでが賑やかだっただけに、急に無愛想になったように感じる。

万歳はまひ納ルとかたく見へ 明二礼 2
万歳ハまひ納メるとけろりくわん 明五智 2

細井 賛。営業笑いですから。

清 賛。

483 わらやるな若このさまの伯父御だよ

伊吹 妾の兄。妹のための急な出世だから、

武芸その他になれないので、落馬など失敗の連続である。それを見て笑っている人に、かりにも若殿さまの伯父様だよと、たしなめた者も恐らく笑っているのだろう。

御殿の笑ひ兄貴の落たまね

藐25

山田 賛。若殿を出産した妾の兄。

伯父さまて候なと、二本さし

傍二17

清 賛。

484 とうろつの内はしらつとうりもする

伊吹 吉原の年中行事のひとつ、玉菊灯籠。六月晦日から七月十三・十四日の二日を除く七月晦日まで、普段は吉原に來ない一般の婦人たちも、妓樓の軒に吊るされた遊女玉菊の追善の灯籠見物に訪れた。それを素人売りと表現している。

とうろつ見にぐちな女がそうろぞろ 一八35

清 賛。

485 着つゝなれにし大もんてはやす也

伊吹 三河万歳。『伊勢物語』九の、

から衣きつゝなれにしつましあれば

はる／＼きぬる旅をしぞ思ふ

からの文句取。着馴れた烏帽子大紋の太夫が、

正月に離しているさまを詠んでいる。

三河からきつゝ、馴にし門トへ来る

二四11乙

山田 賛。三河から「はる／＼くるきぬる」。

細井 賛。「檀家帳」に何月何日に何何家と

記入してあり、出来る限り予定通りに廻動

したので、「きつゝなれにし」、―おきまりど

おりに、と文句取が生きているのです。毎年同月

同日に同じコンビが祝い込みに來たのです。

清 細井氏に積極的に反対する積もりはない

が、句は「着つゝなれにし」で、着慣れた大

紋での意、礎稿引用の例句が、細井氏の言わ

れる「來つゝなれにし」となろうか。

486 座敷らう母も手じやうがものハ有

伊吹 手錠は手鎖ともいい、一定期間（三十

日・五十日・百日など）両手に手錠をかけて

自宅謹慎させる刑罰。どら息子が座敷牢に入

れられたその母親は、罰として手鎖の刑を受

けていくらしいの、我が子に甘い共犯者であ

る。

ちつとづ、母手つだつてどらにする

一九8

清 賛。

487 夕たちにあふと女ハすたる也

伊吹 立派な身なりをして、きれいな化粧の

女性でも、夕立に遭つて濡れ鼠のようになれ

ば、台無しである。

小栗 濡れて着物や化粧が台無しというので

はなく、裾をはしよったり、小走りになつた

りして、ちよつと気取つて女っぽい姿態をし

ているわけにはいかなくなることをいうのだ

と思つていたが、鑑賞の問題かもしれぬ。

清 同右。濡れ鼠になつては困るのである。

488 つくし迄どぶ行りやうと内侍とめ

伊吹 摂津国豊島河原で足利尊氏を破つた新

田義貞は、九州へ逃げる尊氏を掃討すべきと

ころを匂当内侍の愛に溺れ、中国地方への出

陣が遅れた。それが原因で義貞は、灯明寺殿

で不慮の戦死を遂げる破目となる。そのとこ

ろを「あの遠い筑紫まで、どうして行くこと

ができましたか」と内侍が止めたであらう、

と詠んでいる。

清 賛。義貞が気の毒である。おかしい伝説

を作られてしまったものだ。

愛染帖

新家 完司 選

(投句275名)

弘前市 稲見 則彦
まあいかにこの雪の下春がいる

(評) うんざりするほどの長い冬。だが、雪の下では「もうすぐ春だ!」と草花たちが身構えている。春の喜びも風雪のおかげ。

伊丹市 延寿庵野鶴
上げ底の土産の底は雪景色

(評) 雪の下には春がいるが、上げ底の下にあるのは虚しく寒々しい隙間だけ。雪はいずれ溶けるように卑しい商魂は長続きしない。

岡山市 永見 心咲
鍋なべなべ呪文で帰る寒い夜

(評) うゝさむいさむいゝ、なべなべなべゝと眩きながら背中を丸めて急ぎ足。こころも体も温めてくれる、まさに無形文化遺産。

沖縄県 森山 文切
神様はいますか冬のバチンコ屋

(評) 神出鬼没の元祖である神様は何処にでもお出ましになる。が、バチンコ屋でウロウロ口されているのはみんな貧乏神だろう。

土佐清水市 辻内 次根
八十歳の遺産紙屑だけの部屋

(評) さて、この部屋で遺産らしきものは? と改めて眺めてみれば…。川柳誌、句会報、作句帳等々。他人から見れば総て紙屑。

鳥取県 斉尾くにこ
おめでどうなんでもなくて普通の日

(評) 地震、洪水、台風、事故、怪我、病気等々、穏やかな暮らしを壊すものが何も無い「普通の日」が一番めでたくて有り難い。

大阪市 江島谷勝弘
牛肉は干し草だけでなぜ旨い

(評) そういえば、水と肥料とお日さまだけで旨い米や林檎や梨等々。有り難いことだが、それを頂戴している私たちは、さて何を?

沖縄県 宮 すみれ
カーテンの透かし模様を映す壁

(評) 何が何して何とやら等の小賢しい理屈ではなく、見たものをそのまま述べた。川柳でしか表現できない究極のリアリティー。

松江市 梅瀬みちを
神様はクジで不幸を配つて

(評) 何も悪いことをしていない善人が事故に遭うことがある。まことに理不尽ではあるが、クジに当たってしまったのだらう。

大阪市 森 廣子
辿り着きここはどうやらデストピア

(評) 老後をゆつたり過ごす予定のケアハウ

ス。ユートピアであってほしいものだが、デストピア(暗黒郷)とは情けない。

神戸市 細川 花門
口までの距離にご飯をよく零す

箕面市 中山 春代
シンプルが決め手我が家の家電品

米子市 竹村紀の治
静止画も動画もやはりお爺さん

岡山県 山縣のぶ子
ぐうたらううたた寝怒る夫もなし

門真市 坂本 星雨
真ん丸の小さな消しゴムが宝

横浜市 川島 良子
ウマが合うキミもわたしも変わり者

堺市 内藤 憲彦
漢方の何が効いてか口達者

豊中市 木藤こみつ
和服着て巴里を歩けばよく目立つ

堺市 澤井 敏治
陽炎を踏むな神さまかもしれぬ

三田市 上田ひとみ
もうアカン何べん言ったことだらう

福井市 伊藤 良一
毎日が弱い自分とボクシング

鳥取市 永原 昌鼓
ハードルがなくても転ぶ老いの足

松江市 相見 柳歩
重力波銀河の奥の奥の窓

東かがわ市 川崎ひかり
男手がなくても出来るお餅つき

大洲市 中居 善信

意地を張る子供のままで老いている

松江市 石橋 芳山

生意気なガキで私によく似てる

黒石市 北山まみどり

足並みを揃えて脆くなる姿勢

岡山市 丹下 凱夫

八十になっても大掻きはやめぬ

大阪市 谷口 義

何着ても似合わないけど出掛けます

三田市 堀 正和

ストレスを隠して楕円形になり

破られず黄色くなっていく障子

和歌山市 古久保和子

煙に巻く積りらしいなカタカナ語

絡まったコードの先の痴話喧嘩

ガラケーのガラとおんなじ暮らしかた

神戸市 上田 和宏

ふくふくとふくらむ餅や福の花

佐賀県 真島久美子

町静かカラスもきつと寝正月

老眼をまだ認めない母と住む

腹黒いから愛されているのです

塩竈市 木田比呂朗

認知症だけはクリアの免許証

A1に引けをとらない妻の勘

那覇市 前川 真
子が巣立ち庭に小鳥が巣を借りる

三田市 谷口 修平

ええとこへ生まれ変われと茹でる蟹

大阪市 若本 安代

お互いに会いたいだけの古稀の恋

大阪市 平井美智子

泣いて縋ればあと二ヶ月は延びた恋

鳥取市 山野すみれ

四角にもなってみたいか今日の月

岡山県 紫 しめの

まずカボチャ鍬振り上げるシンデレラ

「どうぶつの森」からママが帰らない

弘前市 高瀬 霜石

ステーキを所望 老人なのだから

東京都 川本真理子

鮮やかな歴史 わたしの裏帳簿

二人居てやりとりされる独り言

大丈夫とだけ叫ぼう流れ星

京都市 都倉 求芽

手も当てず大きな咳を居間ひとり

国産品限定危うくなってきた

榎原市 居谷真理子

短足は昭和生まれの泣きどころ

異議ありとヘクソカズラやアホウドリ

岩国市 上村 夢香

ひふみの語りは心地よいひびき

煩惱と闘いながら前を向く

奈良県 長谷川崇明
新蕎麦の幟古ぼけ年を越し

除夜の鐘誰が撞いても同じ音

玉野市 片岡 富子

おみくじに次の挑戦促され

血糖値わかっていてもあんこ餅

鳥取市 上山 一平

凍てた朝バリバリ車咆えている

凍てた道へつぱり腰は理に叶う

京都市 榎本 宏子

今の主婦スマホ・パソコン多忙なり

松山市 柳田かおる

スマホにランチおばちゃん達が超熱い

八尾市 高杉 千歩

スマホに拍手日本中に友が増え

高槻市 原 洋志

老化度を測るスマホを持たされる

枚方市 山口弘委智

六人の玉砂利の音七五三

東大阪市 北村 賢子

お百度を踏みほのぼのと和む胸

藤井寺市 若松 雅枝

百度参りしてくれた母いま炬燵

米子市 生田 和之

通院のコツは元気で惚けぬこと

堺市 矢倉 五月

享年という自己決定の出来ぬもの

尼崎市 清水久美子
どの人もよそいきの顔初句会

堺市 大和 峯二
剣よりも川柳強く生きる知恵

上尾市 中村 伸子
縁と縁間違えられた句の行方

枚方市 海老池 洋
見ようでは僕も川柳依存症

奈良市 辻内げんえい
喪中ハガキにそちらは出せと書いてある

桜井市 安土 理恵
来年は絶対作らないオセチ

河内長野市 黒岩 靖博
帰省せんとドタキャン家族おせち泣く

藤井寺市 田付 絹枝
大晦日手抜き納めのセツト蕎麦

神戸市 奥澤洋次郎
居眠って湯船の中で年を越す

堺市 村上 玄也
プラスチックにかたどられてる鏡餅

枚方市 寺川 弘一
今年またしっかり飲みと初日の出

貝塚市 石田ひろ子
元日もやっぱり回る洗濯機

芦屋市 黒田 能子
元気ですか元気ですよという賀状

奈良市 大久保真澄
来たきたと生存チェックする賀状

鳥取市 岸本 孝子
三食昼寝おせちが強い味方です

箕面市 広島 巴子
本当はバアバも欲しいお年玉

河内長野市 中島 一彌
神様に物申すべく口漱ぐ

羽曳野市 中川ひろ介
熱燗を飲んで繰り出す初詣

奈良県 谷川 憲
初詣仁王に我欲見抜かれる

倉吉市 岡崎美知江
小銭だが家内安全祈ります

田辺市 岡本 昇
古い一人野地蔵さんに初詣

和歌山県 森下よりこ
少し贅沢だった一人の新年会

米子市 成田 雨奇
正月はとろんと過ごす一日中

鳥取県 門村 幸子
お正月亀も汗ばむウォーキング

三原市 笹重 耕三
堂々と飲める三が日の旅路

三田市 野口真桜子
勝気な娘負けて泣き出すカルタ取り

米子市 後藤美恵子
夢のある大風呂敷に初笑い

唐津市 岩崎 實
消しゴムの黒きを削り年新た

倉吉市 大羽 雄大
ゴミ出し日今日はオイラの事始め

河内長野市 木見谷孝代
餅丸め歪みも焼けばみな同じ

寝屋川市 平松かずみ
福袋二千万円誰が買う

高槻市 安田 忠子
独り居の淋しさ募る正月明け

宝塚市 田中 章子
初競りのマグロを一度食べたいな

河内長野市 村上 直樹
鯛よりもレアのビフテキまだ傘寿

防府市 坂本 加代
干し柿に里の景色と母の顔

宝塚市 丸山 孔一
顔上げて胸を張ったら出る元氣

鳥取市 田中 天翔
口角が上がりっぱなし子の帰省

枚方市 丹後屋 肇
インバウンド名残りを惜しむ石の庭

倉吉市 牧野 芳光
本当にピカソがわかるのだろうか

三田市 足立つな子
年五回ご先祖さまに会いに行く

三田市 東内美智子
遺骨から骨仏創る一心寺

大阪市 柴本ばつは
あかん時あかん言うてや早い目に

池田市 上山 堅坊
 人脈を増やしています縄のれん
 寝屋川市 伊達 郁夫
 屋台酒今日の微罪を置いてくる
 富田林市 山野 寿之
 お茶よりも話を丸くするお酒
 江南市 脇田 雅美
 呑み比べ楽しい友と試飲会
 大阪府 藤田 武人
 拘りの徳利で燗をして自慢
 鳥取県 橋本 整
 秋刀魚焼き大吟醸で誕生日
 大阪府 岩崎 玲子
 お気に入り大ジョッキあるレストラン
 松江市 中筋 弘充
 明日もまた働きたくて酒を飲む
 羽曳野市 宇都宮ちづる
 大根葉酒飲みだけが知る旨さ
 札幌市 三浦 強一
 休肝日前は別れの酒に酔う
 三田市 福田 好文
 休肝日明日きっちり取り返す
 香南市 桑名 孝雄
 休肝日なくても卒寿まで来れた
 八王子市 川名 洋子
 守らぬが禁酒書かぬと落ち着かぬ
 松山市 栗田 忠士
 当たり前だった二次会三次会

三田市 北野 哲男
 下戸ですが飲み会好きで人が好き
 倉吉市 山中 康子
 養命酒チビリチビリと猪口二杯
 大阪府 田浦 實
 AIには酒の接待効きません
 唐津市 仁部 四郎
 傾いたわけは社長のボビュリズム
 藤井寺市 鴨谷瑠美子
 久し振らず女と電話して疲れ
 唐津市 坂本 蜂朗
 逆転の夢見る老いのロスタイム
 大阪府 宇都満知子
 源泉かけ流し極楽ごくらく
 池田市 太田 省三
 定年後妻との時差があるがたい
 岡山県 田中 恵
 空気に水にもなれぬ腹の虫
 鳥取県 竹信 照彦
 大地潤す樺林の保水力
 寝屋川市 籠島 恵子
 さざんかと椿が競い合って咲く
 青森県 松山 芳生
 おもてなし上手な猫に敵わない
 奈良県 渡辺 富子
 ほどほどいいと言ってる万歩計
 奈良県 安福 和夫
 気遣いでストレス溜めるアホやった

枚方市 佐藤 武紀
 モナリザの笑みを世界が求めている
 鳥取県 石谷美恵子
 傷口をふさいでくれた聞き上手
 羽曳野市 吉村久仁雄
 資産管理どこにヘソクリ隠そうか
 山口市 青木 隆子
 カレンダーもう二枚目が待っている
 鳥取市 夏目 一粋
 二呼吸おかねば付いて来ぬ頭
 下松市 有海 静枝
 腹みせる犬に芸など仕込めない
 神戸市 近藤 勝正
 空からはミサイル海は木造船
 和歌山市 福井 菜摘
 心根の優しい人でよく笑う
 奈良市 米田 恭昌
 パースデー回転寿司というデイナー
 枚方市 谷 英也
 豆台風吹き荒れまわり無事帰宅
 藤井寺市 津田シルク
 冠婚仏事等に従うことにする
 鳥取市 池澤 大鯨
 久しぶり散歩をすれば眩しすぎ
 寝屋川市 富山ルイ子
 まだ米寿天地ひろがりはてしなく
 豊橋市 藤田 千休
 ばちばちと地獄の門ヘゲートイン

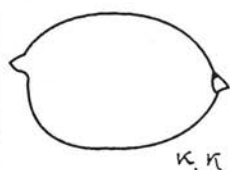
共選欄

檸檬

抄

(薰風書、カットとも)

(投句 358名)



K. K

「もっと」 山口 光久 選

がんばるよあなたの笑顔見たいから
もっともっとと欲の袋は底がない
もっといい明日が見たくて汗流す
身じろぎの奥に隠れているもっと
先生がもっとほめると親に言う
もっともっととヒト科の欲の限りなし
もっとと角取ろうと思うひとり言
カスミ草もっと笑っていいんだよ
もっともっともっとと仲良くしたかった
泥水が澄むまでもっとと汗をかく
五体満足だけでいい それなのに
梅干の粥にもっととの回復期
居て困る居ないのもっとと困るなあ
今日よりは明日へもっともっとと夢
もっともっとと泣いて明日から笑います

宝塚市 田中 章子
鳥取市 倉益 一瑤
鳥取市 岸本 宏章
松江市 石橋 芳山
唐津市 仁部 四郎
和歌山県 森下よりこ
寝屋川市 森 茜
松江市 藤井 寿代
枚方市 小林 わこ
島根県 伊藤 寿美
大阪市 若本 安代
豊橋市 西郷紀美代
奈良県 長谷川崇明
土佐清水市 辻内 次根
和歌山県 土屋起世子

「もっと」 斉 尾 くにこ 選

初詣誓いはもっと笑顔です
末端まで景気良くなれ戌の年
イカロスの翼は持たぬ自制心
不倫よりもっととモリカケ追いかけて
字がもっとと上手けりや書いたラブレター
笑顔良しもっとと若くと髪を染め
愚痴よりも自慢がもっとと聴きにくい
いい話もっとと聴かせて寂聴さん
足を欠く免許返納もっとと先
ああしんどもっとと長生きする時代
居て困る居ないのもっとと困るなあ
鬼の面取ったらもっとと恐かった
詐欺の罪もっとと厳しくなぜしない
結弦君最高点で反省す
アルプスを目指して今日のストレッチ

枚方市 佐藤 武紀
豊中市 木藤こみつ
尾道市 大本 和子
大阪市 江島谷勝弘
熊本県 岩切 康子
大阪府 畑中 節子
広島市 松尾 信彦
広島市 岸本 清
米子市 生田 和之
河内長野市 辻村 ヒロ
奈良県 長谷川崇明
三田市 谷口 修平
池田市 上山 堅坊
山口市 青木 隆子
大阪市 内田志津子

アンテナをもっと増やして時流乗る	箕面市	広島	巴子
詰め放題ももっとと人の欲	高槻市	島田千鶴子	
もっともとのノルマに尻を叩かれる	松山市	栗田 忠士	
堂々とおかわりをして良い実家	大阪市	栃尾 奏子	
もう少し高望みする親心	札幌市	小沢 淳	
もつと気をつけていたらと病んでから	羽曳野市	藤原 大子	
生きていてよかったもつと歩こうか	鳥取市	土橋 螢	
ワクチンをもつともつとと言う命	三原市	笹重 耕三	
愛も金もまだ満ち足りぬ古稀の欲	羽曳野市	吉村久仁雄	
磨き抜く毒の林檎を食べながら	岡山市	永見 心咲	
表面張力げんかを超えている	松山市	柳田かおる	
もつと濃い影になりたい影法師	枚方市	海老池 洋	
体重計もつと痩せろと首を振る	神戸市	細川 花門	
もつともつと甘えたかったのはわたし	横浜市	川島 良子	
もつともつと脱皮しながら生きのびる	香芝市	大内 朝子	
春くればもつときれいになるつもり	大阪市	古今堂蕉子	
もつと早く知っていたらと悔まれる	東大阪市	佐々木満作	
立ち歩きもつともつと手をたたく	雲南市	永見 安子	
字がもつと上手けりや書いたラブレター	熊本県	岩切 康子	
褒め上手もつともつと欲がでる	明石市	梶谷 和郎	
もつと言うべきだったかと帰る道	奈良市	高橋 敬子	
もつと良く見ればよかった妻の顔	宇部市	平田 実男	
佳い話もつと聞きたい両の耳	三田市	上垣キヨミ	

子の才能これでよしともつとも	京都市	都倉 求芽	
病む人にもつと頑張れとは言えぬ	豊中市	藤井 則彦	
晩学の健康学を趣味とする	篠山市	酒井 健二	
米寿来て卒寿白寿と欲が出る	札幌市	三浦 強一	
もつと生きたいそんな欲など捨てている	鳥取県	下田茂登子	
食べられるうちは命を保証され	三田市	久保田千代	
おかわりと言えず持つているグラス	三田市	上田ひとみ	
本物を目指す気力は常に持つ	塩竈市	木田比呂朗	
これ以上明るくしたらみなバレル	河内長野市	原熊知津子	
もつともつと貯めてこの世に置き忘れ	大阪府	高木 道子	
臥す母もつと頼って欲しかった	大阪市	小野 雅美	
もつと良い話がしたい母さんに	名古屋市	富田 末男	
分かれ道もつと幸せだったかも	河内長野市	穂口 正子	
ヘクソカズラもつといい名を夢見てる	男鹿市	伊藤のぶよし	
増便を願ったバスも廃止され	日高市	根岸 方子	
ふるさとは過疎が進んでけもの道	鳥取市	池澤 大鯨	
無医村にもつと人手と支援の輪	京都市	榎本 宏子	
「好きだよ」つてもつと耳もとまで寄って	桜井市	安土 理恵	
もつと知りたいもつとやりたいことだらけ	枚方市	寺川 弘一	
春くればもつときれいになるつもり	大阪市	古今堂蕉子	
天皇退位もつと急いでさしあげて	和歌山市	上田 紀子	
泣きたくてもつと悲しい歌を聴く	大阪市	高杉 力	
尽くされて優しさもつとほしくなる	堺市	遠山 唯教	

もつと右もつと左と福笑い

選り好みしているうちは花でした

あれも食えこれも食べると里帰り

欲望のもつとの先にある奈落

年毎に浮き世の未練強くなる

もつときれいな心になってから逝こう

居るだけで良いの長生きして欲しい

えびせんがなくなるまではとまらない

米寿来て卒寿白寿と欲が出る

人間の五欲もつとを離さない

信心が足らぬと妻にこずかれる

欲望の淵でもつとが溢れ出す

おねだりの澄んだ瞳は真つ直ぐに

言い足りず聞き足りぬまま送る駅

もつともつと人間の欲エンドレス

ふるさとは雪の峠の先の先

逃げるほう逃げる方へと来る煙

今のうちシエルターを売れもつと売れ

真実はもつとドロドロした話

秀句

もつともつとと円周率を追っている

神様がもつと後悔しろと言う

その先を望めば道を踏み外す

西宮市 福島 弘子

和歌山市 古久保和子

米子市 竹村紀の治

奈良県 渡辺 富子

唐津市 坂本 峰明

西予市 黒田 茂代

弘前市 福士 慕情

米子市 後藤 宏之

札幌市 三浦 強一

富田林市 山野 寿之

唐津市 山口 高明

和歌山市 武本 碧

東京都 川本真理子

大阪府 米澤 俣子

鳥取市 山下 凱柳

弘前市 高瀬 霜石

和歌山市 楠見 章子

榎原市 居谷真理子

藤井寺市 太田扶美代

大阪府 平井美智子

佐賀県 真島久美子

尾道市 大本 和子

欲望の淵でもつとが溢れ出す

一回はバレた余罪は山とある

老いてなおもつと夢をと入門書

高音が出るのでおねだりは得意

生きているもつと恋して空を飛ぶ

百歳時代ならばもつとと欲が出る

薫陶がまだ足りません師の計報

もつと言うべきだったかと帰り道

生きていてよかったもつと歩こうか

もつと介護できたと思う三回忌

後悔のないようもつと会いに行く

もつと愚痴言えばよかった亡き人に

手助けがもつとほしいと老介護

えびせんがなくなるまではとまらない

ふるさとは雪の峠の先の先

貴方がいればもつと楽しい終の章

身じろぎの奥に隠れているもつと

言い足りず聞き足りぬまま送る駅

もつともつともつとと叫ぶ胸の穴

秀句

今ならばもつと学べた戦中派

待たされた時間の倍は居ておくれ

五体満足だけでいいそれなのに

和歌山市 武本 碧

鳥取市 福西 茶子

豊中市 水野 黒兎

黒石市 北山まみどり

鳥取市 山野すみれ

高槻市 片岡かずお

鳥取市 中村 金祥

奈良市 高橋 敬子

鳥取市 土橋 螢

堺市 柿花 和夫

東京都 川本真理子

和歌山市 土屋起世子

河内長野市 黒岩 靖博

米子市 後藤 宏之

弘前市 高瀬 霜石

神戸市 能勢 利子

松江市 石橋 芳山

大阪府 米澤 俣子

榎原市 居谷真理子

八尾市 山根 妙子

青森県 松山 芳生

大阪市 若本 安代



川柳塔誌電子化事業

川柳塔社の流れを遡りますと、麻生路郎が大正十三年に発行した「川柳雑誌」に辿り着きます。その創刊号の奥付には、「定価 一部・参拾銭 六部・壹円六拾銭 十二部・参圓」とあり、兵庫県武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四番地、編集発行印刷人・麻生幸二郎。と記されています。

実に94年も前に出された冊子ですので、現物を手に取って読まれた人は稀でしょう。いや、表紙も見ることがないという人が大多数ではないかと思えます。

そのような貴重な冊子を、「家庭に居ながらにして読むことが出来たら素晴らしいだろう」との役員諸兄の想いから、このたび「川柳塔誌電子化事業」を立ち上げました。

これは前述の創刊号から近年に至る総ての冊子を電子化し、川柳塔社ホームページ上に公開するという壮大な計画です。但し、最新号から2年前までのものは手をつけません。発行して2年以上経たものが対象ですが、それでも千冊以上になりますので、完了までには10年ほどかかるのではないかと想定しています。（事業推進はサイト管理人・森山文切）

この遠大且つ壮大な事業のスタートを記念して、「川柳雑誌創刊号」を電子化したものをホームページ上に公開しています。すでにご覧になられた方もおられるでしょうが、冒頭の「奥付」の記事もここから転載したものです。

インターネットに馴染んでおられない方は「私には無関係」と思われるかもしれませんが、お子さんやお孫さんに「川柳

塔のウエブサイトを見せて……」と頼めば、絶好のコミュニケーションのきっかけになるでしょう。子や孫に頼りたくない方は、ご近所の電気屋さんに「ノート型パソコンを一つお願い。ついでに川柳塔のウエブサイトを出して……」と頼めば喜んでやってくれるでしょう。ネット利用料は幾らか掛かりますが、酒やパチンコに比べると安いものです。

さて、その創刊号の六頁には「近作」と題した麻生路郎の作品が10句掲載されています。

ひるひなか蠅とる用があるばかり
疑ふたまゝで一週間は過ぎ

暇な日は三味張替へる氣にもなり

平凡の幸福豚に話しかけ

豚の子へ續く豚の子ばかりなり

時計にまでうつる神経衰弱症

される氣かこの頃鬚に結はぬ也

踊子へ雲でも降りて来そうなり

青いソフト東京の夢巴里の夢

初恋の思ひ出になる夏密柑（密↑原文のまま）

麻生路郎は「とても厳しかった」と聞いていましたが、右の句からはユーモアに富んだ大らかな人のように思えます。もっともこれは創刊号であり、以後の「川柳雑誌」の経営や同人作品などを注視するにつれて厳しくなっていたのかかもしれません。その辺りを研究するのも面白いでしょう。また、懐かしい先輩諸兄の作品や鑑賞文にも再会できます。本事業は地味な仕事ですが、今後の進展にご期待ください。

「手抜き」

木 田 比呂朗 選

(投句 224名)



手抜きした花壇春には答出す
省略と言えば聞こえのいい手抜き
卵かけご飯楽しく手抜きする
マイホーム不具合が出て知る手抜き
事故までは生きを潜めていた手抜き
安物の手抜きミシンの目が荒い
ほどほどに手抜きするのも生きる知恵
手抜きして欲しいと思う酒タバコ
手抜きかもティッシュを三つずつ配り
歳につれ手抜きの多くなる暮らし
少しずつ手抜き増やして老いてゆく
慣れたころ手抜きしたがる人の性
一強の手抜きが平和脅かす
手抜き罰ころも肌もカラカラに
神様も人によつては手抜きする
手抜きなどすれば凍える寒稽古
子育てに手抜きはダメよ子は宝
手抜きした顔です眉毛ばやけてる
手抜きした第二子背まで高くなる
子育ては手抜きだったか私似だ

和歌山市	上田	紀子
豊橋市	藤田	千休
鳥取市	岸本	宏章
豊橋市	小松くみ子	
宝塚市	岸田	万彩
八尾市	宮崎シマ子	
鳥取市	山下	凱柳
鳥取市	夏目	一粹
大阪市	高杉	力
池田市	上山	堅坊
札幌市	三浦	強一
河内長野市	中島	一彌
羽曳野市	徳山みつこ	
高槻市	富田	美義
大阪市	小野	雅美
大阪市	奥村	五月
米子市	伊塚美枝子	
豊中市	松尾美智代	
唐津市	坂本	蜂朗
大阪市	宇都満知子	

手抜きしたお節を褒める義母役者
雪掻きの手抜きした場所すぐバレる
宅配の弁当チンをしてふたり
チンをして盛り付けだけは上手くなる
妻は留守おにぎり二つ置いてある
早々とおせちを予約して湯治
組み立てにネジが一本余つて
逢いにゆく玉子ごはんの定番です
盃は面倒ヒヤのコップ酒
ほめられてレトルトですと言ひそびれ
この時間何とかうまく作り出す
思いやり足りず七年目の浮気

佳 句

産着きて湯浴みをさせる赤ん坊	唐津市	山口	高明
無洗米上手に使う赤い爪	伊丹市	延寿庵	野鶴
あら煮より塩焼きにする早いから	大阪市	江島谷	勝弘
湯豆腐の季節湯豆腐ばかり出す	佐賀県	真島久美子	
直線でいます面倒くさいから	樺原市	居谷真理子	
台風一過護岸工事が檜玉に	弘前市	福士	慕情
何時からか手抜きすること覚えた手	吹田市	木下	敏子
五色でも充分虹は虹である	弘前市	高瀬	霜石
軸			
ごめんねがいつか手抜きの免罪符			

「新 品」

(投句 220名)

川 名 洋 子 選



真つ新たな社員がならぶ春四月
新品を一度洗ってやる産着
野も山も新しい芽にもえる春
新品の輝き見える初日の出
新品のわたしに戻す百八つ
お下がりも知らないままにひとりつ子
新米が届き延ばしたダイエツト
アンニユイな空気を破る新社員
香水をかけたら新しい私
真つ新たな靴でスタートする若さ
粗大ゴミ新品捨ててある平和
新品より聞きわけの良い再生紙
新品をするりと躲す肥満体
表札の字もくつきりと新世帯
新しい靴に噛みつかれた旅行
新品の靴踏んだのはハイヒール
新調のスーツが笑う肩の凝り
新品の庖丁に腕試される
新書から一冊ぬいて弄ぶ
入学式ママのバッグも新品だ

豊橋市 藤田 千休
香芝市 大内 朝子
四條駅市 吉岡 修
男鹿市 伊藤のぶよし
堺市 澤井 敏治
日高市 根岸 方子
奈良県 長谷川 崇明
大阪市 柴本 ばつは
倉吉市 牧野 芳光
和歌山市 北原 昭枝
大阪府 若本 安代
堺市 内藤 憲彦
青森県 松山 芳生
川西市 大坪 一徳
高槻市 片山 かずお
東大阪市 佐々木 満作
横浜市 菊地 政勝
西予市 黒田 茂代
鳥取市 夏目 一粋
米子市 後藤 美恵子

正月の街新品の匂いする
新品のパーカーもする誤字脱字
新品になった私の膝手術
襟糸とれぬおひとり様のまま
何回も見てきたけれど初日の出
はらはらと二葉マークの乗り心地
妻の前新品の良さ語るまい
次男にも新品買ったランドセル
新調の服でのりこむ入社式
何もかも新しくしてひとり立ち
新しい掃除係のルンパです
蔵出しの新酒に午前様にされ
佳 句
白過ぎる雪受け入れた手の窪み
焼きたてのパン炊きたてのご飯さて
新情報掴んだ記者の目がキラリ
新品の庖丁だから研いでいる
明治から版を重ねて『三四郎』
人
新しい畳の匂い眠れずに
地
新品の木魚が妙に軽い音
天
新刊をめくる五感を研ぎ澄まし
軸
明日からは新たな日日の定年日

藤井寺市 太田扶美代
札幌市 三浦 強一
大阪市 古今堂 蕉子
岡山市 永見 心咲
檀原市 居谷真理子
三田市 上垣キヨミ
奈良県 安福 和夫
鳥取市 岸本 宏章
堺市 遠山 唯教
三田市 上田ひとみ
三田市 北野 哲男
塩竈市 木田比呂朗
佐賀県 真島久美子
弘前市 高瀬 霜石
河内長野市 原熊知津子
弘前市 福士 慕情
唐津市 仁部 四郎
和歌山市 上田 紀子
松江市 中筋 弘充
下松市 有海 静枝

初より教室

題ーピンク

居谷 真理子

ピンク、元々は植物の石竹をさす語だったとか。せきちく色は薄い赤紫、もう少し濃くなればなでしこ色。ほかにも桃色や桜色など花の名がつけばイメージしやすいですね。外来語ではダークピンク、サーモンピンク、ベビーピンク等々。

またピンクは色を表わすだけでなく色事にも及ぶ言葉です。性的なことを詠むのは下品になりそうで大変難しい。でも果敢に挑戦して下さった方もおられます。拍手です。

(原は原句 参は参考句)

原 日本映画のピンクさかげんどのへんか 清 司
参 日本映画のピンクの濃さはいかばかり
原 ああピンク昭和の頃は意味深で 不二夫
参 意味深なピンクも活躍した昭和
原 古美術は名士秘蔵の春画です まさる

参 古美術の中に秘蔵の春画あり

原 歳だけと白髪にピンク似合うでしょ 亜希子
白髪という語がありますので「歳だけ」は不要です。

参 背筋シャン白髪にピンク似合うでしょ

原 湯上がりのピンクのほっぺおいしそう 治 子
湯上がりはきっと幼い子ども。一緒に遊んでみました。

参 湯上がりのピンクのほっぺ食べちゃうぞ

原 すすめられ迷ったあげくピンクです(田)廣 子

参 お似合いと言ってもらって買うピンク

原 男の目引き寄せる色ピンクです なつみ

参 男の目逃さないわとピンク色

原 若返りピンクのシャツさり気なく 孚 彦

ピンクを着て若返る句は多数。中六が残念。

参 さり気なくピンクのシャツで若返る

原 和菓子店梅花の色についはろり(富)恵 子

「ついはろり」が分かりませんでした。

参 和菓子屋に薄桃色が並ぶ時季

原 朝焼けのピンクに染まる晴ればれと 一 平

参 朝焼けに染まって今日が晴れていく

原 モノトーンの中でピンク自惚れる みちを

面白い着想です。全体で十七音にはなりま

すが、リズムがきこえない。

参 モノトーンの中でピンクが自惚れる

原 やわらかさやさしさ見せる桃の色 くみ子

参 やわらかさやさしさそれは桃の色

原 古本がピンクの表紙衣替え (宮)すみれ

参 古本にピンクのカバーかけて春

原 バンタの子ピンクになるまで親が舐め 和 之

参 舐められてピンクになったバンタの子

原 パッションピンク首に巻くにも勇気要る 隆 子

パッションピンク情熱のピンク。どんな色か想像するのも楽しいですね。

参 パッションピンク首に巻いたり外したり

原 ピンク色漂う春へ飛んでみる (小)雅 美

若い雅美さん、たまには羽目はずして

参 ピンクピンクピンクの春へ飛び出そう

原 ピンクなら言葉だけでも胸さわぐ 一 雄

参 ピンクという言葉だけでも胸さわぐ

原 カッターもピンクとシヤレて男伊達 ひでお

任侠の世界を思わせる「男伊達」。この句

の場合はむしろ

参 シャツもまたピンクとしやれて伊達男

原 暖冬か一荒れ毎に色あせる 勝 治

寄せられた三句とも題から離れすぎました

参 暖冬にサザンカの赤いろあせる

原 咲く春にピンク温くめているつばみ こずえ

参 春を待つピンク温めているつばみ

原 お年頃ピンクの花は華になり (高)道子

言いたいことはよく分かりますが、言葉遊びのようになりました。

参 お年頃ピンクの花は大輪に

原 桜餅好きなお方と一緒にネ 風露

参 大好きな人と食べましょ桜餅

原 女子力をあげるピンクの紅をさす 美枝子

参 女子力を上げるルージュはピンク色

原 男の子ピンクを好み先案ず 紀美代

自由で楽しい男の子です。

参 男の子だけピンクがだあい好き

原 内臓は変わらず今もピンク色 美穂

参 内臓は今も自信のピンク色

原 洋服もおうちもピンク女子のママ (高)弥生

参 洋服もお部屋もピンク女の子

原 ピンク色のジャケット颯爽ディケアに 整

参 ディケアに行こうピンクのジャケットで

原 薄紅色サザンカのはか青い日を 武紀

「青い日」がよくわかりません。青春の

こと？空の青さ？

参 青春のあの日薄紅色の花

原 ピンクレディあの頃私も輝いた 勝正

参 ピンクレディあの頃僕も輝いた

原 喪中ハガキ抜けてた賀状超ピンク (東)美智子

参 喪の家に派手なピンクの年賀状

原 敬老日ピンクの孫と付き合つて 洋一

原 婦省してピンクのリボン揺れている 洋一

二句を一句にしてみました。

参 敬老日ピンクのリボンつけた子と

原 猪口一杯つき合う君はさくら色 一彌

参 一杯の猪口であなたはさくら色

原 婆シャツよりピンクのシャツで若々える (見)温子

参 ババシャツを脱いでピンクのシャツにする

原 散歩道梅一輪にホッとする (畑)節子

「ホッとする」まで言うと言い過ぎです。

梅の色を印象づけたい。

参 散歩道今日は 一輪紅い梅

原 ドキドキピンク着こなす高齢者 (門)幸子

参 ピンク着るドキドキだけど歳だけど

原 孫娘成人式ピンクの振袖しやかに (山)久子

言葉をつめこみすぎました。「孫娘」を最

後にもつてきて焦点をしぼりましょう。

参 振袖もピンクはたちの孫娘

原 乳ガンの早期奨励ピンクの輪 厚子

乳ガンの早期発見や治療への啓発活動を

進めるピンクリボン運動ですね。「早期奨励」

は無理のある言葉です。

参 乳ガンと闘いましょうピンクの輪

【佳句】

彼想う気持ち染める類の色 のぞみ

まだまだの意気でピンクの勝負服 俊雄

古稀の坂紅をピンクに替え登る 澄空

とほとほとピンクを繼い歩む大 真

ミルクにいちごぶして私のピンク こみつ

心までピンクにしようスクワット (大)安子

新生児泣いた笑ったピンクの輪 (齊)宏子

あの人に会えば今でもピンク色 雄大

会いに行く淡いピンクのカーディガン 昭枝

巣立ち行く園児ピンクの翼付け 里子

【今月の推せん句】

春が来た爪もピンクに染めてみる 貝塚正子

桃色の吐息に換える今日の紅 磯島福貴子

春よ来いピンクの絵の具溶いて待つ 原徳利

川柳塔鑑賞

同人吟 前 たもつ

— 2月号から

礼儀知らずが二階から降りて来る

松本 文子

誰が降りて来るのか、どんな礼儀か言わぬが、内容を想像させていい句です。

いつまでも寝ている息子を起こしたが挨拶もせず降りてきたのでしょうか。

長生きは健康診断受けません

松本 昌

長寿の人は健康診断は受けないと、昌さんが見ているのですね。ご本人もそういう主義でしょうか。私は「後期高齢者医療健康診査」とやら三年ほどパス。

ていねいに生きて残高ゼロになる

寺井 弘子

終章に徳を積むとか、誉めてもらうのでなく、残高ゼロの生き方に大喝采。

日本には百貨店の味方ある

須郷 井蛙

ふるさとはいつも味方につけてある

岩崎 玲子

百貨店はお金の味方。百円で大概の物が揃います。古里は心の味方でしょう。正月句会で、「梅」の題でまともに古里を味方につけました。

「南高梅郷土生まれに持つ誇り」

卒寿万才これから先はミステリー

津村 志華子

志華子さんは川柳塔の句会を中心に三十数年、真剣に川柳に打ち込んでこられました。今月号の巻頭の一句です。句は堂々と前向きです。上五でわが卒寿を万歳し、下五でミステリーと新鮮な措辞で締めくくったあたり憎らしい。

桜紅葉温く迎える菜句碑

川崎 ひかり

西尾葉先生の「温泉や坐り羅漢に寝る羅漢」の句碑が平成五年に、東かがわ市の白鳥黒川温泉に建立されました。この句から地元の柳人たちに大事にされている様子が伝わってきます。

十四歳僕も将棋を指していた

岸本 宏章

藤井四段が根底に居るのです。僕も将棋をしていました。戦後のあの頃は遊びと言えば、将棋か野球くらいでした。

庭に來た蜻蛉一匹だけだった

辻内 次根

年末に故郷の土佐清水市に引越されたと聞く。「独り鍋今夜は酒で温もう」と続く。孤独感が伝わってきます。

汗かけど大臣賞の句が詠めぬ

坂本 とも湖

ご同感。紛れもあらうと日川協、NHKなど投句をすれど。私も汗をかいとお蔭で皆勤賞三個いただきました。

生駒山朝日届ける使者の様

田浦 實

下五の使者の様に使者の風格。「生駒山一期一会の初日の出」もよい。

説明がつかなくなつてつい笑う

成田 雨奇

説明がつかなくなつてつい笑う雨奇さんを思い浮べ、私もつい笑いました。説明が付かなくなると記憶なくす人に聞かせてやりたい。

たまに尋ねる私は一体誰ですか

藤村 亜成

私は一体何者なのか。どこから来てどこへ行くのか。亜成さんは今ごろは確かな自分に辿りついていていると思います。

立ち居振舞ちゃんどと見ているひ孫

山中 康子

大人の立ち居振舞をちゃんと見ているひ孫さんが凄い。そのひ孫さんの様子に氣付いておられる康子さんも凄い。本当は子どもの目がするどいのです。

川柳ファーストこれで老後を通したい

海老池 洋

もうあかん言つて米寿を一跨ぎ

丹後屋 肇

片や米寿。片や卒寿の心意気を見る新年の句です。益々のご健吟を。

頑張れと言わずに強くハグをする

吉村 久仁雄

いいことを教えてもらいました。これからは孫を強くハグしてやろう。

マッハ3で過ぎてく冬の時刻表

藤井 寿代

冬の時刻表はマッハ3ですか。地球は毎日マッハ1以上で自転しています。

祖父の背でおもらし成る女王さま

山口 高明

わが孫のおもらしをかくも滑稽に表現されると読む方も「うふふ」と笑っています。大切な女王さまによろしく。

あの手この手でやつて来る老後

谷口 義

老後の来る様をあの手この手と言いつて妙。ユーモア句に感激。

ときめいたまんま化石になりたいな

中井 アキ

感情を冷凍保存すると言つて発想は多いが、化石にまで進化させたのは初めて。実は化石にならずとも、魂がときめいたまま生きること出来るのです。

若者にすまない病院のはしご

北村 賢子

医療費は年間十兆とか聞く。一千兆の借金が年々増えていく。病院のはしごは若者の負担を重くしていく。賢子さんのやさしさが見えます。

天抜けるように明るく笑おうよ

宮尾 みのり

いろいろな笑いの句から「天抜けるような明るい笑い」をいただきました。

補聴器は優しい声がお好きです

高橋 洋子

私の補聴器も大きな声や金属音は嫌いです。優しい会話は大好きです。披露の声もよく聞こえます。

新しいただそれだけでいい句い

小谷 小雪

川柳塔の新年号と言っただけで、どこか違う匂いをかいで読みました。中七の「ただそれだけで」はこの句の旨さ。

夢は宝てなこと言つて酔つてゐる

吉岡 修

軽みの代表句。軽やかでうまみがあり、薫風先生の句を思い出します。「お年玉きったくたくちゃん待ってたホイ」

綱の命位品価格泣いている

山下 凱柳

横綱の品格を詠んだ句が他にも数句ありました。私も正月場所の初日、目を凝らして横綱の取組を見ました。

逆上りやはり出来ない俺の孫

辻内 げんえい

私も逆上りを孫に教えたがやはりだめでした。最近テレビで「キュー・ピタ・クルー」のリズムでうまく教えていました。

水煙抄鑑賞

— 2月号から

太田 扶美代

片目睨れば許せることが多くなる

吉道 あかね

わかりました。簡単そうで、難しいですけれどもね、頑張ってみます。

ポケットの中に詰め込みすぎた秋

廣瀬 良磨

予定や、計画を少し欲張りすぎたと言う、意味なのでしょう。表現が面白い。

外気温ばかり気にしている独り

砂糖無しホットミルクのような母

真島 久美子

さとう無しホットミルクのような人って素的ですね。それが女性なら特に、ましてや母なら。しみじみと実感が滲み出ていて、羨ましくなりました。

すこし黙って考える時間を下さい

川島 良子

この一言、言いたい時ありますよね。

押し花が当時のわたし知っている

大前 安子

自分が昔に挟んだ事のある押し花見つけ、暫し思い出に浸るなんて事は女性なら誰しもきつとある筈、いいひととき。

もう一つ新元号に逢えそうなの

生田 和之

句を詠んで気がつきました。ハツとして考えたら私の事でした。良い方にとつて前向きで行きたいと思います。

亡母の年越えて形見の服を着る

川本 美津子

私も義母の着物や母の着物を、少し手を加えたりし、着ていた頃があり、夫の家族からも喜ばれたのを今でも覚えていてます。

貨車通過数える癖はまだ続く

高森 一存

何故か私も貨車を見るのは好きです。郷愁らしきものを今でも感じます。

通りすがりの街に情けをかけられる

小野 雅美

親切にされたとか、いい事があったとか、多分ちよつとした嬉しさを句にされたと思うのですが、表現の仕方に魅力を感じました。

感じました。

ヒト科なのに3足歩行しています

神野 千恵子

暗くなりがちな題材をユーモアに変え川柳に仕上げたところに引かれました。土に抱かれ大根はまだ眠い

森 廣子

農業の経験ゼロではないつもりで居たのですが、こんなあたたかい気で土に、接してやれたかなと。

顔見せるただそれだけで充分だ

羽田野 洋介

子供が一月に一度帰れば、次は一週間一度、次は三日に一度、最後は毎日となる。偶にが、一番と思いませんか。

一時金がわりにくれた蟹2杯

清水 久美子

あつさり書いてはるが句の奥に、小さなドラマがありそうで面白い。

満月の視線線になる露天風呂

定松 宏枝

露天風呂は思い切り手足のばし寛ぐところらしいけど、やっぱり落ちつきませんよね。同感の人が居てくれたのが、ちよつと意外で嬉しいです。



川柳塔WEB句会

兼題「静 か」 *平抜きと佳作は到着順

1月例会入選句

投句数327句(166名)

くんじろう

居谷真理子 共選

くんじろう 選

喪の家は犬も静かにうずくまる
来し方を編む動の糸静の糸
長閑に五歩七歩五歩と一行詩
次の方どうぞ静かな注射針
愛されて静かに腐敗する夕日
真夜中の秒針生れ出る奇跡
静かなる目玉焼井船晦す
鳩はもう帽子の中で臥している
ハンカチで包んだ咳を持ち帰る
蟬の声聞こえてきます結跏趺坐
雪虫の無欲とどめを刺しにくる
ぐあんぐあんとして地球自転する
黙考を迫るジョン・ケージの無音
じっくりと見ている花の呼吸まで
友の通夜もっと騒ごうではないか
センターに置かぬと薔薇は香らない
音の無い世界に入る極です
路地カメラ夜ごと静かな狩りをする
顔ぶれを見れば静かな筈がない
月光の差し込む居間の午前二時
給食の一瞬静か一口目
警策の音だけ響く座禅堂
広辞苑二十五万語包み込む
雪しんしんウサギの足跡が咽う
栓抜きを仕舞い宴は閉じられる
反り返るバナナ静かに破る春
静かさに片想いする非常ベル
一合と大根炊いてただ静か
満月に開く静かな毒キノコ
海風いでテトラポットは無表情
一月の国旗零時の火の静か
牡丹の咲くときも牡丹の散るときも
佳 ふるさとの橋は静かに拒絶する
佳 座禅組む心療内科二号楼
佳 コインロッカー開く 静かの海に出る
佳 ばふっ程の音もださずにビックバン
佳 その口にエポキシ樹脂を塗りなはれ
人 しずかちゃん、亡命先のパリで死す
地 最後の人類まであと十二人
天 しゅんかんの交尾スクランブル交差点

よもやま話
藤澤 霧堂
藤澤 霧堂
板垣 孝志
まさ と
勢藤 潤
いなだ豆乃助
平井美智子
平井美智子
山田こいし
岩根 彰子
平尾 定昭
加藤 当白
辻内 次根
雨森 茂喜
美馬りゅうこ
寺川 弘一
斉尾くにこ
木嶋 盛隆
浮世っ子
浮世っ子
西山 竹里
森山 盛桜
まろ ん
柴田比呂志
福村まこと
福村まこと
徳重美恵子
青砥 和子
若 芽
斎藤 秀雄
丹下 凱夫
かきくけ子
板垣 孝志
月波 与生
アズズン安須
田口 和代
いなだ豆乃助
森山 文切
月波 与生

居谷真理子 選

喪の家は犬も静かにうずくまる
温暖化海が静かに肥えてゆく
食卓から静かに愛が消えてゆく
この静けさはきっと誰かの企みだ
静けさを活断層の背で愛でる
次の方どうぞ静かな注射針
サヨナラと書いて静かにペンをおく
喧騒が消えた君を見た瞬間
お育ちがほのかに香るもの静か
お喋りな人を減らしていくスマホ
しゅんかんの交尾スクランブル交差点
世の中のお役に立てずただ化石
張本人だけがしている静かな目
ふくろうになれば聞こえる超音波
眠る墓探検隊がこじ開ける
裸木になって静かな息になる
腕の中餅は静かに正座して
友の通夜もっと騒ごうではないか
路地カメラ夜ごと静かな狩りをする
静かです大群衆はみなスマホ
月光の差し込む居間の午前二時
広辞苑二十五万語包み込む
夜の更ける音が聞こえてくる独り
こんなにも静かひとりが欠けた家
おしゃべりなふたりが手話でする会話
夕暮れのたった一人の美術館
許そうか静かに雪が降るように
米と北静かに黒い砂時計
日中は静かな仏間なんですが
静かには飲んでおれない寂しがり
牡丹の咲くときも牡丹の散るときも
水もらう列の静粛日本人
佳 最後の人類まであと十二人
佳 じっくりと見ている花の呼吸まで
佳 静かさは卑怯とみなす声上げよ
佳 落ち着いた人だ賛否に手を上げず
佳 本物の流儀静かに燃えている
人 犬死んで寂しいわねと嘘を言う
地 しんとしたただしんとした寒い
天 ふるさとの橋は静かに拒絶する

よもやま話
莊子 隆
め ぐ
め ぐ
前川 真
板垣 孝志
山本 進
大島ともこ
武本 碧
北田のりこ
月波 与生
宝花 義一
川本真理子
桔 梗 庵
坂本 加代
米山明日歌
里山 水月
雨森 茂喜
斉尾くにこ
福 多 郎
浮世っ子
森山 盛桜
あかり
澁谷さくら
森 廣子
伊藤 良一
関口 行雲
田口 和代
橋倉久美子
丹下 凱夫
怜
森山 文切
辻内 次根
右田 俊郎
両澤行兵衛
柳田かおる
たごまる子
田村ひろ子
かきくけ子

投句方法 【川柳塔】を検索→【川柳塔 WEB 句会】をクリック

senryutou.net/html/index02.html

(サイト管理 森山文切)



(投句206名)

私事で恐縮ですが、『魚座』という句会を立ち上げました。

参加者の半数以上は句会など初めてという

人たちがでしたが、選者を快く引き受けて下さった木本朱夏さんを迎えて、緊張の中にも和やかで温かみのある第一回句会を終えることが出来ました。

また、皆様方にも何かとお世話になることと存じますが、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。では、ナビです。

佐賀県 真島久美子

大袈裟な男三十六度五分
(評) こんな男、私のごく近くにもいます。女の方が熱には強いらしいですが、それにしても三十六度五分くらいでねえ。

土佐清水市 辻内 次根
人間にいずれこうなる冬の月

(評) いずれこうなる、それは誰も避け

られません。それは明日か明後日かも、だからこそ今という時を楽しみたいもの。

ユーモアのサプリメントがまだ効かぬ
神戸市 富永 恭子

(評) こんなサプリメントがあれば欲しいです。飲めば和やかな雰囲気包まれるなんて、ステキ。

退職後自前の酒はよく回る
河内長野市 梶原 弘光

(評) 自分で身銭を切って飲む酒はホント、不思議なくらい酔いが早いのです。あの頃が懐かしい、そんな人も多いのでは。

一枚の舌しか持たぬ不自由さ
和歌山市 上田 紀子

(評) 思わず笑ってしまいました。舌は一枚しかなくて当たり前、でもそれが不自由で仕方無いとはツライことです。

あこがれの人も普通に老いていた
寝屋川市 森 茜

(評) 年月とは残酷な(?)もの。ちよつとがっかりする反面、何となく安心も出来たような、でしょうか。

フライドを捨てると心太になる
鳥取市 夏目 一粋

(評) トコロテンをどう解釈しましょうか。クニヤツとなつてしまうのか、人知れず芯はしつかり保っているのかとも。

年輪は会話の中に顔がある
姫路市 古川 奮水

(評) 年齢を重ねると、会話ひとつにし

てもその人となりを感じられるという。時を経てきた自信が見事です。

AIも遊び心を持っていた
河内長野市 山岡富美子

(評) いろんな分野での活躍に驚かされるAIも人並みに遊び心があるなんて、微笑ましくもあり怖くもあります。

百才になれば告白してみよう
藤井寺市 若松 雅枝

(評) 人生も百才の時代、それを目標にして様々なことを考えるのも悪くない。告白って、もちろん愛ですよ。

殿様は鯛の頬肉だけ食べる
東大阪市 北村 賢子

分福茶釜次は金庫に化けてくれ
枚方市 海老池 洋

頭でつかちクラスにこんな人がいた
豊中市 松尾美智代

シンキングタイム奇襲か降参か
米子市 八木 千代

知らんぷりでできないせいで損をする
弘前市 高瀬 霜石

氏育ち見抜かれました箸遣い
三田市 堀 正和

相談役誰も相談してくれぬ
大阪市 小野 雅美

立ちん坊の辛さキミなら分かるだろ
高槻市 初代 正彦

陣笠は日掛け貯金の証拠品
唐津市 仁部 四郎

海南市 堂上 泰女
リハビリはイケメン精を出さなくちゃ

鳥取市 福西 茶子
下に下に鬼太郎さまのお通りだ

羽曳野市 中川ひろ介
言い訳をしてもせんでも怒る妻

奈良市 長谷川崇明
国のためタバコは吸うし酒も飲む

明石市 穂谷 和郎
孤独とは箸一膳で済む暮らし

羽曳野市 徳山みつこ
春うらら宇宙駅から見のお江戸

大洲市 花岡 順子
マスコットキャラ警察の顔らしい

沖縄県 森山 文切
カメレオンよりは短い舌ですが

和歌山市 土屋起世子
独りゆく居酒屋俺のバラダイス

防府市 坂本 加代
コーヒーに砂糖を入れる疲れた日

八尾市 村上ミツ子
知らぬ間に伸びてしまっていた犬歯

橋本市 石田 隆彦
今君が喋ると話纏れ出す

倉吉市 山中 康子
女には任せぬとときの役目

富田林市 片岡智恵子
風紋の真ん中に居て曲げぬ意志

札幌市 三浦 強一
合戦の兵糧攻めが恐ろしい

大阪市 若本 安代
ナイスミドル言われて帽子脱げません

枚方市 小林 わこ
どの孫もきつと泣き出すこのオモチャ

和歌山市 古久保和子
満腹になってなんでも許せそう

枚方市 寺川 弘一
ロボットと前頭葉で話してる

岡山市 永見 心咲
転んでも八回起きるマグカップ

弘前市 浅田 隆樹
寒村の蕎麦を飽食よく愛でる

大阪市 古今堂蕉子
先祖は家康今は弁当屋でござる

松山市 栗田 忠士
梯子酒締めはやっぱりラーメンで

香芝市 大内 朝子
気楽げに見えても辛い官仕え

黒石市 北山まみどり
模範生お湯が沸くまで起立する

鳥取市 山野すみれ
白と黒グレー辺りで深呼吸

堺市 坂上 淳司
サンドイッチの僕は中間管理職

大阪市 平井美智子
嘘すこし混ぜて安心してもらう

松江市 石橋 芳山
捨てられぬ男が溜めていた未練

神戸市 奥澤洋次郎
柿でモスバーガーの席にいる

豊中市 水野 黒兎
義理を欠く口実として熱がある

玉野市 片岡 富子
突っ張ってみても童顔邪魔をする

大阪市 江島谷勝弘
まるで雲をつかむようなお方です

西宮市 緒方美津子
何事もなくてよかった夜勤明け

三原市 笹重 耕三
わたくしの思考回路がショートする

西宮市 亀岡 哲子
ガラクタの中へお宝忍はせる

堺市 澤井 敏治
うーん残念ことしもジャンボあかなんだ

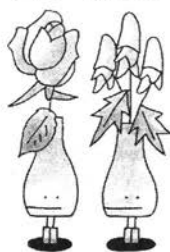
三田市 北野 哲男
ちよん髷はもうご無用にござります

笠岡市 藤井 智史
待っている時間が長いカップ麺

尼崎市 永田 紀恵
メイドインジャパンの誇り見失う

香芝市 山下 純子
西郷どんといっしょに過ごす日曜日

5月号発表 (3月15日締切)



(平本 勝彦 画)

柳箒に2句



追悼

藤井正雄さんを悼む

西出 楓 楽

退屈を持て余してる庭掃除

正雄さんの柳歴は、昭和十六年旧・田辺製菓の社内厚生会川柳部へ参加された時に始まります。その後本格的に取り組まれたのは、昭和六十二年橘高薫風先生が講師のNHK文化センター川柳教室入門からで、実に足掛け七十六年間の長い付き合いです。

「川柳に生かされています」と常々口にされ、大病と腰痛を手懐け、川柳への情熱を燃やし続けられた年月でした。

私生活では川柳に理解のある奥様、二人のお子様、四人のお孫さん、四人の曾孫さんに恵まれておいででした。

つい先頃まで、リュックを背に杖をついて川柳塔本社句会や傘下の句会に参加され、その好々爺の佇まいは句会の雰囲気温かくして下さっていました。もうお会い出来ないと思うと、寂しさに胸が締め付けられ痛くなります。

また正雄さんは知る人ぞ知る、熱狂的な阪神ファンで、十二月十七日の葬儀では「六甲風」に送られ旅立たれました。

大正十一年十一月四日生まれ

満九十五歳没

朝日新聞の「なにわ柳壇」は、一年間の入選句の中から年末に「今年の十秀」を選んでいます。そのための十句と選評を十二月十三日に渡し、ほっと一息ついていた矢先の十五日に、ご家族から正雄さんが亡くなられたとの電話が入りました。

実は「今年の十秀」の九句目に
マンガ読む机でないと母の喝

(正雄)

を選んでいたのです。あと二日長生きしておられたら、どんなに喜んで下さったでしょう。

正雄さんは昭和六十三年三月の
解けぬ顔いと簡単に解いた顔

を初入選に「なにわ柳壇」へ二十九年に亘る挑戦を続けておられます。そして、入選句が百句になると、その都度句集「私

の百句」を出版してこられました。順調に版を重ね「パートⅣ」を平成二十五年に出され「パートⅤ」まであと九句の入選を残すのみとなっていました。十秀とともに残念で、切羽扼腕の思いです。

正雄さんは「なにわ柳壇」のみに力を入れておられた訳ではありません。『番傘』誌上へも誌友として、ずっと自由吟を投句しておられました。平成二十七年五月号では、二七五人中のトップである巻頭を獲得され、写真入りで紹介されています。

本拠地である「川柳塔」へは、昨年十二月号が最後の発表になりました。

友の計に逆回りする記憶あり
障子破り猫の上いく孫元氣

左遷地の出迎えもなく降る氷雨

ご自慢の順は盆梅孫に嫁



追悼

両川洋々さんを偲んで

夏目一粹

洋々先生は昨年九月頃より体調を崩され句会などでも大変辛そうなご様子でしたが、十一月二十八日突然入院をされました。検査と治療に専念し手は尽くされたようですが、急に容体は悪化。十二月九日入院後わずか十日余りで帰らぬ人となりました。享年七十四歳という若さでした。

実は第36回没句川柳供養大会を12月17日を間近に控え、何としても成功を見届けたと言ふその執念は凄まじいものであったと聞き及んでいます。

それにしてもなんとという運命の悪戯でしょう。まさか追悼の大会になるとは。悔やまれてなりません。特にこの大会はご自身が異常なまでの愛情と情念を注ぎ、エンドレスな没句を哀れんで供養するという優しさと思いやりが遺る瀬無く愛おしく思ひ出されます。今や全国的にもレゼエンドとなりつつあります。

洋々さんあなたはお酒もタバコも好きでしたネ。よく怒鳴りよく喋りましたネ。特に市政では持ち前の鬼才を生かして、ペタラン川柳作家らしく「チクリ刺し」「ズバリ斬り」活躍されましたネ。

長い間ほんとうにご苦労さまでした。遺された同人一同のこれからは先生の遺志を誠実に継ぐことが何よりの恩返しだと決意するとともに、これまでのご指導と厳しかった愛の鞭を思い出し精進することを、ここに誓います。

あらがとうございました。さようなら。

「略歴」

鳥取東高校卒業後国鉄（JR）入社・国鉄川柳会旗揚げ・全国国鉄川柳大会鳥取開催・平成2年鳥取市議当選6期連続当選勇退・川柳塔本社理事・ふうもん吟社会長・読売ととり柳壇選者・川柳作家連盟副会長・桜スポーツ団長

「遺句抄」

合掌の指十本に嘘はない
自叙伝の続きは棺の中で書く
望郷の一句読めないままに果て
余命一年意外と癌は怖くない
おサルより賢い議員などいない
お姫様抱っこやせたらしてあげる
君を抱くために両手は空けておく
過労死よ非正規だって人間だ
化石かもしれぬ九条守り抜く
同情論あつて先手が打ちづらい

「追悼句」

極楽へきつと洋々舵を切り
洋々と張りの呼名はもう聞けぬ
だめなどこ夢に出てくる叱つてよ
俺の成長見守ってくれなあ師匠
あの世でもきつと詠んでる天地人
名調子の呼名は千の風に乗り
あの世から聞こえてきます愛の喝
夕月夜孤独なわたし見捨てるか
ありがとうまだ先生に言えてない
数々の思い出残し師は逝つた
通せんぼしたのに三途なぞ渡る
川柳のノート抱きしめ恩師逝く
世の中に洋々こころ何時までも
天国で得意の呼名飼する
もつと指導を受けたかたに悔しいよ

金 茶 清 凱 一 楓 とも 天 天 八 三 大 由美子
人 信 柳 春 花 湖 翔 千 津 穀 子

本社二月句会

◇二月七日(水)午後一時
アウイーナ大阪

極寒の七日、二月句会は百三十二名(内投句者八名)の参加で開催され、過日亡くられた同人、坊農柳弘さん(大和郡山市)への黙祷で始まった。初出席は井上洋三さん(奈良市)、山田恭正さん(奈良市)。

今月のお話は中原比呂志さん。題は「チンチン電車と川柳」。大阪市交通局川柳部による柳誌「市電川柳」(昭和十六年)を基点とする「川柳大阪」九百号(平成三十年一月)を機に、市内を走っていたチンチン電車の興味深い様子を交え当時詠まれた川柳を紹介された。その中から、

さらばと一升米も買えまいか 路郎
電柱は都へつづく懐かしさ 水府
失業に寝つかれもせぬ風が吹き 緑雨
乗り換えてまたうまいこと席が取れ 春果

(正彦)

月間賞は木本朱夏さん(和歌山市)

(司会)真理子・志津子(脇取)隆彦・奏子

(受付)志津子・靖鬼(懸垂幕墨書・耕治)

(清記)憲彦・勝弘

席題「すべる」

村上 直樹 選

案の定今日もすべった没だった
大寒波ペンギン歩きする都会
四十五歳K点越えよ金メダル
沙羅ちゃんのジャンプに期待金メダル
すべり切りコーチの胸に癒やされる
水上の花になりましたかつたわたし
すべり出しはいつも見事なタイガース
受験期にすべるやなんて酷い題
東大を「落ちましてん」という自慢
大学入試ミスのお陰で滑り込む
地滑りのような株価も縁はない
よくすべる口だ撤回ばかりして
不祥事の責任とるも横すべり
横すべり退職金を何度取る
鉛配りおばちゃん統べる幹事さん
老い半ば口も滑るがよく転ぶ
アイラブユー口がすべったとも言えず
実を言うう夫は滑り止めでした
直滑降ばかりで生きたる律儀者
すべり落ち抜け落ち喜寿の記憶力
滑るよりさき蹴蹴く老いの足
みぞれ道阿闍梨滑った草鞋跡
情報のお海ですべて行くモラル
まよい迷って貴男の胸にすべり込む
朝帰りすべりの悪い戸を恨み

細川 花門
前田 紀雄
堀 正和
木嶋 盛隆
松原 寿子
安土 理恵
藤井 則彦
坂上 淳司
木藤こみつ
初代 正彦
吉岡 修
山本 進
長高 俊雄
伊達 郁夫
松岡 篤
今井万紗子
吉岡 修
大久保眞澄
中原比呂志
山本希久子
澤井 敏治
中川ひろ介
柿花 和夫
柴本ばつは
萩原 狸月

読めぬ字へ筆のすべりを誉めておく
こればかりはどうにもならぬ空模様
おやじギャグ孫もベツトも笑わない
社の秘密酒が滑らす縄のれん
すべる囁むさあます言葉身につかず
内緒ごと口のテープを酒が剥ぐ
用意したギャグがすべって座が白け
美女の前言わずもがなの誉め言葉
つい口が滑って妻へ奢る破目
サクラ散る前を向いてる塾靴
じいちゃんの頭上すべったうぶなハエ
秘密だと言うから口を滑らせる
芸人を再生させたすべり芸

前 たもつ
山本希久子
柿花 和夫
山野 寿之
西出 楓楽
石田 隆彦
村上 玄也
肥山 一文
鈴木いさお
緒方美津子
石田 隆彦
田中ゆみ子
小野 雅美
吉村久仁雄
小野 雅美
山野 寿之
米田 恭昌
渡辺 富子
山田 耕治
平井美智子
栃尾 奏子

目指すは世界東大早稲田すべり止め

兼題「勢い」

山崎

武彦 選

元旦にダツシユと書いた古日記
聡太くんどこまで続く勝ちっぷり
水漏れの勢い増してきた老後
りんとした勢い梅の蕾です
三千年我慢のマグマ天を突く
結婚は勢いなよ三度目よ
勢いであげた拳が宙に浮く
勢いで言ってしまった自己嫌悪
勢いで君と渡った丸木橋
合格だ一直線に春が来た
百点だ勢い込んで子が帰る
茶柱に勢いもらい朝が出る
勢いの失せても味ないぶし銀
威勢よくカード払いにして悔いる
勢いのある字を書いている米寿
執念を見せるか今年のタイガース
おごらない秘めた勢い聡太君
キャンプリン勢いだけはみんな首位
氷点下母の勢い見に帰る
二段飛ばしあんな眩しい日もあった
威勢のいい政治家たちの平和ボケ
あの時の勢いどこへ稀勢の里
一合の酒でよっしやと嫁にする
おしくまんじゅうなんてやつた路地消える

北野 哲男
川端 一步
海老池 洋
立蔵 信子
関 よしみ
藤井 宏造
山口 光久
長浜 美籠
石田ひろ子
渡辺 富子
大坪 一徳
西出 楓楽
初代 正彦
平松かすみ
鴨谷瑠美子
前田 紀雄
宇都満知子
前 たもつ
山田 耕治
大久保眞澄
平賀 国和
鈴木いさお
伊達 郁夫
小山 紀乃

勢いで買ったフリルを悔いている
勢いをつけても飛べぬ水溜り
勢いをつければ飛べた水たまり
勢いに鼻先までもとがり出し
一強と言われるほどでもない政府
伸び盛りの輩つんと天を指す
勢いにあつさり乗ったのが誤算
前途洋々勢いに乗るローティーン
春へ春へと勢いついてくる花粉
冬木立力蓄え春を待つ
勢いが無くていいです達者なら
陸自へり降下勢いづく炎
勢いをつけて虫歯を抜きにいく

太田扶美代
山野 寿之
藤井 宏造
山本 昌代
荒川 純甲
木本 朱夏
山岡富美子
澤井 敏治
山本希久子
平賀 国和
榎本日の出
津守 柳伸
木藤こみつ

佳

スマホからの風勢いが止まらない
春先は鼻息荒いタイガース
勢いの余ったベンがよくしゃべる
裸の木根の勢いを信じ待つ
勢いで仮想通過を買った罰
人
絵手紙の枠をはみでた蟹の足
勢いはボトル一本空けてから
天
胎動の勢いきつと大物だ
軸
ぐい呑みがコップにかわるはしこ酒

山本希久子
細川 花門
山本 進
緒方美津子
吉村久仁雄
中島 一彌
村田 博
西出 楓楽

兼題「のどか」

大久保眞澄 選

日溜りで猫のひげなど抜いてみる
昼済ませしばし軒の古い二人
一つ二つと忘れのどかな顔になる
助っ人はベンチでガムを噛んでいる
雪積もるほどに熱燗うまくなる
うららかに定員割れの試験場
何もせず飯だけ食った休刊日
菜の花の海で眠っていいですか
七坂を越えた夫婦の日向ぼこ
欠伸する金魚と春の話など
イカ焼きのにおいが襲う梅見ごろ
お経ものどか百歳のお葬式
農閑期納屋の案山子があくびする
忙中の長閑にこころ遊ばせる
せんべいのお釣り待ってる奈良の鹿
ゴキブリが出ない長閑な台所
競うこと止めてのどかなる余生
のどか過ぎ少し人間忘れそう
緩やかな波に委ねる真珠貝
東大でなかったけれどどかな子
新聞を読んで爪切り耳掃除
牧神の午後に浸っているうふふ
本読む人指折る人の昼さがり
ロバのバン屋来ていたころの土の道
投句前はケキヨ入選後ホーホケキヨ

福田 好文
北野 哲男
海老池 洋
堀 正和
吉村久仁雄
山田 順啓
中島 一彌
小島 蘭幸
石田ひろ子
木本 朱夏
山本 進
藤井 宏造
水野 黒兎
山田 順啓
加川 靖鬼
平尾 定昭
村上 玄也
森 廣子
柴本ばつは
榎本日の出
三宅 保州
澤井 敏治
藤原千恵子
木藤こみつ
坂上 淳司

いらちやさかいのどかなんで無理ですわ
亀のエサ買つてきてねと言う散歩

森 廣子
山田 耕治

オーイと呼ばばハイイと妻の音がする
のんびりも出来ないあの世への備え

小島 蘭幸
佐々木満作

荒れる土俵に呼出しの声のどか
ハミングが度度洩れる風呂の窓

長高 俊雄
藤田 雪菜

昼御飯たべてあくびを移し合う
軒先はのどか玉ネギ列を成し

原田すみ子
栃尾 奏子

最後が木道歩く尾瀬ヶ原
外国の臭いのしない過疎の村

江島谷勝弘
松岡 篤

三浪が呑気に脛をまた囁り
猪も休耕田で昼寝中

久保田千代
米田 恭昌

横道へ逸れた兎を追っている
遺言はなしお好きなようになさいませ

久保田千代
山田 葉子

休日炬燵で欠伸またあくび
太公望をとり囲んでる三四人

新家 完司
西出 楓楽

交番ですやすや眠ってる迷子
人

三宅 保州

明日はのどか時々鬱が降るでしょう
地

井上 洋三

二三人やさしい人がいるのどか
天

太田扶美代

水飲みに螢が家に飛んでくる
軸

木嶋 盛隆

野良猫に膝を乗とられています

軸

兼題 「イメージ」

柿花 和夫 選

喪が明けて急に綺麗にならばった
美容院妻が帰ればすぐ褒める

清水 英旺
川端 一步

一年中スミレ咲いてる宝塚
こう見えてバレンタインはチョコの山

永田 紀恵
藤井 宏造

イメージを壊されました声美人
イメージの中ではいつも勝ちゲーム

山口 光久
鈴木いさお

外せない私になったヘアビース
サンプルの半分だった海老フライ

緒方美津子
村田 博

本気ではないひらがなで笑って
イメージは左うちわの定年後

矢倉 五月
森松まつお

イメージが無駄な努力と今気付く
イメージアップ意識をしたらきこない

安福 和夫
宇都満知子

イントロが長くて虹が消えそう
肩書きもイメージも消えただの人

酒井 紀華
吉岡 修

髪染めてみても裏切る影法師
使い道考えてあるジャンボくじ

山岡富美子
澤井 敏治

イメージを描いて高い化粧品
剥いても剥いても酒飲みのレット

山田 耕治
平井美智子

イメージは少女のままの電話口
イメージを消したのに夫気付かない

平尾 定昭
鈴木いさお

くずれ去るイメージ鼻毛抜く男
これで良しイメージ通り我が遺影

安土 理恵
磯島福貴子

ナイハデイ今もイメージすら湧かず
お人柄思い出させるお葬式

安福 和夫
肥山 一文

日米で昔がえりを競いあう

荒川 鈍甲

丸一年イメージ通りトランプ氏
スイスなら平和と思う軍事国

前 たもつ
水野 黒兎

手術着に信頼感の湧く主治医
政治利用イメージ暗い少女像

宇賀 史郎
中川ひろ介

安全バイのイメージちよつと油断する
地のままでやれと言われた悪女役

山本 進
永田 紀恵

イメージの海で泳げばまた二十歳
憧れの人のあくびを見てしまふ

村上 直樹
安土 理恵

ヒョウ柄は大阪の顔よく喋る
失敗のイメージ失敗を招く

水野 黒兎
山田 恭正

同級生は真面目と思ってる私
怖そうな兄ちゃんが立ち席譲る

能勢 利子
中島 一彌

住
芦屋です六麓荘でない芦屋
イメージで損する生まれ付きの顔

萩原 狸月
石田ひろ子

どこに行っても職務質問よくされる
下戸ですと言にくい顔持っている

太田としお
居谷真理子

イメージを広げ楽しむ地図の旅
人

藤原 大子

イメージを壊して楽になりました
地

小島 蘭幸

カタカナに無いイメージをもつ漢字
天

川端 六点

本当はそんなに強くない私
軸

上田ひとみ

カップに口紅イメージダウン初デート

軸

兼題「傾く」

藤村

亜成 選

傾いてはいけない方へ倒れそう
時と場合如何様にでも傾く
本心は直立したいビサ斜塔
傾いて雨は通さぬ瓦屋根
すこしずつ春へ傾く庭に梅
新鮮な気分でグラス傾ける
わらわらとなつても粘る喧嘩独楽
紙一重にも心の揺れるやじろべえ
傾ける銚子重ねる温い友
べつびんに傾くハンサムに傾く
底迷の危機を救つたのは度量
デパ地下とコンビニ傾きを変える
傾いた月に差したすロゼワイン
傾けた傘が真相知つてゐる
言うだけは言つた傾斜する夕日
交付金と聞いて傾く主義主張
吃水線深く傾く日本丸
人形が身体傾け身を焦がす
背に斜陽孤高に生きていくつもり
傾いた老舗群がる白い蟻
寄り添つて互いの色に染まり出す
傾聴の苦言は頭上すり抜ける
戦争を知らぬどうしの右傾論
女ですもの押しの一手へ傾斜する

安土 理恵
太田扶美代
海老池 洋
村田 博
小山 紀乃
山田 葉子
初代 正彦
初代 正彦
山野 寿之
小島 蘭幸
長浜 美龍
立蔵 信子
赤松ますみ
松原 寿子
井上 洋三
澤井 敏治
中原比呂志
藤原千恵子
安土 理恵
油谷 克己
宇賀 史郎
中村 恵
島田 誠一
山本 進

入射角少し傾き乱反射

傾いたままでビョンチャン号船出

ひとりの夜ワイン傾けシヨパン聴く

新聞へ今日も傾くボクがいる

真つすぐな目に傾きを正される

傾けた杯から零す嘘誠

美しい嘘にも首を傾げます

地軸ほど傾いてます千鳥足

傾城の歴史を語る出土品

月さやか名曲に耳傾ける

反抗期傾いたまま戻れない

片べりの靴人間を崩さない

大国だから傾き具合よく見える

佳

本心が見える謝罪してる角度

傾いた海は多くを語らない

傾くと悪魔がギョッと手を握る

急速冷凍傾いて怒つてゐる

突然に傾いてきたわけじゃない

人

山の端に傾き夕日ばかり落ち

地

日日新た耳目傾け今日生きる

天

海に陽が落ちるまでの万華鏡

軸

生生流転陽は傾いてまた昇る

木嶋 盛隆

鈴木いさお

鈴木 栄子

立蔵 信子

藤原 大子

小林 わこ

中島 一彌

穂口 正子

三宅 保州

佐々木満作

能勢 良子

関 よしみ

荒川 鈍甲

原田すみ子

木本 朱夏

栃尾 奏子

柴本ばつは

前 たもつ

指宿千枝子

磯島福貴子

松尾美智代

兼題「自由」

小島

蘭幸 選

糸切つた風その後も幸せか
さて今日ほどどこへ行こうか何しようか
好きにしたいいよ時が同じなら
表現の自由を思う彬の碑
ここからは自己責任という自由
妻旅行やつぱり此所は俺の家
自由席へ約束果たすように着く
御自由どうぞと忘れられてゐる
自己責任どこへ飛ばうと潜ろうと
束ね髪ほどく自由になりたくて
核傘下がんじがらめになる自由
七十年で終わらせてはならぬ自由
文字を追う自由な時間帯である
定年後は妻の自由を邪魔しない
とりあえずスマホと縁を切つてゐる
バイキングフリーサイズをはいてゆく
整形ですのご感想なら自由です
素つぴんでモ化粧も自由差はあるが
夕映えや浄土はさぞやよい処
退屈を楽しむ本物の自由
手放してあげた風船淋しそう
家長だが自由に出来る金はない
市にボンと二十億円寄付をする
二十五時わたしを縛るものがない
毎日が日曜なのにない自由

海老池 洋
片山かずお
安土 理恵
平賀 国和
内藤 憲彦
安福 和夫
青木 公輔
古今堂蕉子
新家 完司
藤井 宏造
澤井 敏治
江島谷勝弘
立蔵 信子
田中ゆみ子
岩佐ダン吉
鈴木 栄子
伊達 郁夫
原田すみ子
長高 俊雄
吉村久仁雄
栃尾 奏子
村上 玄也
上山 堅坊
小山 紀乃
澤井 敏治

ご自由にと言われてはしゃぐおじいさん
紙風船自由に飛んでいいんだよ
今日もまた猫といっしょに門を出る
年金が自由の裾を踏んでいる
歩いても歩いててもまだ万華鏡
不便さも自由もあつてふたり住む
檻の中から安心して眠る
自由には使えない妻のへそくり
私を不自由にする指定席
退社からただいままでのプチ自由
空を飛べ海をもぐれよベンの先
春の風掴みどころのない自由

佳

自由奔放七十歳は伸び盛り
泳げたら飛べたらそして踊れたら
にこやかにやつと自由を得た極
何をしたって空き瓶の中だから
自由になったら空気が抜けました

人

自由自在飛べる翼が生えてきた
あなたの居ない自由など要りません

地

天

軸

藤井 則彦
能勢 良子
山田 耕治
中村 恵
赤松ますみ
藤原 大子
田中ゆみ子
緒方美津子
藤井 宏造
萩原 裡月
居谷真理子
太田扶美代
中川ひろ介
平井美智子
米田 恭昌
赤松ますみ
谷口 義
渡辺 富子
中岡千代美
木本 朱夏

別れから始まる果てしなき自由
たつぷりと貯めてたつぷりある自由

句会 燦 燦

一月句会を読む 弘 津 秋の子

川柳塔句会べつびんばつかりだ

余所見ばつかり手には風さえ残らない

新年句会は完司さんの「べつびんばつかりだ」の賛歌から始まる。会場はワッと湧き和やかな雰囲気になったことだろう。

座の文芸としての川柳の力を使う。すみ子さんの「風さえ残らない」の句は抒情的にみえるが沈着冷静な句である。「余所見」の使い方が旨い。

故郷の空き家はどれも純和風

添え書きの賀状へ電話したくなり

「和風」は難解な題である。純子さんの「純和風」の単語の見つけがいい。五月さんの「和風」という言葉を使わず賀状を和風と捉えた目にも注目。「賀状へ」の「へ」を外すと句が屹立してくると思う。

残り時間たつぷりあると思つて

夕焼け小焼けまだたつぷりと人を恋う

楽観的且つ前向きでないと生き延びれないこの世である。残り時間は恋う時間。高野喜久雄さんの「くちなし」の詩を思う。

「くちなしの実のように」待ちこがれつつ ひたすらにこがれ生さよ と父はいう 今も どこかで父はいう

父になる父の轍を踏みしめて

我が子への思いが伝わってくる。平坦ではない道である。

繁盛亭笑えは春はもう間近

この句には春の匂いがある。

我が家では天皇 外へ出ると「ミ

一月句会は、完司さんの入選句から始まり完司選の「トップ」の軸吟で終わる。天皇とゴミは同一人物である。この男は幸せか。勿論幸せな男である。

新家 完司

原田すみ子

新田 恵

赤松ますみ

藤原 大子

田中ゆみ子

緒方美津子

藤井 宏造

萩原 裡月

居谷真理子

太田扶美代

中川ひろ介

平井美智子

米田 恭昌

赤松ますみ

谷口 義

渡辺 富子

中岡千代美

木本 朱夏

水野 黒兎

繁盛亭 笑

我が家では天皇

外へ出ると「ミ

新家 完司

完司 選

トップ

おどろ城

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようにお願い
いたします。

編集部

川柳花の輪(大阪)

岡本

薫報

また聞きで友を誤解しもつれだす
自惚れて能も無いのに爪隠す
雄弁で鳴らした男舌もつれ
顔の傷隠して女修羅を生く
ほこおさめもつれの元はなんだっけ
もつれてる団子の中にある本音
千鳥足もつれたふり寄つかかる
夫婦喧嘩もつれもつれて裁判所
隠しても何でもわかる母がいる
月隠し太陽隠し雨が降る
通販で買ったかばんを隠し持つ
あの人に来ると話がもつれそう
繕ってみても自分がじわり出る

川柳塔みちのく(青森)

稻見

則彦報

フラスコでふつつ煮込む探究心

焔

マルメロを煮込み生き方丸くする
来る年も五七五に生かされる
熟睡は出来ない明日の予定表
おぬしそれ惚れ薬ではあるまいな
映画館濡れ場でいびきかく女
煮込まれて貴方好みの良い味に
空籤が纏わり付いて離れない
分かれ道迷わず母の後を行く
貴方との愛を煮込んでこげちゃった
コンビニの隅にチョココンと募金箱
ふる里が煮込む訛の味ほろり
煮込まれた林檎は冬の皿に盛る
募金など無い世の中になればいい
煮込まれてわたしに角はありません
連ドラに釘付けされる十五分
赤い羽根おたがい様の色である
まだまだ続く私の現住所
百円も百万円もコロザシ
終点になっても寝入心地好さ
募金してくれと神様追って来る
死に顔が美しかった祖母だった
友情が続いてベンがよく走る
募金活動恥ずかかった若かった
生と死を背中合わせに歩む老い
今朝の顔氣に入らぬから取り替える
はめ上手子の才能を開花させ
人生を楽しむ証し皺の数

柳子 柳人 ひとし 吹喜 久 武 清雪 博子 ふみお 隆樹 芳生 慕情 則彦 風来坊 美鈴 のぶよし 霜石 重虎 龍馬 規子 京子 真由美 ふさあ 初枝 一呑 花峯

骨折の痛み流してくれる友
一杯の酒にワイフの凄惨い鼻
あと一歩手も足も出ぬ時がある
ぼろぼろの辞書から拾う言の海
遺骨まだ終戦知らぬ海の底
黄に錆びてゆく一日に赤とんぼ
はびきの市民川柳会(大阪)中川ひろ介報
梵鐘の撞木の減りし過疎の寺
一筋の光に繋ぐボランテア
優しさと思いやり添える介護
星光る会いたい人はただひとり
光る汗労苦厭わぬボランテア
試合後はとてもやさしい鬼コーチ
優しさを隠す口元一文字
アペノ橋ホームドアを工事中
晩鐘の音色心にしみわたる
ばあちゃんが優しい嘘に騙される
アイキヤンの光り輝く授賞式
優しさになれて我儘言うてます
急に子が優しい時は何かある
サンガラスとれば優しい顔がある
なによりの言葉ひとつで安堵する
わたくしの鐘が鳴るとき空は青
高台の半鐘浜の守り神
優しさの中にほんとの強さあり
再審開始きらりと光る新事実

氏加子 井蛙 一花 洋子 吞舟 和香子 久仁子 ちづる 壽峰 みつこ 大子 いさお 一文 真清 美代子 六点 ヨシ枝 さくら 泰子 かつ美 かこ 欣之 久仁雄 ひろ介

豊稜は森から光一筋に

恒例の懺悔しまくる大晦日

白髪は薄く紅さす品のよさ

詐欺師達みんな優しい顔してる

鐘つき堂恋の成就を三度撞く

追伸の一語に光る父母の愛

親から子老舗を守る家訓あり

議会へと行つて府政を直したい

南大阪川柳会

松岡

篤報

嫁姑摩擦でおこる静電気

電気屋さん残るひとつも消えました

太陽も風も電気にいたします

仮面にも頬紅をつつけ口紅も

仮面の下きつと淋しい顔だろう

クレームへ能面着けた係来る

年の暮夜警断り気が重い

老人の知恵断り方もうまくなり

腹の立つライバルだけど断ちがたく

表戸に只今留守と書いて貼る

出席して全没だけはお断り

身勝手に断り無しに来る計報

了解も取らず無断で老いが来る

プロボーズ五十人ほど断った

居たんで居たんです夫以外の好きな人

前向きに生きて忘れてならぬ過去

リセットに白にはなれぬ過去の疵

朋子

フジ

シルク

章司

高鷺

洋一

喜久子

雄太

弘委智

ダン吉

和雄

ルイ子

郁夫

東風

忠昭

峰子

更紗

高志

武臣

博

栄子

楓楽

シマ子

ひさ乃

弘子

過去自慢するとお酒がまずくなる

いつまでも時効にならぬ妻の愚痴

昔の日本思い出させる北の国

プライドを捨てれば過去が軽くなる

過去形にしてはならないきのこ雲

愛よりも確かとダイヤねだられる

大国の横暴島もねらつて

欲しいけど目移りがして止めにする

核兵器欲しがりませんいつまでも

政治家の欲しがる名誉票と金

夕方になるとお酒が欲しくなる

介護せぬ子らも欲しがる遺産分け

人情が欲しいと思う都市砂漠

欲深い心が絡む形見分け

竹原川柳会(広島)

吉田

太虚報

近過ぎて感謝の言えぬ夫婦です

笑い声今日も感謝の日が暮れる

感謝状妻に手渡すサプライズ

耳に痛い言葉今では胸に染む

ありがとうありがとう母の肉声

感謝のことは涙になりました

風雪に耐えて睨みを鬼瓦

貧しさに耐えた昭和のベージュ繰る

耐える事学ぶ明治の母の背な

ありがとうこの一言に耐えてきた

耐えて来た数だけ心丸くなる

一步

柳伸

国和

あさ子

たもつ

克己

修

なぎさ

実

直子

いさお

歌留多

志華子

恭昌

弘子

現代

昭紀

夢香

一徳

蘭幸

淑子

鬼焼

幸子

節生

栄香

水野 黒兎 選

美穂

和香子

郁夫

修

葵

石花菜

みつこ

勝弘

菊江

武彦

佳句地十選

(2月号から)

古今堂 蕉子 選

夢叶う日まで助走をくり返す

番地だけ残して白い地図になる

バスポートなしでミサイル飛んできた宏造

飽きる程人喰つてきた顔してる

誤解まだ解けぬか煙がぐるぐる

来年のゲストは福の神と決め

左手と右手秤にかけてみる

喪中がききもう言い訳は届かない

やんわりと言われじわじわ効いてくる

飄々と生きるテーマは風まかせ

哲男

耕治

ほおずき

枯葉一枚海へと続く波にのり
スクリーンは天空シアターは続く
川柳は自分史続く五十年

結婚以来三年日記が十七冊
趣味ふたつ温い仲間が居て続く
地球儀の歳時記狂い続けるか

世襲四代神通力も色褪せる
ポケットにどんぐり三歳宝物
夢を抱くころころと花手鞠

眼科歯科診察券がふえて来た
こぼれ種思わぬ花が庭に咲く
生命線伸びたり縮んだり私

男子脳トリセツどこにありますか

川柳塔唐津(佐賀)

仁部 四郎報

曾孫「快都」電送写真でお目見得ず
居酒屋の組板上司坐らせる
玄関で家主呼び捨てにするオム

お見舞いに来る義務があるあの人に

城北川柳会(大阪)

近藤 正報

引退に敵も味方も拍手する
帰省の子揃いはのほの屠蘇を飲む
カタコトの電話はのほのいやされる

親になる覚悟して聞く呱呱の声

真剣な祈りを神が知っている
意欲未だ失せてはいない年男

笑子

比呂子

千代美

宣之

慶子

輝恵

敬子

歩美

厚子

初音

栄恵

貞子

史子

満作

叶えたい夢があるから生きている
死ぬ覚悟あれば困難打ち破る
春の陽が今朝の幸せ温める

賽銭じやらり世界平和と明日の酒
千羽鶴持参で折る母の床
家政婦が見て来たように撮るカメラ

神様へ補聴器つけて聞いてくれ
平和への覚悟と手鍋提げてくる
貧乏は覚悟と手鍋提げてくる

禁制の女の人が裁く相撲界
師の教え置かれた場所で咲く覚悟
生かされて日々に祈りが深くなる

ありがとう幸せですと初詣で
ほのぼのと寿ぐ如し青い空
イデオロギーなくて雑煮の三杯目

もう一度さがしてみよう生きがいを
誤解まだ解けぬ爛がぬる過ぎる
終るのはこの地ときめて生きていく

平和祈願余所目にキナ臭い匂い
ただ祈る人事及ばぬ事を知る
清水舞台飛んだつもりで買うウイソン

祈るのは皆が元気でいて欲しい
責任は取る覚悟の丸坊主
シャンシャンを見てると自然笑みがわく

被災地の早い復興ただ祈る
百ペーじもあつた元日の朝刊
挑戦は覚悟を決めている証し

野鶴

朝子

義昭

直樹

あさ子

捷二

実

和夫

満洲夫

弘委智

杵香

星雨

北舟

正

和歌山三幸川柳会

楠見 章子報

宇宙論地球が回るだけでいい
気にかけて頂くことのありがたさ
元気ですありがたいこと百五歳

喧嘩する相手が居る言う安堵
うすくなる日めくり恙無く暮れる
逆らった息子が親の木に登る

癌保険役立つこともなく生きる
生きる力頂く趣味に巡り合う
円満で何の不足もない二人

あの世から仕送りもらい生きている
佗び寂の旅がだんだん好きになる
ペン先もいっきよに弾む旅日記

未練ある世界一周船の旅
古寺巡り一期一会の旅日記
ローカル線心温もる地の言葉

潮騒に旅情がつのもるやい舟
ボインジャーよ今は宇宙のどのあたり
無題という旅に出かけてみたくなる

霜月の暗夜に降りるしのび足
やんわりとのを外して聞き上手
拙き出しのどの過去形もいとらしい

身から出た錆を落として生きている
夕やけ小やけベンチ離れる杖ふたつ
切り取り線金ながらも子の自立

美人から手招きされて目が覚める

倫子

まき

エイ

千鶴

昭枝

富香

起世子

ひろ子

絹子

みつ江

彦弘

みね

一雄

准一

いい笑顔に誘われはすむ募金箱
内角の高めに誘い球がくる

禁断の木の実がおいでおいでする
よい歳をしておいわれられている元氣
その元氣何を食べるとそうなるの
元氣よくははの茶碗を割りました
わたくしをはつらつさせている元氣
行けるうち元氣なうちに歩こう
元氣さがひっくり返るスニーカー
趣味多忙元氣な妻でいつも留守

わかあゆ川柳会(島根) 松本はるみ報

また夏も思い出します終戦日
夏休み泳いだ川が懐かしく
人老いて夏日なつかし浮袋
手ぶらとて来ればうれしい親心
夏の海水水平線に深呼吸
正座して墨の匂いに書く一字
下手な字で下手な文章それがい

川柳塔おっぱひ吟社(香川)川崎ひかり報

晩学の夢を耕す辞書を買う
頑固でも夢を叶えてくれた父
老いてなお明日へつなぐ夢を追う
返事待つ郵便受けに夢もらう
喜寿傘寿紙風船で越えてきた
春の夢饒舌になる種袋

昇

次根

知香

宏枝

章子

美羽

当代

和子

智三

好栄

安子

はるみ

かつ子

ハル子

恵美子

昌

弘

放任

よしみ

初恵

いさむ

ひかり

ブラザ川柳(大阪)

梶原

弘光報

無感動することなくて無聊の日
新しく家事を教わる濡れ落ち葉
一葉より論吉が人氣お年玉
大器晩成とうとう出番こなかった
咄家は出番囃子に襟正す
老夫も俺の出番とポーズ決め
手のひらの「人」を呑み込みいざ出番
放つておけばまあよく掃いてもういない
ルンパにはストレス貯まる四畳半
掃いたってダメよと笑う濡れ落葉
進む道自分で掃いてさあ一歩
読経の後掃いて清める経枕
ゴミ当番カラスのエサの後始末

川柳茶ばしら(愛知)

関本かつ子報

サンブルはもつと大きな海老でした
古きタンス新品よりも価値がでる
ひとり旅心配そうなお月様
忘れぐせ移動する時周り見る
吠えかたは犬も顔負け筋通す
老犬を老人が引く散歩道

ほたる川柳同好会(大阪)水野

黒兎報

声高に語らう老いの日向ぼこ
虐待の子が死ぬときは声もなく

待ち人の眠気を醒ます呱呱の声
声を出し喋ることこそりハビリに
幼子の母を呼ぶ声ただ大で
自動車事故悪い相手が大で
決まってる分らないのよ寿命って
お雑煮の決め手は母の出汁の味
決めたのに酒が喋りの蓋を取る
神様が決めた寿命を待ちわびる
退位決め菊は次代へ株分ける
子が巣立ちすつかり我が家二人連れ
異常無しに気分すつかり晴れ渡る
同窓会すつかり老けた顔洗う
気が知れてすつかり打ち解ける
ワンデイパス使いあちこち神頼み
生きてます白寿の伯母の年賀状
目の手術やって変った世界観

京都塔の会

山田 葉子報

今日も元氣熱燗スルリ腑に沁みる
熱はまだあるが句想がひらめかぬ
優しい言葉聞いてどんどん熱をあげ
熱はいる歩きスマホは危ないで
次々と老舗の消える風の街
べちゃんこになるかならぬか正念場
胃と腸をべちゃんこにして待つ結果
バアバの財布べちゃんこにしたクリスマス
あの人とならふと手をつなく細い道

美佐子

信男

守啓

堅坊

勝

純子

一弥

則彦

黒兎

長一

郁子

順子

奈津子

正子

春代

柳童

公子

哲子

ルイ子

五月

昭

ふりこ

福子

かずお

則彦

見返りの美人はみんな細面

加熱料理レンジでチンにしてしまう

年寄が筋トレやって熱を出し

熱い恋どこに行つたか50年

繊細を絵にした様と言われてる

仔々細々それぞれ想い出は尽きぬ

冬はそこもと痩せねば雪女

するしない大げさになる墓じまい

大げさに書いた日記の遺言状

べちゃんこになる覚悟して張った意地

奥方のナイスバディーは過去のこと

定年迄走り続けた靴の底

踏み台にされて覚えた処世術

大げさな会話の中にある本音

熱燗に今日の鬱憤溶かし込む

援軍の最後は細い妻の腕

川柳大阪

山崎

珠生報

過疎の里平和を願う寺の鐘

受験生推薦受けてうきうきと

千号に向けて新たな出発だ

女子会は酒が無くても良く喋る

脈脈と続く句会にある絆

広辞苑新語継続追記する

環境破壊いつまで続く温暖化

旅続く白いページを繰りながら

弘之

葉子

元一

泰夫

多津子

求芽

北舟

宏子

弘子

文代

満子

英旺

義昭

洋志

万紗子

光久

保子

うらかな陽気いいこと有りそう

陽気と阿呆を紙一重のままで生き

門口に陽気な孫の笑い声

雪が解け春の陽気待つ田畑

手放して陽気になれるマランチ

陽気一番あしたも元気でいたいから

神様も陽気な人の味方する

売り買いは仮想通貨という魔物

悲しいね今も子供を売る国が

荒れ果てた日本語売っているテレビ

一子相伝頑固な味で売る老舗

売りません差し上げますと書く臓器

宝くじ当たれば心ホクホクに

ダイヤの指輪こっそり売って貰いでる

四十枚もあつた元旦のチラシ

賑やかに娘を迎えた衣紋掛け

七草に下げた仏飯仲間入り

老齢者田舎の空気腹一杯

賢子

蕉子

昌代

満知子

志津子

わこ

雅美

比呂志

一步

堅坊

遠野

五月

和

まつお

勝弘

美龍

かよこ

功

川柳塔鹿野みか月(鳥取)福西

茶子報

足音で家族と悟るベツト犬

鳥取の螢と言われた男

犬小屋に酔つてお邪魔し嘸みつかれ

玄関に心新たに注連飾り

フツと沸くチャンスに乗っている門出

チャンス狙つておがくずの中にいる

十億円当たるチャンスを買ってゴミ

大鯰

石花菜

文道

草文

和子

盛桜

茶子

身の丈を思えば何ら苦にならず

富を得てケチケチしてるイヤな人

翔ぶチャンス親の介護が邪魔をする

父さんと経済講和開炉裏端

馬の背に時々触れているチャンス

正月を飾つてやると雪が降る

飛んでゆけ怪我した胸の痛いとこ

隣には怪我のトトロが居てくれる

素のままの飾り気のない人が好き

陶酔し憲法変える意地の安倍

青春を飾つた服が捨てられない

幻想で飾る世界に鬼が住む

飾つてもみばえのしない春のなか

老いて未だチャンス wait しているのです

ガラボンの当たりくじです旅に出る

トランプの計画通り行くものか

補聴器とイヤリング付け街に出る

神様がくださいましたいいチャンス

鳥取の景気は蟹の五輝星

雑学が飾り気なしでおもしろい

得意気に景気対策威張るアベ

魚の都合疑似餌を選ぶのは勝手

ナポレオン中身紅茶で飾り棚

川柳塔まつえ吟社(鳥根)相見

柳歩報

爆笑で天井破り歌う空

宇宙から地球を見ると国境なし

弘子

すみれ

実満

孔美子

美ッ千

完司

綾子

照彦

ゆり子

いさお

鈴

小鹿

富久江

かおる

みさ子

裕

京

妻

重忠

満

拓庵

蟹郎

恒

とも子

輝山

賑やかで天の岩戸が閉まらない
 天気予報聞いて明日の服選び
 ふうせんは天国にまでいっちゃうの
 天国に行けるようなね人になる
 降りて来た天使の声はブレイユード
 地面から豪速球が伸びてくる
 地を蹴ってロードバイクで転んでる
 二重丸地から芽を出すそれだけで
 毬ついてついて心の悲鳴消す
 次の世は人になりたい狼がいる
 人間はひとりでなんか生きられぬ
 虹色をもらう人あり二重丸
 新天地探して居酒屋を巡る
 欠点のところ新たな字で埋める
 ビン札に折り目がついてホツとする
 いつまでも新米の所作眠らせる
 新調の服着て動きロボットに
 忘れてた禁酒誓った神棚を
 神様は勝手だ頼み聞いたり無視したり
 肩ひもをずらして神にウインクを
 チェ・ゲバラの肋で神の生あくび
 美智子
 弘子
 幸子
 あきら
 ゆき
 草庵
 桂子
 芳山
 哲子
 俊子
 德利
 畔
 瑞人
 聡美
 柳歩
 孝子
 紗季
 ひすい
 雪代
 重忠
 完司
 一瑤
 一粹

岩美川柳会(鳥取)

山下 節子報

もつとなど言わぬ小さな幸でいい
 自由って簡単そうで難しい
 松葉がにポケモンゴーも横歩き
 主婦の坂夢中で越えた荒れた指
 ポケモンが二十四億置いてくれ
 気配りに恐縮尻が落ち着かぬ
 前向きに生きる老いにも春の陽が
 悲しみは俺に配っていいんだよ
 くすり指次の指輪を待っている
 栗飯を子等に配った母も古い
 反抗期母の配線オフ・セット
 ポケモンが歩きスマホをたしなめる
 冥土の旅ポケモンに手を引かれます
 鍵盤の上でワルツを踊る指
 空腹になると指輪が回り出す
 ポケモンが無銭の旅路おもしろい
 指人形みんなスカートはいっている
 長 柳 会(大阪) 辻村 ヒロ報
 天翔
 清信
 一平
 美恵子
 蟹郎
 たぬ
 菖子
 幸安
 敏子
 茶子
 公子
 彰夫
 振作
 真理子
 雅女
 千代
 節子
 ヒロ
 弘美
 光弘
 たけし
 ゆき
 敬二
 ふみ
 純風

発表会出番の孫にもう涙
 おれ自身掃いて捨てたい高齢者
 寝正月よとおひとりさまの叔母米寿
 出不精を犬が散歩に連れ出て出る
 こざっぱり四角い部屋を丸く掃く
 夏の恋指輪の跡がまだ癒えぬ
 若者に負けるものかと老の意地
 仲裁は俺の出番と縄のれん
 我人生マラソンならば折り返し
 はつとする素材に絵筆走り出す
 掃除機が掃くという字を死語にする
 若葉でもいつか紅さす恋も知る
 溜め過ぎた心の芥掃き捨てて
 泥まみれ掃き清めたい相撲道
 少子化によつしや産むぞと励む古い
 憂さ一掃新たな道へまず一歩
 九秒台狙い五輪の風になる
 天皇へ参賀の道を掃き清め
 満を持し新元号が出番待つ
 川柳塔わかやま吟社 小谷 小雪報
 事始未完の夢が抱く炎
 一月の寒さに気合い入れて出る
 初場所もシラケ鳥舞う国技館
 真つ当に生きていますと初詣
 書き初めに大きな夢が踊ってる
 英 美
 一 男
 旅 人
 登 美
 美 子
 正 博
 靖 博
 明 信
 由 夏
 孝 代
 隆 彦
 洋 二
 和 子
 三 和
 淳 子
 直 樹
 幸 子
 正 美
 小 雪
 寿 子
 克 子
 日出男
 ちづこ
 まさみ

元旦に結び直した赤い糸
初心者のつもりでいつも努めてる
初心の初心まごころと決めている
一呼吸おいて素直さ取りもどす
道しるべ最後はきつと同じ道
案内人もない道ひとり切り拓く
盲導夫人の眼となり杖になり
山頭火わたしにくれた道一つ
誰も来ぬ案内板が拗ねている
天国への道案内は阿弥陀さま
次々と女同士の裏話
裏話聞かされすつと胸晴れる
裏話イメージにないお人柄

富柳会(大阪)

関 よしみ報

寒いから掌ひろげ陽にかざす
先見えて苦勞の種が一つ減り
地には花天には星のシンフォニー
結び目がゆるんでからの軽い肩
愛と愛睦み奏でるシンフォニー
落ち込むが妻の笑顔に救われる
雀たちエサをねだってシンフォニー
ボチの尾が喜怒哀楽の音頭取る
先客が届けたらしいバラの花
ひとすじの光になってゆく絆
人間の森にわたしを根付かせる

京子 ほんのか なる子 小雪 知香 あきこ 紀子 徑子 大輪 めぐみ 准一 よしこ 富美子 文重 伸雄 田鶴子 澄子 壽峰 高鷺 清 武人 あかり かこ 恵

開眼の達磨は夢へ走り出す
七草や小豆粥炊く妻の愛
先頭に立てば何かと騒がしい
ふさぎ込む闇にくつきり寒椿
日記にも書けない記念日は炎
くつきりと境界線がある命

川柳塔さかい(大阪)

内藤 憲彦報

趣味も欲も同じサイズのひとが好き
サイズなど忘れ飛び付く特備品
食欲もサイズ気にしてセーブする
靴のサイズに足を合わせた昭和の子
SからLへ偽証罪だよ僕の妻
肩書に旧の字つけてしがみつき
新名刺余白に秘めた夢無限
肩書が邪魔して友達が居ない
肩書は子育て掃除洗濯屋
肩書を解かれた夜の旨い酒
肩書がとれて気楽な二度の職
肩書が消えても消えぬ人間味
肩書に呆け老人と書く日来た
主人とは呼ぶがチャネル権は無い
シーベルト生まれ故郷を遠くする
試験管から生まれAIお手のもの
熱かった産湯思い切り泣いた
出来ちゃった婚娘も孫も楽ですね(向)

奏子 寿之 アキ よしみ 欣之 森子 唯教 富夫 廣子 和夫 佳子 康信 誠一 ゆみ子 世紀子 志津子 玄也 好子 憲彦 ひろ子 みつこ 愿 清

悩んだ末生まれた子供役に立ち
生まれたかそうかとボクシング見てる
氷溶け春の生まれる声がする
肩書が取れて寝つきが早くなり
肩書に似ても似つかぬプロボーション
肩書きで席順決まる新年会
肩書きはハンガーに掛け友と飲む
裏面も印字名譽職の名刺
肩書などに左右されない絆持つ
べこべこも肩書付くと威張り出す
肩書が増えて無くしたものがあ
見晴らしの差で値が変るワンルーム
三日まえさっきのことと忘れてる
みぞれ降る先にかつての我が領土
見事な落語さわりだけでも笑い出す(歳)
磨いています錆つてきた我夫
未知の道さあ一歩ずつ分け進め

翠洋会(大阪)

佐々木満作報

人間に生まれたことに感謝する
ごろろうさん疲れが軽くなる言葉
五体動き感謝大切に使う
親孝行かたちだけでも有難い
生き延びた感謝で旨い三分粥
ありがとうその一言にある温み
妻や子に孫にも感謝して生きる
舞夢 蕉子 敏治 雅明 澄空 光雄 時雄 雅美 五月 八千代 扶美代 洋一 さくら 憲 清 としお 玲峰 楓楽 満作 すみ子 和夫 昭 げんえい 恭昌

朝早く弁当作りのお母さん

父の樹に感謝降って来る教え

「有難う」その一言で報われる

光と闇くぐりこの世の旅続く

光背に守られ菩薩の美しさ

辛酸を越えて度量が光り出す

艶やかに舊は初春の陽を受けて

光らない石があつてもええやんか

身の丈の歩幅で後期光らせる

光浴び光りを放つ子が眩し

光りもの好きカラスもわたくしも

お正月雀も嬉嬉と日向ほこ

ハッスルをするぞと杖にけしかける

世渡りに正直という武器があり

皆帰る冷蔵庫おと高くなる

子や孫に囲まれ白寿祝う屠蘇

蹟いた石は自分の蹴った石

ほほ笑みが心ほぐした初対面

大根も男も甘くなるばかり

川柳塔なら

大久保眞澄報

行く春に花惜しまれて散り急ぐ

急ぐ気持赤信号に伝わらぬ

味噌汁へ家路を急ぐ夜勤明け

遺言書急げというがまだ死なぬ

小走りの女は恋のど真ん中

善之

捷也

浩二

蕉子

紀子

ふりこ

理恵

眞澄

弘子

公平

希久子

千枝子

志華子

集一

敬子

舞夢

日の出

大子

富子

俊雄

薫

のぶよし

よう子

朝子

初詣済ませば次は除夜の鐘

急ぐまい岐路でゆっくり風をよむ

気持ちだけひとり歩きの急ぎ足

夕闇に家路を急ぐ赤い頬

いそがしく余白をけずる砂時計

急ぐなれば百まではまだ大分先

急いでは転ぶが急がねば負ける

我勝ちに福を求めて急ぐ人

ジャンボくじ福を信じて寄付重ね

かしわ手を多く打ちすぎ福が逃げ

福娘私もやってみたかった

こころの灯小さな福としています

名案は湯船の中に浮かんでる

聞きながい増えてにこにこ聞いたふり

塩漬けの株がじりじり上がり出す

にこやかに問われトリック崩される

強面のセールス捌く妻の笑み

外交戦手の内秘めてえびす顔

にこやかに寡黙の父が孫を抱く

お愛想でもにこにこ顔はやほいい

温度差のあるにこにこ一つ屋根

福わらい目もと口もと私に似

にこにこがたまに怒ると効き目ある

やさしさに触れて笑顔の車椅子

終活にボックリ寺を組み入れる

締め切りの企画が蛇行する焦り

盛隆

崇明

圭子

展代

成子

優

文聰

將文

妙

比呂志

萌子

理恵

元子

敬子

貫一

雅美

史郎

賛郎

恭昌

倫

富子

道子

ふりこ

恵美子

和夫

國治

難題に刻が止まっている企画

企画書を骨抜きにする付度よ

新年を娘と祝い幸せを

アホなところが好きと夫が言うのです

あかつき川柳会(大阪) 山本 昌代報

母の梅最後の一つ食べました

梅が香に気合いアップの受験生

餓鬼の頃昆布しがんだ自慢の菌

またおきた沖縄でへりもう飛ぶな

先ずは亡夫へ見せる娘の初任給

おめでとう福茶梅干し結び昆布

大阪城早咲きの梅呼んでいる

古木から盆梅となるしたたかさ

毎朝の梅干し一個かかせない

南高梅郷土生まれに持つ誇り

梅の香に途中下車する無人駅

たくさんの昆布食べると髪が言う

昆布穫る漁師の肌が陽を弾く

ハウス物初物ですと言われても

初対面軽い会釈のぐ挨拶

背を丸め昆布茶に演歌聞く夜更け

鍋シーズン利尻昆布が幅効かす

一対の古梅ふくいくたり旧家

引き出しに言葉を入れて満ちたりる

初春に孫がすくすく年賀状

紀子

堅坊

孝子

眞澄

直子

久美子

敏子

万作

(福)和子

哲男

信子

鮎子

紀乃

たもつ

(松)秀夫

秀夫

(櫻)秀夫

克己

福貴子

常男

穩夫

浩子

保州

しげ子

紀子

初仕事妻に指示され餅を焼く
満杯の絆もひとつずつ欠ける

篤 誠

数多い中から決めたあなたです
沖繩の歴史が語る子等の悲話

優子 雅尚

倉吉川柳会(鳥取) 竹信

照彦 照彦

学問の神に寄り添う梅の咲く
亡母そっくりな顔に紅さす初鏡

朝子 惠美子

カラオケの一人さまで拍手する
総務課がグループで買うジャンボくじ

健二 ヨシエ

核のしこり残す長崎美しい
長崎と広島知らぬ者いない

龍枝 雄大

満腹に遠く心も満たされず
書き初めに平和と大書して不安

喜八郎 一志

年上を数えてみたら二三人
集団で来いというても来ぬ諭吉

野薫 万彩

神童と言われた彼がホームレス
百歳まで生きる見込みと変更し

恭子 節子

書き初めは漢字一字の愛と書く
昆布には不思議な旨味隠れてる

善之 一文

年上を数えてみたら二三人
集団で来いというても来ぬ諭吉

耕治 涼子

見込まれて磨きをかける北のアナ
見込みとは違ったけれどいい人だ

日出子 萩江

寂しくて今朝も一人で昆布茶漬
満月はすぐに頭上を通り過ぎ

和雄 太郎

亡くなった兄の年ふつと数えてる
何人と話しただろう今日ひと日

厚子 迪

見込まれて嫁に行く時角隠し
ボタンでネ核戦争も開戦し

瑞子 祐子

金満ちる人は逃げる消費税
狭い家娘が来る孫も曾孫まで

シマ子 康信

亡くなった兄の年ふつと数えてる
何人と話しただろう今日ひと日

健彦 恭子

定年の日から始まる皿洗い
縄のれんいつもの自慢始まった

次男 紀美恵

初夢は後期高齢恋成就
酔昆布は捨てた男の味がする

廣子 ひろ介

亡くなった兄の年ふつと数えてる
何人と話しただろう今日ひと日

靖鬼 紀恵

縄のれんいつもの自慢始まった
始まったひとり暮らしも十年目

智恵子 醉美蓉

相乗効果昆布がうまみ引き立てる
川柳さんだ(兵庫)

田中 章子

亡くなった兄の年ふつと数えてる
何人と話しただろう今日ひと日

祐康 好文

縁起よい八で始まる犬の年
神棚に養殖鯛が跳ねている

石花菜 大鯰

戦力外ゆつくりしろと言うことや
楽隠居揉める財産残さない

正和 宣子

亡くなった兄の年ふつと数えてる
何人と話しただろう今日ひと日

義徳 周三

神棚に養殖鯛が跳ねている
鯛高値鯛焼き買って間に合わず

由紀子 重忠

肩書きが消えて気楽になる名刺
頼り切り負ふ抱つこの楽隠居

ひろ介 つな子

亡くなった兄の年ふつと数えてる
何人と話しただろう今日ひと日

隆太 雄太郎

鯛高値鯛焼き買って間に合わず
お正月息子が釣った睨み鯛

野蒜 風露

腹八分これが死ぬ程難しい
日溜りてあなたのためのひざ枕

加代子 ひとみ

亡くなった兄の年ふつと数えてる
何人と話しただろう今日ひと日

哲夫 キヨミ

鯛高値鯛焼き買って間に合わず
お正月息子が釣った睨み鯛

康子 照彦

居るだけでほっとするよな人が好き
断捨離をすませて気持ち楽になる

利子 順子

亡くなった兄の年ふつと数えてる
何人と話しただろう今日ひと日

美智子 美籠

鯛高値鯛焼き買って間に合わず
お正月息子が釣った睨み鯛

照彦 清報

集団の写真無理矢理写される
福男高校生の恵比須願

修平 美智子

亡くなった兄の年ふつと数えてる
何人と話しただろう今日ひと日

美智子 美籠

鯛高値鯛焼き買って間に合わず
お正月息子が釣った睨み鯛

高鷺 清報

初詣国難排除無事願う

不遜ではないか神仏一括り

助けてと神には言わず札握る

神様の切符でにんげんの駅へ

貸し借りは人の情けの受け渡し

春の野にハンカチ貸して戻らない

泣いてきた苦勞が咲いた恵比須顔

拉致家族悲願成就の初詣

もたもたの老いを叱るな行く道じゃ

川柳塔すみよし(大阪) 森松まつお報

生きるとは自問自答のリフレイン

驚いた近年に無い凄い雪

のんびりと暮らして白寿知らなんだ

春日和のんびり欠伸でもしよう

平和です夫婦で欠伸移し合い

国会で欠伸が目立つ議員さん

あつはつは欠伸うつした電車中

大欠伸今日も終わるぬ天の川

同じ話欠伸こらえてふんふんと

新生児クシャミ欠伸に大騒ぎ

大欠伸心の凝りを追い払う

妻の小言欠伸殺して聞いてます

待合で欠伸出るほど待ちました

寝つかれず昼に欠伸の連発だ

三食昼寝猫に欠伸をうつされた

紀雄

恵

常男

かこ

両文

あかり

寿之

壽峰

欣之

保州

五月

舞夢

芳香

萌

舞蹴

勝弘

重信

福貴子

シマ子

ふりこ

宏造

美世子

廣子

ばっは

生あくびしつかり聞いてないようだ

妥協せず父はゆつくり靴を履き

気合い入れ改憲にらむやばい人

気合い入れ打ったメールを誤送信

ひと声がしじまを破る寒稽古

火の酒をホテルのバーで下戸なれど

羽生さんも相好崩す父の顔

監視カメラ一部始終を撮らえてる

ぎつくり腰クシャミ一回しただけで

松の廊下で刀抜いたらあかんのに

小包みを開けばふるさとの匂い

ドア開けるその仕草にも出る個性

若者が躍動新世紀を開く

匿名にこじ開けられた針の穴

見おさめと最後に棺の蓋あける

水仙が春の扉をこじ開ける

弱点を晒し仲間にしてもらう

開運のキーは気長に錆おとし

きやらぼく川柳会(鳥取)後藤 宏之報

猫年かコタツが無二の友となる

どの国も笑顔があれば通じ合い

雷が我が家の空で鳴り響き

木枯らしに背中押されて冬支度

炬燵守り横着病が根をおろす

つるし柿早すぎたのかカビが生え

哲矢

日の出

郁子

大子

俊雄

里子

妙子

満作

直子

まつお

いさお

美龍

一步

雅美

五月

満知子

ゆみ子

たかこ

猫年かコタツが無二の友となる

どの国も笑顔があれば通じ合い

雷が我が家の空で鳴り響き

木枯らしに背中押されて冬支度

炬燵守り横着病が根をおろす

つるし柿早すぎたのかカビが生え

ドキドキの投票大人への階段

酒六本届き年越し出来そうだ

峠越えの日々すべるまい転ぶまい

鈴の音が何の合図かそれが謎

今年いく何事もなく落葉掃く

赤ちゃんも僕のスマホを覗いてる

千三百年奇跡の山と対峙する

年ごとに冬の来るのが案じられ

友偲び泣く日を作る思い切り

朝空に今日の仕事をご相談

岸和田川柳会(大阪) 石田ひろ子報

身に沁みるきびしい注意ほめことば

子育ては褒めよ言うけどいつも角

試験前叱咤受ければ褒めちぎる

褒められて育った技で隙だらけ

敗れたかて褒めるところはたんとある

世話すると飼った犬だが親任せ

となり組犬には犬のお付き合い

愛犬との出会い役所の掲示板

うちの犬扶養家族の欄に書く

独り身の老人いやすロボット犬

飼い犬の医療費出して自己破産

だんだんとボチに似てきたお父さん

ペットショップ媚売るように泣く仔犬

和解するつもり靴がまだ重い

瑞枝

雨奇

千代

宏之

治代

紀の治

恵子

あやこ

美智子

令位子

一子

和美

康信

昭

律雄

カズ子

みつ江

珠子

ひろ子

喜代志

白水

誠夫

忠太

玲子

音楽とウォーキングわたしを解す
かたくなな心を解す鍵ひとつ
うつつといけれど解すのは面倒
穏やかになれぬ拉致の子帰るまで
穏やかに話せと僕に言うている
穏やかな谷崎のペン細雪

オーブンな人だ後に影がない
知らそうか社会の窓が開いている
カニ缶を開ける多喜二の味がする
胸襟を開いているが北は無視

六甲川柳会(兵庫)

市坪

武臣報

上手下手問わない福は汗が好き
初詣数年ぶりに手をつなぐ

一日三度ほほ笑み福とする傘寿

福よ福いつも私のそばにいて

母さんの笑顔我が家の福の神

広口のサイフを開けて福をまつ

幸せは夫婦で突つく夕の鍋

吹き出して何だか嬉し福笑い

幸福は考えようでそこそこに

喜怒哀楽多数見てきた貸衣裳

貸衣裳心の中はほんまもの

七五三ママはびかびか貸衣裳

初詣インスタ映えする貸衣裳

自前でも貸衣裳でも晴姿

信子 大輔 英雄 隆昭 ダン吉 義泰 ふさゑ 笑司 信二 洋二

晴れの日は貸衣裳らの競い合い
寒げいこ気合いを入れる白い息
ひとりだとエアコン切ってダウン着る
結び目をゆるめるといってくる誘い
母がいた雑煮煮しめの味の中
肉筆で受けた賀状が暖かい
えらそうに言っても私口ばかり
八十路すぎ仮面はすした心地よさ
ドラの音が新年告げる神戸港
いつまでもはらはら見てる子のゆくえ
ずっとずっと親ははらはらしてるんだ
点滅を渡れるだろか白い杖

西宮北口川柳会(兵庫) 藤井 宏造報

礼子 妙子 利子 道子 廣光 正彦 夏子 千賀子 美穂 洋次郎 武彦

闊将は闊将らしく天翔る
しゃんしゃんと手締め笑顔で会終る
現役でなくて良かったこの時代
熱爛とするめおひとり様のお正月
だからこそ君でなくてはだめなんだ
年金の残高つましく生きる
ジョーカーに人間軽くあやつられ
AIが世界変えても俺は俺
素のままで在りたし草の粥を炊く
手拍子は昔十三今一つ
しゃんしゃんと歩を進めてる終活期
胸張ってしゃんしゃん生きたと真ん中

章子 キヨミ 一徳 武彦 ひとみ 千津子 いわゑ 盛夫 恭子 じろう 宣子 順子

しゃんしゃんと無事を報告大晦日
総立ちの手締めで終える初句会
絵手紙のカボチャが届く和む顔
傘寿過ぎ忘れ上手という笑顔
母さんの笑い声から場が和む
ただいまの気配で和む子の笑顔
ありがとうごめんさいで和む術
三世代常識論が火ぶた切る
常識はわたくし流でよしとする
常識を飛び越しました聡太君
干し大根光と風が甘くする
芸術の秋だと見てる裸婦の像
魂をさぶさぶ洗う初日の出
心得を言う子子供は逃げ腰に
逆光で撮った写真は魔女のように
少しだけ驚りましたの資本論
生き恥に光を当てる五七五
初釣りに光る魚のうろこ飛ぶ
一喝で父の威光みとめさす
悪たれを制す一声和むバス
二日酔いカーテン越しが眩しくて
キラキラを着るとスキップしたくなる
闊将はトラに栄光与え過ぎ

川柳塔打吹(鳥取)

斉尾くにこ報

深い雪せて今年パスをして

りこ 哲男 紀華 和宏 敦子 光子 わこ 千賀子 哲子 美津子 弘子 正和 宏造 正彦 光久 勝弘 弘委智 みよし 千代 洋次郎 浩司 利子 邦男

陽之助

ブラックホールに核爆弾捨てる
好意持ち信頼深い仲になり

真実の種が根深く芽を出さぬ

深酒は毒とわかつて飲んでます

難民が漂っている深い闇

追えば逃げ逃げれば追うて来る命

ドロロンが追う海原の鯨たち

AIが追い越して行く脳回路

追うけれどまたヒヨコヒヨコと来るガラス

追っかけても俊足だった福の神

貧乏に追われているが仲がいい

追い風にボロ自転車も軽やかだ

辞書を追う指先に見る老いの影

追憶のページ四ツ葉のクローパー

見当もつかぬ白寿の夢を追う

おかあさんあなたのとしを追い越した

新春の無味で無臭のよい空気

笑いの空気うみだす人は人気者

空気読め付度しとこだます

空気澄む鳥取県の星拜む

KYがそんな意味とは知らなんだ

鳥取の自慢空気と星と肉

空気圧遠出するので少し上げ

五十年たてば空気になる二人

茶が冷めて早く帰れと云う空気

日本海とっても深い溝がある

大山滝句座(鳥取)

新家 完司 報

豊中もくせい川柳会(大阪)初代 正彦 報

照彦
美枝
美枝

龍枝

公恵

完司

野蒜

くにこ

妻子

義人

節子

紀美恵

久芽代

美知江

芳光

重忠

岳人

貴恵

悦子

滋

清

玲坊

三津子

大鯨

泰山

紀の治

石花菜

振り付けを酒に任せてひと踊り
飛び乗った列車は地獄行きだった
怒るより許したほうが楽になる
七十歳うっかりとったような歳
脇役で一生終える団子虫
手の平を転げてうっかりが割れる
隣国の赤に染まっていくなアジア
声だけは演じなくてもまだ元氣
糞害を平和の鳩がまきちらす
終活にどれを捨てるか手の迷い
喝采の中で黒子を演じきる
ブーチンもトランプも僕も悪人
何思うでもなく夕陽眺めている
汚れたら洗い流せばいいのです
おい何はどうした何ではわからぬ
この地球も核の汚染に怯えている
うっかりと眉を描かずにバスに乗る
人は皆舞台の主役を演じてる
脚本と演出は妻オレ主演
うっかりが続くと夫は阿保という
鳥取がポケモンGOに汚された
演じて身についたクセ出てしまう
ヒロインになれずオモロイ人で幕
地雷ではなかった犬の糞だった

紀の治
照彦
楓花
芳光
寿代
芳山
くにこ
幸子
大鯨
麦青
厚子
石花菜
美ツ千
雄大
けいこ
風露
由紀子
富隆
道唱
久子
清明
鈴野
希楽良
完司

鍵穴を覗けば妻の大肝
姑のおせちインスタ映えはしないけど
がむしやらに進むと青まで赤になる
合鍵を夫婦で持った新世帯
軽口を言ったばかりに大騒ぎ
表だけ飾っていても本音出る
どんな錠も開けられる鍵きつとある
老いてなおきつちり進む腹時計
片思い出せぬ手紙の表書き
一円玉妥協しません軽いけど
マフラーの色が決まらぬ冬の朝
そしてなお多端な日びを恙無く
長生きの薬と思う軽い恋
万歩計どんどん進めと発破かけ
順調に事が進んで出る不安
軽くいう二つ返事が気にかかる
建て付けが悪くて鍵は要りません
表情が一番大事手話会話
付度が不足か淡い面のまま
マイウエイゴールは晴れと信じたい
介護犬老いを励ます優しい目
表情のひとつひとつにある心
おめでとうぶから言えぬ娘の自立
失敗の鍵は売るほど持ってます

公子
求芽
健二
健三
多美子
武彦
歌留多
真理子
美佐子
玲子
ヨシエ
堅坊
野鶴
雅美
宏子
耕治
玲子
見清
久子
千鶴子
黒兎
美龍
和夫

魂が籠る勝者の面構え
ひと針が大事私の返し縫い
迷わずに進む道です椿の朱
OKを貰いベダルの軽い帰路
親しみをこめた笑顔に鍵が開く

川柳ねやがわ(大阪) 籠島 恵子報

走り過ぎた景色に真実かくれてる
こはれ種双葉芽を出し幸貰う
走らねば私の影が薄くなる
おいしいと思う話に毒がある
蹊いた道で小さな運拾う
開運のみくじを胸に深呼吸
運動会びりに集まる拍手の輪
開運へ神社梯子の初詣
走るのはよそう一本橋の上
招かれておしかったとお世辞言う
小吉の籤で開運信じきる
西郷どんが走る日本の待つ夜明け
開運を祈りさいせん500円
開運を願って亡母のしつけ糸
フルマラソンわが一生のやり残し
塩加減絶妙母の握り飯
開運のお守り抱いて宝籤
おにぎりの旨さを知った塩加減
おいしいなカニとてつちり純米酒

則彦 美智代 さらり 正彦 葉子

きやらほく川柳会(鳥取)(前月分)後藤 宏之報

結婚で開運らしい字画数
決められた運を小出しにする余生
走っている時には見えぬ花の色
これだけは牛後となれよ老いの坂
六七十鼻たれ小僧の祝辞
全没は工夫の跡が見えぬから
めでたくもないが気楽に豆ごはん
冬の葉をたつぷり老いのランチです
日めくりのようにコツコツ石を積む
書道展自作の前で目を背け
トライのみ熱き心が失せぬ間に
紅葉の魔力を見せる伯爵富士
お日様に後は任せたるし柿
春までもと温い寝床にダイコンを
境内の落葉に秋の淋しさを
記念日に並ぶ着物の美しさ
ドキドキの投票大人への階段
予報士に脅かされて厚着する
紅葉と澄んだ空気がお出迎え
仲間それぞれ金波銀波の木々のゆれ

川柳塔打吹(鳥取)(前月分)野口 節子報

尚世 麗 恵子 令位子 美智子 恵子 宏之 千代 紀の治 治代 汪 ゆたか 美穂 美佐子 あやこ 美草 瑞枝 雨奇 多美子 日枝子

過ぎるほど諭吉を持つと狂いだす
過ぎた事やがては月も満ちてくる
平均寿命過ぎるとみんな暖かい
「瑞風」はいいところりして過ぎる
駄句一年流した川が濁つとる
過ぎる秋告げて静かに銀杏散る
シャッターを押した時から過去になる
勝ち過ぎて天狗の鼻が反り返る
水河期が過ぎてモチ期に突入だ
過剰な愛で育つたらしい瘦せ蛙
シンシンと夜も更けてから忍びこむ
シンシンと染み込んで来る演歌かな
しんしんと薬缶のお湯が笑い出す
シンシンと老婆の部屋を月のぞく
シンシンと心に染みる親心
シンシンと冷えた心に赤いバラ
シンシンと雪シャワシャワと冬の雨
シンシンと人寄せ付けぬ杉木立
会いたくてポストに頼みお辞儀する
ポストまで走る余熱があるうちに
年末のポストお腹が産み月だ
エリートのポストに嫉妬の目が開く
ポスト無しポナス無しの年金族
俺のせいポストの赤と空の青
過疎すすみ婆とポストが村守る
たそがれのポストだんだん赤くなる
戦時下のポストの中の深い闇

玲坊 みち子

重忠 美知恵 紀の治 大鯨 照彦 公恵 三津子 石花菜 完司 節子 義人 悦子 貴恵 久芽代 美美子 清

芳光 宣子 滋 野蒜 岳人 泰山 紀美恵 美ツ千 恭子 龍枝 くにこ

句会名	日時と題	会場と投句先
川 柳 あまがさき	13日(火) 14時締切 細い・種・すでに・自由吟	尼崎市女性センター・テレビエ 〒661-0953 尼崎市東園田町3-49-5 藤井宏造 TEL 06-6494-5187
岸和田 川柳会	17日(土) 14時締切 成長・巡る・よもや・プラス	岸和田市立福祉総合センター 南海電鉄「岸和田」駅東へ5分 〒596-0076 岸和田市野田町2-13-19 中岡香代
川 柳 塔 みちのく	17日(土) 17時締切 賞・染める・群れ	弘前市御幸町13-1「大成小学校地域交流室」TEL 0172-36-6614 〒036-8275 弘前市城西1-3-10 川柳塔みちのく事務局 稲見則彦 宛 TEL 0172-36-8605
川 柳 ねやがわ	18日(日) 13時締切 席題・恥しい・中心・吠える 自由吟	寝屋川市 産業会館 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
川 柳 藤井寺	18日(日) 14時締切 策・日曜日・席題共選	藤井寺市生涯学習センター・シュラホール 3F 近鉄南大阪線「藤井寺」駅下車南へ徒歩10分 〒583-0007 藤井寺市林5-8-20-303 鈴木いさお
豊 中 もくせい 川柳会	19日(月) 13時50分締切 首・迷う・つい・自由吟	豊中市立中央公民館 3F 阪急宝塚線「曾根」駅 徒歩5分 〒569-0073 高槻市上本町5-26 初代正彦
川 柳 さんだ	20日(火) 13時30分締切 保険・読む・マスコミ・怪しい 自由吟	キッピーモール (JR三田駅前) 〒669-1545 三田市鉄間が丘5-10-19 谷 祐康
川 柳 たちばな	21日(水) 13時45分締切 印象吟・舌(互選)・書く 自由吟	立花公民館(尼崎市塚口町3-39-7) TEL 06-6422-6741 〒661-0953 尼崎市東園田町3-49-5 藤井宏造 TEL 06-6494-5187
和 歌 山 三 幸 川 柳 会	24日(土) 13時15分締切 チャンス・花・ひとり	和歌山商工会議所 4階 第3会議室 〒640-8570 ニュース和歌山編集部 「和歌山三幸川柳会」宛
はびきの 市 民 会 川 柳 会	25日(日) 14時締切 浮・利益・リーダー	陵南の森公民館 近鉄南大阪線「高鷲」駅下車 北東へ徒歩10分 〒583-0864 羽曳野市羽曳が丘1-11-8 徳山みつこ
川 柳 ふうもん 吟 社	25日(日) 13時30分開場 自由吟・側近・おろおろ タッチの差	開発ビル 2F 〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3 中村金祥
南 大 阪 川 柳 会	26日(月) 18時30分締切 町・ユニーク・慣れる・不味い	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 地下鉄谷町線・堺筋線「天神橋6丁目」駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
京 都 塔 の 会	27日(火) 14時締切 ソフト・満・なまくら・席題	京都ハートピア 地下鉄「丸太町」駅⑤出口すぐ 〒607-8231 京都市山科区勤修寺堂田70-16 榎本宏子 TEL 075-591-0424
川 柳 塔 すみよし	31日(土) 14時15分締切 錯覚・スナック・救う	住吉区民ホール 〒580-0026 松原市天美我堂3-130-2-404 森松まつお

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所 (06-6779-3490) へご連絡ください。

3 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 塔 な ら	1 日(木) 14時締切 望・やっと・出発	奈良市立中部公民館 4F 近鉄「奈良」駅④番出口 徒歩5分 〒633-0054 桜井市阿部787 松本方 安土理恵
城 北 川 柳 会	3 日(土) 14時00分締切 刻む・のこのこ・洩い・自由吟	老人福祉センター 3F 地下鉄谷町線「千林大宮」駅③番出口 〒536-0001 大阪市城東区古市1-8-14 江島谷勝弘
川 柳 とんだばやし 富 柳 会	3 日(土) 14時締切 皺・拾う・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄南大阪線「富田林」駅南口から西へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子 TEL・FAX 0721-25-0603
倉 吉 川 柳 会	3 日(土) 14時締切 ちゃりん・金星・叩く 席題一題	倉吉市明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川 柳 塔 ま つ え 吟 社	3 日(土) 13時30分締切 平凡・飛行機・覗く・真面目	松江雑賀公民館 〒690-1223 松江市美保関町笠浦222-1 相見柳歩
あかつき 川 柳 会	9 日(金) 14時締切 揺れる・棚・保険・時事吟	大阪保育運動センター (新谷町第1ビル2F) 地下鉄「谷町六丁目」駅③番出口南へ3分(道路向い側へ) 〒581-0014 八尾市中田2-312 前田紀雄
川柳大阪	10日(土) 14時締切 鏡・チェック・地球	地下鉄・長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」 〒534-0021 大阪府都島区都島本通4-11-6 山崎珠生
六 甲 川 柳 会	10日(土) 14時締切 図々しい・走る・きつと・自由吟	六甲道労働市民センター 5F E室 JR「六甲道」駅南隣 メイン六甲内 〒657-0011 神戸市灘区鶴甲4-11-11 上田和宏
川 柳 塔 打 吹	10日(土) 13時30分締切 ページ・謎・ドロドロ・席題一題	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光 方 川柳塔打吹 事務局
八尾市民 川 柳 会	11日(日) 14時締切 入学・きらきら・怒る・雑詠	八尾市洪川町・安中町集会所 JR「八尾」駅から徒歩5分 〒581-0083 八尾市永畑町2-1-7 土田欣之
川 柳 塔 わかやま 吟 社	11日(日) 14時10分締切 兼 題＝無駄・出る・居眠り 課題吟＝絵	和歌山商工会議所 和歌山市西汀丁36 TEL 073-422-1111 兼 題 〒649-6253 岩出市紀泉台366 藤原ほか 課題吟 〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森町2-208-5 桑原道夫
西宮北口 川 柳 会	12日(月) 14時締切 太陽・力む・ほっと・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急「西宮北口」駅南出口徒歩3分「プレラにのみや」 〒663-8112 西宮市甲子園口北町27-4-602 梅澤盛夫
ほたる 川 柳 同 好 会	13日(火) 13時30分締切 土・寝る・美しいと思うこと	豊中市立蛸池公民館 阪急・モノレール蛸池 蛸池駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒児
川 柳 塔 さ か い	13日(火) 14時締切 貸す・ひたすら・折り句：ヨコテ	東洋ビルディング 4F 堺駅東北西改札口から2分 〒599-8103 堺市東区菩提町5-171 矢倉五月

柳界展望

★「竹林の風川柳大賞(全国誌上大会)」主催川柳

同好会みらいは、325名の参加。同人成績。

みらい賞 三宅 保州

天位 小林 わこ

ごまかしのきかぬ若さを日々刻む

★「第36回川柳没句供養大会」川柳ふうもん吟社

主催は、12月17日鳥取市新日本海新聞社ホール

で、196名の参加で開催。同人成績。

優勝

優勝 両川 無限

準優勝 森山 盛桜

第5位 新家 完司

天位 夏目 一粋

蟹の殻サブリになってまで稼ぐ

天位 竹口 清信

極楽と決まれば行くぞ

まつしぐら

天位 両川 無限

ごめんねの距離を計っている目線

天位 新家 完司

法螺吹き父の父も閻魔に

筆られた

天位 倉益 一瑤

森から海へずっと続いている手紙

天位 夏目 一粋

櫛の歯が欠けるが如く

出る余罪

天位 両川 無限

日本の真ん中に置く菊

天位 両川 無限

の紋

天位 両川 無限

生き抜いて最後は風に

なるつもり

▽動 向△

取) 1月より、新会長に

両川無限さんが就任。

○南大阪川柳会平成29年度年間賞に西出楓楽さん。

二位に伊達郁夫さん、三位に山口弘委智さん。

○西宮北口川柳会平成29年度最優秀賞に長島敏子さん。優秀賞一位に福島弘子さん・梅澤盛夫さん。

○本誌表紙きり絵の前田尋画伯の「きり絵展」が

2月12日〜2月17日まで

大阪市北区「マサゴ画廊」に於いて開催された。

○2月4日付「朝日新聞」朝刊の声蘭に、富田保子さん(同人・高槻市)の

「大病後 川柳生きがい」が掲載された。

○木本朱夏さん(副理事長)は、「川柳葦群」No.43・No.44に「山頭火小伝・しぐれの中へ」を執筆。

▽雅号改名△

○伊藤玲子(同人・出雲市)さん→伊藤玲峰。

方へ書かれた。P.881行目、三原市→竹原市。12行目の句、瑞運→瑞雲。

▽新誌友紹介△

松江市 内田 厚子

岡山市 新家 完司

岡山市 大石 洋子

篠山市 新家 完司

篠山市 久保木 剛

奈良県 北野 哲男

奈良県 中堀 優

紹介者 大久保真澄

奈良市 中西 賛郎

紹介者 大久保真澄

常任理事会 2月7日(休)

▽訂正とお詫び△

○1月号、P.17上段17行

目の句は、本人より取り

下げの要請があり削除。

P.52上段22行目、健康体

↓健康本。P.84下段19行

目、誰方に掛かれた↓誰

日(水)AM10時)

次回常任理事会 3月7

次回常任理事会 3月7

次回常任理事会 3月7

次回常任理事会 3月7

次回常任理事会 3月7

次回常任理事会 3月7

第17回 宿場町やかげ川柳大会

と き 5月12日(土) 開場 9:00
 投句締切 11:30分 開会 13:00
 と こ ろ 矢掛町農村環境改善センター(大ホール)
 岡山県小田郡矢掛町矢掛3016-1

TEL 0866-82-0848

矢掛町役場南側・井原線矢掛駅より南西へ徒歩5分

会 費 2000円(発表誌・記念品・お弁当)

※ご祝儀等はご辞退致します

兼題と選者 「欲」 藤井 智史 選
 「根」 丸橋 野蒜 選
 「飯」 小倉慶司郎 選
 「裸」 野島 全 選
 「煙」 西村みなみ 選
 「歌」 木本 朱夏 選
 「席題」 紫 しめの 選

出 句 各題2句 欠席投句締切 4月30日(火)

欠席投句の方は、投句用紙またはA4程度の用紙に各題2句と、郵便番号・住所・氏名・電話番号を明記の上、投句料(1000円/定額小為替)を添え下記宛にお送りください

投句先 〒714-1212 岡山県小田郡矢掛町横谷1628-1

紫 しめの 宛

問合せ先 紫 しめの TEL 090-7136-8807

田中 恵 TEL 0866-82-1256

主 催 矢掛川柳会

第15回 大野風柳賞作品募集

雑 詠 五句(未発表作品)

審 査 大野 風柳

審査方法 選句は記名選とします

五句一組として総合力で賞を決めます。全員の入選句を発表誌に掲載します

表 彰 大野風柳賞 一名(受賞作品のミニ句碑・賞状・表彰式交通費)
 準賞 二名 奨励賞 十名

締 切 4月20日消印有効

参加費 1000円(小為替)(発表誌6月号
 希望者は500円加算のこと)

★投句用紙自由 ★全員に記念品

★6月24日(日)の柳都全国大会席上にて表彰

投句先 〒956-8691 新津局私書箱15号
 柳都川柳社宛

第22回 川柳展望全国大会

日 時 4月22日(日) 10時30分開場

場 所 ホテル アウィーナ大阪

大阪市天王寺区石ヶ辻町19-12

TEL (06) 6772-1441

参加費 1500円

題と選者

席 題 「 」 早川 遯行 選
 宿 題 「乗 る」 田中 一眸 選
 「四 月」 田沢 恒坊 選
 「損 」 橋倉久美子 選
 「呼 ぶ」 福士 慕情 選
 「元 氣」 高瀬 霜石 選
 自由吟 津田 暹 選
 自由吟 新家 完司 選
 自由吟 森中恵美子 選
 自由吟 天根 夢草 選

各題2句 出句締切 12時00分

自由吟は各選者に違う句を出してください

事務局 〒567-0009 茨木市山手台4-6-3-101

TEL (072) 649-5226 FAX (072) 649-2334

主 催 川柳展望社

堺番傘川柳会創立90周年記念川柳大会

荻野浩子句集『石榴』発刊

日 時 4月21日(土) 10時30分開場

場 所 堺総合福祉会館 6Fホール

(南海高野線「堺東」下車 700m)

〒590-0078 堺市堺区南瓦町2-1

TEL 072-222-7500

宿 題 「狸 」 片岡 加代 選
 「やがて」 嶋澤喜八郎 選
 「危ない」 新家 完司 選
 「家 族」 菱木 誠 選
 「眩しい」 本多 洋子 選
 「願 う」 矢沢 和女 選

出 句 各題2句(欠席投句拝辞) 締切 12時
 事前投句なし

*3月20日までにお申し込みください。

会 費 3000円(発表誌・句集・記念品・昼食)

懇親宴 5000円

問合せ先 〒590-0157 堺市南区高尾1-346-10

荻野浩子 (TEL 072-272-1625)

主 催 堺番傘川柳会

編集後記

★火の粉降る闇 豊頼の
奈良乙女 薫風

★石黒耀著「死都日本」(講談社)はいつ起きてもおかしくない東海地震をモチーフに書かれた。20××年、霧島火山帯で噴火爆発が起こり南九州は壊滅というところから小説は始まる。科学的根拠に基づいたリアルな描写は臨場感に溢れている。地学小説として評価された2005年、日本地質学会から表彰された。1月23日、草津白根山が噴火。火山列島日本。首筋が寒くなった。

★今年吉原開業400年。古川柳研究者・小栗清吾氏から新著「吉原の江戸川柳はおもしろい」を拝受。〈江戸の男たちは、吉原が大好きだった。もてたい奴らを、遣り手が手ぐすね引いて待ち、嘘八百を並べ：「ありんす

王国」は、今日も可笑しな人々で大騒ぎ)。平凡社新書840円税別。
★文書作成に欠かせないワープロの全盛時代はいつまでだったのか。1978年に東芝が最初のワープロを発売。価格は驚くなく、630万円。1985年頃には20万円以下と手頃に。ワープロ愛好家が多い。いや多かった、というべきか。パソコンとの闘いに敗れて2002年シャープがワープロから撤退。以後ワープロ愛好家は中古品を捜すことになった。
★私自身メーカーに修理を断られた時、高瀬霜石さんから新聞の切り抜きを送られた。2013年3月11日付毎日新聞。原発事故で福島県いわき市から前橋市に避難した丹治幹夫さんを採り上げています。丹治さん経営「福島ビデオ」(電話027-269-8115)は

「二基の句碑」
平成5年8月21日、香川県大川郡白鳥町(当時)にふる里創生事業の一つとして西尾葉、橘高薫風両先生の句碑が建立されました。
「温泉や座り羅漢に寝る羅漢 葉」
「鳥一つ買うて暮らせば涼しかる 薫風」。当時は我が「おっぱこ川柳吟社」も二十余名の会員で活気に溢れていました。現在は高齢、病氣、物故者等で六名の会員がおっぱこの灯りを消すまいと頑張っています。

二十四年過ぎた今も句碑は堂々と白鳥の地に腰を据えています。真つ青な播磨灘を背景に若木に囲まれ素晴らしい景観です。二基の趣の異なる句碑の前に立つと身が震えるほどの感激を覚えます。句碑建立に東奔西走された先代松村迷観子、先代木村あきら会長を偲びながら、今年の二十五周年に何か記念になることを……会員一同考えています。
温故知新「おいでませ白鳥へ」(川崎ひかり)

ワープロ修理専門店だ。
★修理不可能と言われたワープロも、使える部品がないか点検・クリーニングもしてもらえ。住み慣れた故郷から他郷へ。震災によって運命を大きく変えられた人々を思う。あれから7年目の春。
(朱夏)

△10年ぶりに満を持して「広辞苑第七版」が1月12日に発売された。「しなみ海道」等の多少の記述ミスはあるが、新たに1万項目を追加し、総項

目数25万の厳選された大改訂である。
△「自撮り」「高倉健」「スビルバーク」「スマホ」「ニホニウム」「LCC」「東京スカイツリー」などが新たに入った。語彙に検討を加え、目まぐるしい言語変化に対応したとある。
△第六版よりも140ページ増加した。一見、分厚くて重たそうに感じたものの、実際は紙質、製本等の工夫により8cmと前版と厚さは変っていない。
△薫風先生は「広辞苑を

散歩する」とおっしゃったと先輩から聞く。電子辞書の場合は、狭い画面で探す。紙の辞書の場合は、捜したい項目だけでなく周りの言葉や慣用句も目にとめて辞書とつき合う楽しみがある。
△勿論、持ち運びに便利な「第七版」対応の電子辞書、パソコン等のアプリも既に販売されている。我々も「第七版」を十分活用したいものである。
(意彦)

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
- (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集・インスピレーション・ナビ（印象吟）への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋（本社事務所取り扱い）、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
- (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。
- (4)

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から15時までにお問い合わせいたします。

作品募集

5月号発表(3月15日締切)

川柳塔(8句) 小島蘭 幸選
水煙抄(8句) 川上大輪 選
愛染帖(2句) 新家完司 選
檸檬抄「魔法」(2句) 山口光久 共選
インスピレーション・ナビ(2句) 斉尾くにこ 共選
一路集(2句) 「なるほど」 政岡日枝子 選
「乱」 鴨田昭紀 選
初歩教室「自信」(3句) 居谷真理子 担当

6月号
檸檬抄「退屈」
一路集「タイム」「不足」
初歩教室「感謝」

本社3月句会

とき 3月7日(水) 13時開場・13時40分締切
ところ アウィーナ大阪 4階 金剛の間
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06-6772-1441
おはなし「時実新子 川柳と慟哭」
兼題「ごろん」
「隠す」
「しびれる」
「よろしく」
「予感」
会費 1000円
投句料 500円(切手可)
(各題2句以内)
小島蘭 幸選
中岡千代美 選
内藤憲彦 選
安土理恵 選
両川無限 選
坂井美智子 氏
平裕之 氏

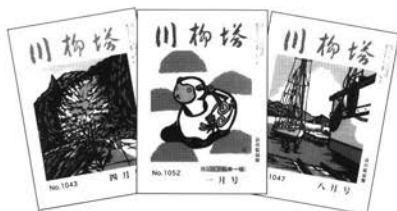
本社4月句会
5日(木) 午後1時から
兼題「遅れる」「すべて」「こだわり」
「丸い」「透明」

川柳塔WEB句会のご案内

課題「話す」くんじろう 共選
居谷真理子
締切 3月20日 発表 3月25日頃
投句料 無料
インターネットで「川柳塔」を検索しWEB句会をクリックしてご投句ください。

定価 八百円(送料83円)
半年分 五千円(送料共)
一年分 九千八百円(同)
二〇一八年(平成三十年)三月一日発行
発行人 小島和幸
編集人 木本朱夏
印刷所 美研アート
〒543-0052
大阪市天王寺区大道一丁目一四一七
花野ビル201号室
発行所 川柳塔社
電話(06)六七七九三四九〇番
振替 〇〇九八〇一四二九八四七九番

川柳・俳句・エッセイ・小説
新聞・広告・ポスター・伝票等
あなたの思いをかたちにします。



美研アート

〒530-0022 大阪市北区浪花町9-4
TEL (06) 6372-1178
FAX (06) 6372-1196
E-mail: bikenart@ea.mbn.or.jp

オニザキのプレミアムロースト

つぎま

杵つき製法の「すりごま」



袋を開けた瞬間に広がる、
香ばしい薫り。舌と記憶に
しっかりと残る、深いコク。

料理をより美味しくする

ゴマを作りたい、真つすぐな

想いから生まれた逸品。

それが「プレミアムロースト」。

素材本来の良さを余すこと

無く引き出した、オニザキの

自信作をお届けします。



株式会社 オニザキコーポレーションセルス
〒862-0951 熊本市中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL 0120-30-5050



いつまでも若々しく健やかな毎日のために

こだわりの
純手作り

鯉エキス・鯉油

豊富なDHA、EPA！

製造方法特許取得！

必須アミノ酸8種含有！



鯉（こい）エキスは、健康・美容に今話題の必須
アミノ酸を多く含んだ健康食品です。

当社のエキス、油はその優れた製造方法に特許を
取得しております。

是非一度、鯉の必須アミノ酸パワーと豊富なDHA、
EPAをお試しください。



製造・販売元

カルプ食品株式会社

〒689-0405 鳥取市鹿野町鹿野1054番地
TEL (0857) 84-3600 (代表) FAX (0857) 84-2146

<http://carp-koi.com/>

E-mail info@carp-koi.com